補助金に依存しない自立的・継続的な公民連携まちづくり活動の更なる展開を図るための基礎的調査

報　　告　　書

平成 27 年 1 月

国土交通省　都市局

補助金に依存しない自立的・継続的な公民連携まちづくり活動の更なる展開を図るための基礎的調査　報告書

＜目　　次＞

本調査の概要

１．調査概要 1-1-1

２．居心地の良い、賑わい活気のある都市空間創出に関する広報方策の検討

2.1　広報方策（シンポジウム）に関する有識者ヒアリングの実施 2-1-1
2.2　シンポジウムの実施計画 2-2-1
2.3　シンポジウムに関する広報展開 2-3-1

３．居心地の良い、賑わい活気のある都市空間創出に関する広報方策の実施

3.1　シンポジウムの開催結果（概要） 3-1-1
3.2　シンポジウムに対する評価等 3-2-1

４．普及啓発に関する成果物のとりまとめ

別冊資料

調査の目的

（１）居心地を良くし、賑わい・活気のある都市空間・歩行者空間の創出の普及・啓発を行うための広報方策を検討する。

（２）今後のプレイスメイキングの教育・普及・啓発に役立てるための成果物のとりまとめを行う。

調査の実施内容

（１）広報方策の検討

本テーマに関する有識者※へのヒアリング調査を実施しながら、その意見を反映した広報方策案（プレイスメイキングシンポジウム）を検討、立案。

（２）広報方策としてのシンポジウムの実施

「PLACEMAKING　SYMPOSIUM2014」として、3 回の連続座談会とシンポジウムを一体の企画として実施した。

【連続座談会】

○第 1 回座談会　テーマ：**ストック活用時代のリノベーションまちづくり**
　登壇者：西村浩氏（モデレーター）×清水義次氏×松井直人氏

○第 2 回座談会　テーマ：**状況やアクティビティをデザインする**
　登壇者：伊藤香織氏（モデレーター）×三浦展氏×黒﨑輝男氏

○第 3 回座談会　テーマ：**賑わいや居心地良い空間をデザインする**
　登壇者：渡和由氏（モデレーター）×鈴木俊治氏×三友奈々氏

【シンポジウム】テーマ：**ヒューマンスケールのまちづくり**

○基調講演　ヤン・ゲール氏

○ショートプレゼンテーション　ビアギッテ・スヴァー氏

○鼎談
　登壇者：北原理雄氏（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）×ヤン・ゲール氏×渡和由氏

○パネルディスカッション
　登壇者：松村秀一氏（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）×西村浩氏×伊藤香織氏×渡和由氏

（３）普及啓発に関する成果物のとりまとめ

連続座談会、シンポジウムでの登壇者（有識者）の発言や紹介された先進事例等をもとに、**居心地の良い、賑わい活気ある都市空間・歩行者空間を創出すること**に関する知見を整理し、地方公共団体（特に首長）等への普及啓発資料としてとりまとめた。

また、これについて地方公共団体の市長・副市長等に意見を伺った。

※北原理雄名誉教授（千葉大）、渡和由准教授（筑波大）、松村秀一教授（東大）、西村浩氏（(株)ワークヴィジョンズ代表）、伊藤香織准教授（東京理科大）

調査の成果

（1）広報方策検討の結果

・有識者へのヒアリングでは、「時宜を得たテーマであり、有意義である」との評価や具体的な登壇者候補に対する推薦が得られた。

・読み手の心に響く言葉としてシンポジウムの広報ツール（リーフレット）に活用できるキーワードや、会場に関するアイディアも得られた。

（2）広報方策（シンポジウム）の実施結果

【座談会・シンポジウムの成果】

○三回の**座談会で**計 175 名の人が参加するなど**予定していた定員（90 名）の二倍近い参加者が得られた。シンポジウムでも、予定していた定員（300 名）を上回る 332 名の参加者**が得られた。幅広い層の参加を得ている。

○参加者へのアンケートでは、**ほぼ 9 割以上が内容に「満足している」、「わかった」**と回答しており、満足度、理解度に高い結果が得られた。

○参加者の**ほぼ全員が、「もっと情報を知りたい」と回答**するなど、普及啓発のニーズは高いことが明らかとなった。

【広報に関して得られた調査成果】

○座談会・シンポジウムの情報入手の手段としてチラシが多く利用されている。特に自治体職員では利用率が非常に高く、参加者も全国からみられたことから、広報手段としての有効性が確認された。

○情報発信力のある登壇者等の協力が重要。

○実務を理解し説明力の高い専門家に登壇者として協力を得ることが重要。

○言葉による説得では不十分で「実際に目でみないとわからない」ことから実証事業が有効である。

（3）成果物のとりまとめ

・座談会・シンポジウム発言記録、映像記録、写真等を成果物としてとりまとめた。

（4）今年度調査で確認された課題

①特に座談会における大学関係者及び学生の参加比率が低い。シンポジウムに参加した大学関係者・学生は、参加動機について、「ヤン・ゲール氏に興味があった」とするものが多く、専門分野で著名な登壇者に誘引される傾向が高い。大学関係者、学生等への周知に対しては、有効な広報媒体を見出すことができなかった。

②今後、実例を増やすには、単なる成功例や効用の紹介だけでは届かず、実例を見せたり実証することにより理解を深めることが必要。

③リーフレットのデザインや記録映像作成でもその分野のプロの協力が重要。また、PR 上効果が高い動画等の製作には一定の予算（少なくとも 1 千万程度）も必要。

来年度の検討課題

（1）大学等の研究教育機関と連携しながらの普及啓発策の検討

⇒専門家育成の要である多分野の大学関係者や学生を運営体制に巻き込んだ普及啓発策の検討、学会やそのネットワークを活用した情報発信の強化等

（2）説明力のある実務家、専門家を核とした情報発信、交流の場づくりの支援

⇒説明力のある実務家、専門家を核としたノウハウ等の情報発信やネットワーク形成を促す交流の場づくりの支援等

１．調査概要

■ 調査の目的

補助金に依存しない自立的・継続的な公民連携まちづくり活動の更なる展開を図るための基礎的調査を行うとともに、特に都市空間の魅力の増進として、居心地を良くし、賑わい・活気を創出すること（近年、「プレイスメイキング」とよばれることもある）について、国内外の有識者等の見識をもとにして知見をとりまとめるとともに、その広報方策を検討し、戦略的な都市経営と自立的な公民連携まちづくりの推進に資することを目的とする。

このため、広報方策の一環として国内外の有識者が参加するシンポジウムを開催し、開催を通じて得られた知見をとりまとめて、今後のプレイスメイキングの教育・普及・啓発に役立てるための成果物のとりまとめを行う。

■ 調査のフロー

１）居心地の良い、賑わい活気のある都市空間創出に関する広報方策の検討

・有識者へのヒアリングを通じたシンポジウムの企画検討
・シンポジウムの実施計画立案
・シンポジウムに関する広報展開の実施

↓

２）居心地の良い、賑わい活気のある都市空間創出に関する広報方策の実施

・シンポジウムの開催（運営）
・シンポジウムの記録
・シンポジウムに対する評価の把握（アンケート）と整理

↓

３）普及啓発に関する成果物のとりまとめ

・シンポジウムで得られた知見のとりまとめ

２．居心地の良い、賑わい活気のある都市空間創出に関する広報方策の検討

【　本章のサマリー　】

・「居心地の良い、賑わい活気のある都市空間、歩行者空間の創出」の普及啓発を行うための広報方策として、有識者へのヒアリングを行い、これを踏まえてシンポジウムの企画を立案した。
・結論として、平成 26 年 9 月～11 月にかけてそれぞれにテーマを設定した 3 回の連続座談会を開催し、座談会のモデレーター等を登壇者とするシンポジウムを平成 26 年 11 月 28 日にこの分野における研究者・コンサルタントとして第一人者であるデンマークのヤンゲール氏を招いて開催することとした。

２．１　広報方策（シンポジウム）に関する有識者ヒアリングの実施

（１）ヒアリング実施状況

「居心地の良い、賑わい活気のある都市空間、歩行者空間の創出」（プレイスメイキングと呼ばれることもある）について、広く国民へのアピール、自治体の首長等、まちづくりを担うリーダーへの啓発を行うため、この分野における研究者、コンサルタントとして第一人者であるデンマークのヤン・ゲール氏を招聘するシンポジウムの開催を企画した。

この企画に関して下記に示す有識者へのヒアリングを実施し、シンポジウムの登壇者や構成、議論のテーマ等について意見や提案を伺った。

図表 1　有識者ヒアリングの実施状況

日程	ヒアリング先	趣旨
平成 26 年 6 月 18 日	千葉大学名誉教授　北原理雄氏（1 回目）	企画素案への意見、ヤン・ゲール氏への仲介依頼、登壇候補者の推薦
平成 26 年 6 月 27 日	筑波大学芸術系環境デザイン領域准教授　渡　和由氏（1 回目）	シンポジウム企画素案への意見、登壇候補者の推薦
平成 26 年 7 月 2 日	東京大学教授　松村　秀一氏	シンポジウム企画素案への意見、登壇候補者の推薦
平成 26 年 7 月 10 日	筑波大学芸術系環境デザイン領域准教授　渡　和由氏（2 回目）	シンポジウム企画構成案の確認
平成 26 年 7 月 14 日	千葉大学名誉教授　北原理雄氏（2 回目）	シンポジウム企画構成案の確認
平成 26 年 7 月 18 日	(株)ワークヴィジョンズ代表取締役　西村　浩氏	シンポジウムへの登壇依頼
平成 26 年 7 月 23 日	東京理科大学准教授　伊藤　香織氏	シンポジウムへの登壇依頼

図表 2　シンポジウムの企画素案（平成 26 年 6 月時点）

シンポジウム企画案　メモ

１．開催の趣旨、ねらい

・ヒューマンスケールで居心地のよい都市空間や、人々が街に出て生き生きと交流し、賑わうまちが求められている。しかし、プレイスメイキング等、このような手法や考え方によるまちづくりは、日本において未だ認知度・理解度が低く、今後、広く国民へのアピールや、自治体の首長等、まちづくりを担うリーダーへの啓発を行っていく必要がある。

・そこで、この分野における研究者・コンサルタントとして世界的に著名なヤン・ゲール氏と、国内で公共空間の魅力創造等に関わる研究者や実務家を招いたシンポジウムを開催し、あわせてその情報発信を行うことにより、プレイスメイキング等に関する先進的な知見の共有と普及啓発を図る。

・加えて、各分野の専門家が交流する機会を設けることにより、シンポジウムをきっかけに、プレイスメイキングに関する新たな集合知を創造していくことを期待する。

２．テーマ

・（仮）「都市空間の魅力」

タイトルはあくまで仮のもので、国内外の様々な分野の専門家が参加して意見交換を行うことにより、プレイスメイキング等の理論と実践に関して、多面的に掘り下げていくことを狙いとする。

３．開催時期

・平成２６年１０月末～１１月中旬

・ヤン・ゲール氏の来日できる都合を最優先して調整する。

４．場所

・東京（会場は未定）

５．プログラム素案

第一部：**ヤン・ゲール氏　招待講演**　（基調講演：40 分～1 時間程度）

第二部：パネルディスカッション　（1 時間半程度）

〇コーディネーター：北原　理雄先生

〇パネリスト：　ヤン・ゲール氏

および国内の専門家※３～４名程度

※学際的な領域であるため、既存の学会等の枠にとらわれず人選。

例えば、松永安光氏、鈴木俊治氏、渡和由氏、西村浩氏など

シンポジウム等における映像等を編集し、普及啓発用の DVD 等を作成することも検討。

終了後、懇親会を開催。

以　上

（２）有識者へのヒアリング結果

１）千葉大学名誉教授　北原理雄氏（第１回目）

日　時：　平成 26 年 6 月 18 日（水）14：00～14：45
場　所：　北原名誉教授宅
参加者：　千葉大学名誉教授　北原理雄氏
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所

Ⅰ．ヤン・ゲール氏を招致したシンポジウムについて

【趣旨説明】

・前掲「シンポジウム企画案　メモ」に基づき説明。
・実は施策を取り巻く環境は逆風である。平成 25 年度の行政レビュー公開プロセスにおいて、税理士・会計士等から「オープンカフェなど要らない」と言われ、施策の存亡の危機だった。（「成功事例の横展開を図るべき」という話を踏まえ、制度改正した。）それだけならまだしも、実は都市・土木の専門家ほど「日本には合わないのではないか」等と言うことがある。居心地良い賑わい活気のある都市空間など要らないと。1960 年代以降の都市の問題意識が共有されていない。現代の都市行政の根幹に関わる本施策の必要性に対する専門家の認識が非常に薄く、事態は深刻である。
・そこで、都市局幹部等とも相談し同意見に至ったのだが、本調査では、首長等の胸に響くＰＲをすることとした。そして企画提案を募ったところこのような案をいただいた。ついては、北原先生の御力を賜りたい。（国交省）

＜シンポジウム開催について＞
・シンポジウムの企画案を拝見した。大変結構な主旨だと思う。
・ヤン・ゲール氏は、最近ご多忙なので、ゲール氏の日程次第ではないか。ただ、お年も召しているので、健康状態と日程に問題なければ気軽に来てくれると思う。
・私からヤン・ゲール氏に今週中にメールで連絡を取る。本日お持ちいただいた英文の企画案を送っていただきたい。
・ほかに、企画全体に対して何かアイディア等あれば、お伺いしたい。（国交省）
→シンポジウムのアイディアは、ゲール氏に直接聞いてもよいかもしれない。

＜シンポジウムのパネリストについて＞
・ゲール氏が来たら、ぜひコーディネートをさせてもらいたい。
・日本で、ヤン・ゲール氏と近しいのは、慶応大学の中島直人先生や、ダルコラドビッチ先生。ラドビッチ氏は、慶應の学生と自由が丘でゲール氏の手法を試したりしている。
・実務家では、名古屋の OPENCAFE 実験のコーディネートをしており、もとはスペーシアのコンサルタント、現名古屋学院大学の教授の井澤知旦氏は実務に基づいた話をしてくれると思う。工学院大学の倉田直道先生も実務の人。どちらかをメンバーとしてもよいのでは。
・建築、都市計画だけでなく、経済でも面白い視点の人はいると思う。

＜広報ツール（映像資料）について＞
・予算次第だが、コペンハーゲンに行くと、プレイスメイキングを現場で説明しながら案内してくれるので、そのような映像を収録すると臨場感がありわかりやすいだろう。
・まちの見方やスペースの作り方に関する意見を日本で撮らせてもらうのはどうか。（NSRI）

→2006 年にゲール氏が学生を連れて来日し、墨田区の京島を案内したところすごく面白がってくれた。ヒューマンスケールを壊さずにできるといいねと言っていた。

→世界のヒューマンスケールのまち BEST10 の 4 位に東京が入っていた。これまで印象に残っていた場所があれば、そこを再訪し話をしてもらうことはできるかもしれない。（国交省）

Ⅱ．その他

・近年も精力的に活動はしている。このシンポジウムでやる気になった自治体の首長が取組みを実施し、それをまた 2～3 年後にシンポジウムを開いて話をできるといい。

・その他、飛行機の座席予約、食事・お酒の好み・苦手、など接遇に関するアドバイスを頂いた。

以　上

2）筑波大学准教授　渡和由氏（第１回目）

日　時：　平成 26 年 6 月 27 日（金）　10：00～11：15
場　所：　筑波大学 環境デザイン研究室
参加者：　筑波大学准教授　渡和由氏
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所

Ⅰ．ヤン・ゲール氏を招致したシンポジウムについて

【趣旨説明】　省略

＜シンポジウム開催について＞

・**了解した。**11/27、28 は大学の推薦入試があるため厳しいが、**28 日であれば調整可能**。15 時からであればぎりぎり参加できる。ヤン・ゲール氏の基調講演は聞けない可能性がある。時間については、学内での状況を確認して連絡する。

＜シンポジウムのパネリストについて＞

・学識では、**日大の**岸井研究室で助手をやっていた卒業生の**三友奈々先生はブライアントパークに関するプレイスメイキングについて論文を執筆**している。現在日大で助教として授業も持っているので、**学識として良い**かと思う。実践として、筑波大学のアートアンドデザインプロデュースという演習授業を担当し、行政団体と一緒に、小学生や地元とワークショップを実施していた。その演習授業では、病院や大学内での学生の居場所づくりを行っていたので、まちなかのプレイスメイキングに通じるものがあると思う。
・工学院大学の倉田直道先生も建築学会の学術懇談会の資料でプレイスメイキングについて書かれていた。公園の自主管理など、市役所と協働して遊具や造園など上物の整備管理を行っている。また、ニューアーバニズムにも造詣が深い。
・**実務家では、佐賀のわいわいコンテナをプロデュースした西村浩氏**は、九州大学と協働で、新規住宅地と近接する商業施設の活性化・在り方などをスタディしており、**適任**と思う。
・富山のグランドプラザの運営をやっていた山下裕子氏や、市の担当者の京田憲明氏（岸井先生と懇意にしている）も考えられる。
・また、元大阪大学、現近畿大学の鈴木毅先生は、居場所だけでなく、その場所をどう居こなすか、居合わせるかという“居方”という言葉を使って、海外などでも研究を行っている。
・その他、具体的な名前を挙げられないが、社会学、心理学方面でも居場所つくりの視点での研究がされていると思うので、面白いと思う。また、実際にカフェなどを運営している人なども良いのでは。
・東大の松村秀一先生は、先日シンポジウムで鈴木氏と対談されており、候補として考えている。（国交省）
→**松村先生は**よく存じている。建築の利用可能性、構想力など提案されているので、**候補の一人ではあると思う。**
・リノベーション関係では、ブルースタジオの大島さんなどがいる。但し、**リノベーションは一つの方法に過ぎないので**、プレイスメイキング＝建築リノベーションとの誤解につながらないよう、**パネリストのバランスに配慮が必要**。
→様々な分野・専門の人が、「居心地の良い場づくり」に向かってそれぞれにアプローチしている。その認識を共有し新たな発展のきっかけにすることも、シンポジウムに期待している効果の一つ。その意味で、幅広い領域から候補者を選びたいと考えている。（NSRI）

・**三浦展氏は他分野をつなぐハブ的な存在なので、面白い**と思う。また、吉祥寺のコミュニティデザインセンターのような施設を企画したスタジオ-L の西上ありさ氏や、若手建築家の成瀬友梨氏なども良いのでは。
・成瀬氏が行っているプロジェクトとしては、柏の葉のＫＯＩＬというコワーキングスペースの企画がある。もう少しオープンになると良いが、あのような手法も居場所つくりの一つと考える。つくば市でも駅前商業ビル内に大学とつくば市との連携で、大学のサテライト研究室を設置し、学生や研究者などが集まりラボやカフェを展開しようとしている。場所は商業ビルだが、公共空間にも展開し、“設営だけ”で良い場所をつくろう、という考え方である。
・リノベーションもその考え方に近いと思う。どちらかというと建築空間の話によりがちだが、設営・建設・運営が連携して初めて成り立ち、良い場所を作ることができる。ヤン・ゲール氏の主張も同様かと思う。都市計画、建築にも共通のプラットフォームが必要。
→行政からしても、プレイスメイキングが分からないからベンチの設置一つにしても良い空間をつくることができないのが現状である。（国交省）
→**行政の首長にプレイスメイキングの話をするととても興味、理解を示す。必要とされている考え方であり、今がそのチャンス**と思う。
・経済分野でいうと、政策研究大学院の松谷明彦先生。2000 年頃、著書にて人口減少社会の問題と、都市の在り方を経済学、社会学の面から展望を提唱している。そのような視点もあってよいかと思う。（国交省）
→面白いと思う。プレイスメイキングは、福祉としての意味も大きい。経済効果や人口減少、少子化対策など大きな視点でもディスカッションすると非常によい。

＜渡先生的“プレイスメイキング”＞
・**プレイスメイキングは“人間のビオトープ”を形成するもの**であり、重要なテーマと考えている。
・猪苗代湖など水辺でもプレイスメイキングを取り組んでいる。スポーツリクリエーションなどの民間企業とも連携をし、自然の中に静かな居場所をつくるという取組を行っている。都市では、広島や大阪などでは川での新しいライフスタイルが起こっている。都市の水辺として、河川、運河などは人のビオトープには適所である。
・土木空間にはその発想がないので、土木の先生にプレイスメイキングの話をすると非常に興味を持つ。バラエティのある人選をすると面白いディスカッションになると思う。
・プレイスメイキングの担い手として、防犯環境設計やスポーツマネジメントも深く関係してくる。スポーツ関係の先生やスポーツ関係の会社、広告代理店等が連携して提言をまとめようとしている。
・例えば、調節地などもレクリエーション活用できる。まちなかとスポーツの視点からでれば、仙台の長町など施設の脇にレストランを併設するなど、スポーツによるまちづくりに取り組んでいる。
→地域再生の専門家・久繁哲之介氏が同じ視点でまちなかにテニスコートを組み込むことを提唱している。（国交省）

・アメリカでは医療費削減の視点からレクリエーションが重要視されている。Google 本社周辺にはスポーツ施設や公園が多く立地しており、環境が整っている。リチャードフロリダが提唱しているように、クリエイティブ層にはそのような需要がある。
・**ギャザリングプレイスとして、歩道上や車道上などのカフェスペースがクリエイティブ層に大変好まれる傾向がある**。ピクニッククラブ的な手法、発想が日本には重要であり、注目し

ている。**ピクニックは、いつでもどこでもできる手法であり、パブリックスペースの使い方、可能性を体現する良い視点**である。つくばでも学生とつくば市と連携してピクニックをやっているが、非常に好評である。その意味では、**東京理科大の伊藤香織先生もよい**。

・霞ヶ浦周辺自治体では、民間企業と連携し、買い物困難者に対して、遊休地や公共スペースに“動く市場”を設営してプレイスメイキングを行おうとしている。動態を用いたプレイスメイキングという可能性もあると考えている。その場合、体制が重要になる。

・大学の演習授業では、幼稚園や病院で、子供や高齢者、患者の居場所づくりを実践している。病院では手術室の前に安心できる空間つくりを検討した。**ブライアントパークの考え方と同様、ベンチではなく動かせるイスを設置し、自分で空間をつくりあげるということが重要**である。医学界でも注目されており、オファーを多数いただいている。

・今回は、プレイスメイキング普及の新しいきっかけをつくるということで、とても期待をしている。

＜広報ツール（ガイドブック・パンフレット）について＞

・今年度業務では、自治体の担当者向けのガイドとなる冊子等を作成する予定。これをきっかけとして、今後、一見全く異なる分野からのアプローチでもプレイスメイキングという観点では共通することがわかる、プレイスメイキング大全のようなものをつくる動きに発展すると面白いのではないか。（NSRI）

→作りたいと考えていたので、良いと思う。海外でも需要もある。日本の事例でできれば親近感がわく。一学会で議論しても発展しない。多分野の視点を持ち合わせる幅のあるガイドブックができると良い。

以上

3）東京大学教授　松村秀一氏

日　時：　平成 26 年 7 月 2 日（水）　16：30～18：00
場　所：　東京大学　工学部 11 号館８階
参加者：　東京大学教授　松村秀一氏
国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所

Ⅰ．ヤン・ゲール氏を招致したシンポジウムについて

【趣旨説明】　省略

＜シンポジウムへの出席について＞

・11/28 の午後は空いている。予定しておく。

＜シンポジウムのパネリストについて＞

・北原先生から推薦のあったダルコラドビッチ氏はよく知っている。元メルボルン大学で、10 年ほど前に研究員として東大に来てもらった。その頃は、サステナブルな都市環境づくりをテーマに研究していた。その後、慶應の隈研吾氏の後のポストで慶応大学に行っている。設計、地区計画、都市空間の持続再生学の専門家。色々な場所で国際 WS などをやっていた。年齢は 56－57 歳で自分や渡先生と同年代。ユーゴスラビア人で祖国はないが、家族は今日本に住んでいたと思う。人柄はとてもよい。日本語は話せないが、英語は話せる。メルボルンにおけるまちづくりの話はしてもらえるかもしれない。
・伊藤香織氏と一緒にピクニッククラブをやっている太田浩史氏もよく知っている。太田氏とダルコ氏もよく知った仲。
・倉田先生は都市計画分野の専門家。
・鈴木毅氏は自分の同級生。鈴木氏は少し違った視点の人。人が何かをやっている、それを見る人がいる、というアフォーダンス、環境心理的な視点から『居方』『主』といった研究をしている。近年は、人が集う／居場所が生まれる道具として、インドネシアの『パレパレ』という道具に注目している。渡先生が建物だとしたら、鈴木氏は群の話、パタンランゲージ的な話ではないか。
・渡氏、鈴木氏は２人とも、もともとの視点は郊外住宅地。北九州魚町の取組みなど、まちなかに視点をあてているのは清水氏や嶋田氏。住宅地・まちなか・過疎地と、それぞれ違った話題があり、バラバラのことを話していてもつながらないので、話し合いの焦点・対象地を絞った方がよいのでは？

→テーマは、『まちなか』のにぎわいづくりとしようと考えている。渡先生も吉祥寺の話をしていただきたいと考えている。（国交省）

→わかった。

・日本の中でも東京は圧倒的に特別な地区。全国の首長向けということであれば、**普通の地方都市を踏まえた場所について語れる人がいるといい**のでは。例えば嶋田氏など。大学の先生ばかりだとリアルな面白さがない。

→**実務家としては、西村氏**を考えている。渡先生から推薦もいただいている。（国交省）

→**西村氏は元気だし、おもしろいしいい**と思う。

・高齢の男ばかりのパネルディスカッションは面白くない。**女性パネリストが必要**。２名くらい入れてはどうか。
・**伊藤香織氏もいいのでは**。30～40 代の人の方が、勢いがあってよい。自分や、渡先生、ダル

コ氏よりも、若い人の方がいいと思う。太田氏も話は難しいので違うかもしれないが。

・女性パネリストの案としては、大阪大の小浦久子氏、東大の窪田亜矢氏、千葉大の岡部明子氏などがいる。小浦氏は、あるべき姿があってそこを踏み外さない議論をする人。

・話を聞いていて、いつも勉強になるなと感じるのは岡部氏。以前は、小さくまわる経済についての話を聞いた。自分の裁量で、届け出のない営業をしている人が５割という現在のジャカルタの日常が、実は将来の先進国のあるべき姿ではないかという指摘をしている。地域の経済は温かいお金、グローバルな経済は冷たいお金でまわっているといっていた。立山でのまちづくりにもかかわっており、人を巻き込むことがとても上手な人。岡部さんは面白いと思う。

・プレイスメイキングの先進事例としてコペンハーゲンという話があったが、正直ピンとこなかった。自分が住みたいところはと考えるとやはり、パリとかの方が魅力的に感じる。鈴木毅氏も、居方の研究で半年間パリとニューヨークに住んでおり、現在も京都に住んでいる。

・パリやニューヨークのような街には豊かさを超えたおもしろさがある。**豊かさを超えた面白さについて話せるのは清水義次さんのような人**ではないか。

・生活実感からスタートしない議論は、リアリティがない。人間レベルの心地よさが重要。

・全国各地には面白いことをやる人たちが潜在的に存在している。熱海の atamista 市来広一郎氏や、長野のナノグラフィカの増沢珠美氏など。あてのない U ターン、地域の中でまわる経済、というのは新しい動きだと思う。

・学識では東大の大野秀敏先生も面白いが、若い世代という観点では当てはまらない。

・渡氏、西村氏ということであれば、境界を超えるということが今回のキーワードだと思う。

・若くて元気な女性のパネリストがいるのがいいと思う。女性視点からすると、共感できるのも反発を感じるのも、心に響くのは女性パネリストの意見。

・首長へのアピールということでは首長に入ってもらうこともよいかもしれないが、人選が難しい。伊丹市の藤原保幸市長や、佐賀市の秀島敏行市長など。佐賀市は成功例なのでいいと思うが、そもそもの状況がとても厳しい状況だったので、どうなのかというのもある。

・実務家で、基調講演で面白い話をしてくれる人をもう１人いれるのもいいかもしれない。

→本日のお話を踏まえて内容を整理、調整後改めてご連絡させていただく。（国交省）

＜座談会について＞

・**パネリストを１名入れた座談会を事前にやる**ことも考えている。（国交省、NSRI）

→**いいアイディアではないか**と思う。

・座談会をやる場合、東大の講堂をお借りして実施することは可能か。（国交省）

→できると思う。東大であれば、学生などが気軽に見に来ることもできる。

＜会場について＞

・**伊藤謝恩ホールはいい**のではないか。

・隈研吾氏が設計したダイワユビキタス研究所というホールも最近できている。同氏の紹介があれば借りられるのでは。農学部にある一条ホールも、農学部の先生にお願いすればほぼタダで借りられると思う。

以上

4）筑波大学准教授　渡和由氏（第 2 回目）

日　時：　平成 26 年 7 月 10 日（木）　16：30～18：30
場　所：　筑波大学 環境デザイン研究室
参加者：　筑波大学准教授　渡和由氏
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所

Ⅰ．シンポジウム・連続座談会について

【趣旨説明】　省略

＜シンポジウム・連続座談会の開催について＞

・多様な方の推薦頂き、多様な視点で議論していただけるシンポジウムを開催したいので、鼎談（トークセッション）とパネルディスカッションの２部に分けて意見交換の場を設けたいと考えている。基調講演の後の鼎談はヤン・ゲール氏を交えてプレイスメイキングの本流の部分である「居場所づくり」について意見交換をして頂く。その後のパネルディスカッションでは、多様な視点から意見交換をし、プレイスメイキングの視点を広げていく場にしていきたいと考えている。（NSRI）

・また、関連企画とし、パネルディスカッションでパネリストをして頂く方たちをホストにした座談会を行うことも考えている。シンポジウムのパネルディスカッションの内容へ展開できることや、広報の意味もあり、シンポジウム開催前の 8～10 月に月 1 回開催予定。（NSRI）

・環境デザインや都市デザインの分野である本流としてのプレイスメイキングと、建築から飛び出したタイプのプレイスメイキングである、西村浩氏やリノベーションスクールなどの動きがある。リノベーションスクールの HEAD 研究会では、松村先生や松永先生を中心に、場づくりを研究している関係で、**松村先生にパネルディスカッションのコーディネーターになって頂こうと考えている。**（NSRI）

→**松村先生は、三浦展氏と吉祥寺コミュニティデザイン賞の審査員をやっているし**、松永先生もニューアーバニズムの研究をやっているので、**良いと思う。**

・**構成については、良いと思う。西村先生と伊藤先生は建築という同じ分野であるが、方向性が違うので、面白い話が聞ける**のではと思う。**伊藤先生には、ピクニッククラブに関した話題提供を頂きたい。**

・28 日は大学の許可が出そうなので、このままのプログラムで大丈夫である。

＜連続座談会について＞

・連続座談会の企画については、今後検討予定。２時間で概ね３名を予定している。渡先生の回については、三友さんを予定している。その他ご推薦があればお聞かせ願いたい。（NSRI）

→倉田先生が考えられる。**その他都市デザインや環境デザインの実務家の方がよい**かと思う。**三浦さんということも考えられるが伊藤先生の回でも良い**と思う。

・三友さんや三浦さんへのお声がけは、我々の方で企画書を作成し、渡先生からお声がけを頂く方がスムーズかと思うのでお願いしたい。（NSRI）

→了解した。

・座談会は、その記録集のようなものをシンポジウムで配布することを検討しているが、積極的に聴衆を入れて開催することは考えていない。大学を会場にした場合は学生を呼んで聞いてもらうことも考えられる。夕方～夜にかけての開催を考えている。

・8 月下旬は出張等が入りそうなので、9 月か 10 月にしてほしい。8 月の第 1 回は西村さんからスタートするのが良いのではないかと思う。
→了解した。（NSRI）
・座談会の会場については、まだ決まっていない。推薦があればお聞かせいただきたい。協力していただける場所があれば、オープンテラスのあるところも考えられる。（NSRI、国交省）
→茗荷谷に筑波大の出先校舎がある。また、オープンテラスではないが、**吉祥寺でハーモニカ横丁の地主がやっているカフェ（コミュニティデザイン賞の会場となっているカフェ）がある**。費用がかかるが、貸切も可能と思う。その他 PARCO そばのコミュニティセンターには会議室もある。
・ブックカフェも最近よくある。PARCO 内のレストランで三浦氏と吉祥寺スタイルのお披露目会を開催した。お客さんは 20～30 名程度。雰囲気は良かった。伊藤さん、三浦さんの回でやると良いかもしれない。
・下北沢、高円寺、自由ヶ丘などプレイスメイキング的な場所でやるのも良い。つくばにも貸切ができる雰囲気の良いカフェもあるが、都内の方が良いかと思う。
→下北沢には、B&B（BOOK&BEER）があり、雰囲気も良い。（NSRI）
・今後北原先生にご説明に上がり、ご了解を頂いたうえで、人選、会場等詳細を検討していきたいと考えている。（NSRI）

＜プレイスメイキングに関わる話題＞
・九大の柴田建先生の研究室と西村浩氏と一緒に、商業施設を併設した住宅地のリノベーション前提の開発に関する研究を行っている。その住宅地ではパーツを売るメーカーがリノベ活動を行っている。スケルトン状態での受け渡しとなり、新規からリノベをスタートしている。
・中古住宅市場は 20 億円となり、今や倍となり、一番の盛り上がりを見せる市場となっている。（国交省）
・アメリカのシルバーレイクでは、ボヘミアンモダンというスタイルがある。ミュージシャンが廃れた住宅地の住宅をリノベーションして住み始めたことから、サブカル系の人が住み始め、リノベーションを繰り返し、その住宅の奇抜さ、面白さがその住宅地のウリになっている。そこにはアソシエーションもある。ショップやカフェ、事務所、音楽スタジオなど多様な用途があり、毎日のようにどこかでイベントを行っている。ライフスタイルそのものを売り出しているイメージ。
・日本でもその兆しが見えるので、すでに始まっていると思う。住宅メーカーとは真逆の方向、サブカルの人が入ってくると面白い展開が考えられると思う。
・つくばにもそのような流れがある。（今月の BRUTUS でも美食都市・つくばとして特集があった。）農地に参入するなど、昔のヒッピーのような流れ。そのような人は食にこだわる。遠くても高くてもこだわりや質が良ければきちんと時間、お金をかける。地産池消も大事な要素。
・つくばでは、フィンラガンという 500 円で本物志向のおいしいワイン、ビール、食べ物を提供するお店がある。テーブルをシェアして滞在するような狭いお店ではあるが、とても価値の高いものを提供している。その他自転車屋やこだわりのカフェ、パン屋など多様なコンテンツが増えている。このようなお店のオーナーに話を聞いてみても面白い。
・能動的に MAP が作られていくまちは良いまちである。それぞれの人の居場所 MAP ができる、というイメージである。空間を固定的に創造するわけでなく、情報によって個々人のプレイスメイキング、動くプレイスメイキングなど、能動的に作られていくことが大事。
・大事なのは空間ではなく、そこで何が生まれるか、何が広がっているか、ということ。それを重要視する流れになり、SNS で広がり、その価値観や連鎖が広がっている。

・なぜ郊外への流れが生まれているのかというのは、自由度が高いことに加え、土地代に対する売り上げを考えなくて良いからというのも大きな要因。（NSRI）
・郊外は隠れた価値や自然などたくさんの資源があり、プレイスメイキングと合致し、価値が浮上している。
・民間企業は、遊休地などの土地活用の際にプレイスメイキングの視点にとても興味を持つ。
・イニシャルコストよりランニングコストがとてもかかる。それを生み出す仕組みが必要。（国交省）
→サービスコストの原価計画を会計学の先生と研究会を実施している。良い活動や知識があると継続性が高まる。
・遠野では女性がいないため、少子化が問題になっている。女性にとって良いプレイスがないからではないかと感じている。女性の活躍が必要。
→女性の視点は大きい。女性の価値観は男性と違い、どこでも人が集まればそれぞれの居場所をつくることができる。研究課題として面白い。（NSRI）
・経済学では、職があれば人が集まるといっているが、それがショッピングモールのような職なのか、志のある小さな良いお店が点在することなのか、で大きく違う。
・**プレイスメイキングは公的マインドであるが、補助金への依存ではない**。（国交省）
→リノベーションスクールを率いる清水義次氏は、民間が公的なマインドを持ってしっかりお金を生み出すということを常に説いている。（NSRI）
→**同感である。**そのような人が増えていると思うので、良い方向に動いていくと思う。話題提供はできないが、きっかけになるような話をしたいと思う。
・これからはまちづくりに個人で関わっていく時代である。個人が知識を持つ必要が出てくる。公開講座などそのようなビジネス面での知識を得る仕組みが必要になってくる。
・また、主体的に活動をしていこうという人は、健康志向である。本当の意味でのスマートウェルネスという社会になり、これからの福祉は予防医療の視点が必要になる。プレイスメイキングを考えるとウェルフェアにつながる。福祉は“幸せ”を目指すものであり、マインドと行動を引き出すものである。
・これまで広告代理店などはマスを動かす手法でやってきたが、個を動かす方法がわからないで困っている。その際、プレイスメイキングの視点から話をすると、とても興味を持つ。多くの分野の人が課題を抱え、その手法がわからないでいる。その際にプレイスメイキングがとても大事な視点になってくると実感している。
・色々な拡散したアイディアがあるので、まとめるなどうまく伝える方法を考えていただきたい。
→リノベーションでも、不動産オーナーの気持ちにどう訴えかけるかが大事になる。今はお金の話から攻めているが、別の視点から彼らを動かすことができるかもしれない。（NSRI）
・**厚木の商店街でも**まさにそのような事例があった。ずっと道路活用を渋っていた商店街の地主が、**私の“みんなの椅子”の話にとても興味を持ち、椅子を並べることに**なった。
・**みんなの椅子はつくばの市民団体が所有する 200 脚の椅子のこと**である。県内の色々なマーケットやイベント、結婚式など、何かあれば貸し出し（有料）を行っている。つくば市は歩道上使用の条例ができるので今後活用したいと考えている。
・公共施設（群馬県のふるさと交流施設）の中でも、同様の取り組みを検討した。イベントなど色々な場面で使われているようである。茨城空港に隣接した“空の駅”でもオープンスペースをつくり椅子を設置する予定。ブライアントパークの状態をいろんなところで実現したいと考えている。リノベーション的取り組みでも新規事業の中でも可能な取り組みである。
・椅子でまちを変えるという話など面白い。そのような話題となると、倉田さんからの話題提

供が難しくなってしまうので、類似する取り組みをしている実務家の方で座談会の候補者を検討したいと思う。（NSRI）
→確かにその通りである。その方が良いかと思う。

以上

5）千葉大学名誉教授　北原理雄氏（第 2 回目）

日　時：　平成 26 年 7 月 14 日（月） 16：30～17：00
場　所：　北原名誉教授宅
参加者：　千葉大学名誉教授　北原理雄氏
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所

Ⅰ．シンポジウムのプログラムと座談会の企画について

シンポジウム、鼎談、パネルディスカッションの内容、および座談会の企画について、NSRI より説明を行った。

＜開催概要について＞

・内容了解した。よいと思う。（北原先生）
・鼎談の流れ等については、別途お時間をいただき相談させていただきたい。（NSRI）
　→了解した。10 月中に、渡先生との事前打合せの機会を設けていただきたい。(北原先生)
・鼎談のシナリオは作らなくてもよいと思う。事前に渡先生と相談する。自分が司会で、渡先生に突っ込んでもらってはどうかと考えている。（北原先生）
・近年、リノベーションによるまち再生の動きは進んでいるが、まだ建物のリノベーションに留まっている。僭越ながら、この動きを主導している人たちに、プレイスメイキングの考えた方を学んでほしいということも、１つの狙いである。（国交省）
　→鼎談の中で、日本でヒューマンプレイスを作っていくためにはここを活かしたら、というアドバイスももらえるかもしれない。渡先生とも相談する。（北原先生）
・会場での待ち時間の際に、『人間の街』に載っている写真のような、実際のプレイスメイキングの写真を、スクリーンに映したいと考えている。（国交省）
　→事前にゲール氏に伝えておけば、問題ないと思う。原版もくれるかもしれない。（北原先生）
・鼎談後は、貴賓席を準備する。途中のブレイクタイムや、パネルディスカッション後のレセプションは、交流の機会として確保するので、是非ご参加いただきたい。（国交省）
　→了解した。シンポジウムについては、学生や市民にも伝えておく。（北原先生）

＜会食について＞

・シンポジウム前日（27 日）は、ゲール氏、北原先生、渡先生、同時通訳者が一緒に夕食等とりながら話をしたらよいと思う。通訳の人も、参加すれば呼吸がわかるのでは。（北原先生）
・もし都合があわなければ、シンポジウム当日（28 日）に、ゲール氏、北原先生、同時通訳者の３名で昼食をとる。（北原先生）
・国交省、NSRI も同席させていただきたい。会食は日本語で行っていただきたい。[1]（国交省）
　→了承した。（北原先生）
・ゲール氏は食事内容には拘らないと思う。自宅へ来た際も何も問題なかった。日本食でもいいと思う。デンマークは魚を生でも食べるので、刺身も大丈夫。会食が決まったら、何を食べたいか聞けばよいと思う。（北原先生）
・ゲール氏は、タバコは吸わない。お酒はとてもよく飲む。デンマークのお酒（シュナップス）が好き。日本酒も飲む。

---

[1] 結果として英語で実施。

＜書籍出版について＞

・会場での出版物販売等に関して、鹿島出版社へ連絡を取りたいと考えている。（NSRI）

→「人間の街」の担当のワタナベ氏へ一報入れておく。シンポジウムの概要等の内容をまとめたものを、8 月中位を目途にメールでいただきたい。（北原先生）

Ⅱ．その他

・今年出版したゲール氏の本は、慶応大学の中島直人先生が翻訳をすると聞いている。（北原先生）

・これまで、ゲール氏が来日する際、デンマーク大使館への連絡等はどうしていたか教えていただきたい。（国交省）

→これまで、デンマーク大使館が間に入ったことはない。ゲール氏の意向で決めてはどうか。ゲール氏は形式的なことには拘らない人なので大丈夫だと思う。（北原先生）

6）株式会社 ワークヴィジョンズ代表　西村 浩氏

日　時：　平成 26 年 7 月 18 日（金） 10：00～11：00
場　所：　株式会社 ワークヴィジョンズ　事務所
参加者：　株式会社 ワークヴィジョンズ西村 浩氏、田村 柚香里氏
国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所

Ⅰ．ヤン・ゲール氏を招致したシンポジウムについて

【趣旨説明】　省略

＜開催概要について＞

・リノベスクールでの取組みにより点から面へのまち再生は動き始めているが、リノベスクールは建物のリノベーションに留まっている。そのため、もっと公共空間のリノベーションを進めたい、ということも本プログラムの大きな狙いである。（国交省）

→リノベスクールの中で自分は、都市側からバックアップをする役目だと思って取組んでいる。リノベスクールのメンバーの話を聞いていると、建物側・民間側に偏っている。それを『リノベーションまちづくり』と言っているが“まちづくり”につながるには、危うさがある。都市戦略をバックに持っていないと、リノベーションまちづくりは成立しない。（西村氏）

・雑司ヶ谷でのお聞きした 90 分の西村氏のプレゼンで、「都市の課題解決をするためには、行政の役割をはっきりとさせることが重要」、というお話をお聞きし、西村氏は本プログラムには欠かせない方だと感じた。わいわいコンテナの話は以前から勉強していたが、都市構造から解きほぐした記事を拝見していなかったので、不勉強だったと感じた。（国交省）

・昨日も山梨に行って話をした。函館など、最近は地方都市で話をすることが多い。（西村氏）

→安倍政権の最大の課題は、今の好景気の流れを地方にも広めるということ。場合によって本テーマは、地方創生と言ったテーマにも跳ねる可能性もあると思う。（国交省）

・同様のことを西村が常々いっているが、地方都市ではなかなか決断に踏み切れない、踏み切りにくい、というのが大きな課題。国交省から打ち出してもらえるとありがたい。（田村氏）

・アメリカと日本の違いは、政治の違い。そして、日本はそれを乗り越えられない。誰も言えない、という状況がある。（西村氏）

→今回は、それを変えていくための材料を作りたいと思っている。まずは首長に響くように、プレイスメイキングとは何かを端的に示し、首長が市民や国民に語りかける材料としたい。シンポジウムでプレゼンいただき、プレゼン資料もご提供いただきながら、首長に伝わるものを作るのがゴールと考えている。（国交省）

・シンポジウムは伊藤謝恩ホールで行う。シンポジウムでは、プログラムの間に 15 分ほどコーヒータイムを入れ、せっかくの機会なので、交流の場にもしたいと考えている。（国交省）

・当日は 17:45 に終わり、18:00～19:30 までレセプションを企画している。長丁場となるが、是非レセプションまでご参加いただきたい。（NSRI）

→了解した。（西村氏）

・いつから本プログラムを企画していたのか。（西村氏）

→６月頃から始まっている。もう少しありていな広報計画を企画募集したのだが、NSRI からヤン・ゲール氏を呼ぶという提案をいただいた。都市局幹部も含めて非常によい提案をいただいたと思っている。（国交省）

・プレイスメイキングに関するシンポジウムは勉強になる。日本ではなかなかない。（田村氏）
・アメリカは受益者負担だから、パブリックスペースに対する民間の意識の違いも大きいのだと思う。（西村氏）

＜第１回の座談会メンバーについて＞

・座談会メンバーは、首長にピンポイントに伝わる人、もしくは、国民向けに影響力の大きい人。共感を持ってくれる人であれば、範囲を広げていいと考えている。（国交省）
・実務的には、清水氏と西村氏の日程があう日の中で、もう１名を決定していくという形としたい。清水氏の予定は 8/26 午後、8/30 午後 or 夜、9/3 午後、9/4 午後。（NSRI）
→8/26 午後と、9/3 の 15：30 までであれば可能。（田村氏）
→その両日の予定を確保しておいていただき、もう１名の調整を進めさせていただく。(NSRI)
・こういう企画はいままでなかった。今回、分野をまたいでいるから面白いと思う。清水氏とは東洋大やリノベスクールで話はしているが、対談はこれまでなかった。（西村氏）
・最終的には、ゲール氏のシンポジウムが本番、それまでに色々な人にお会いしました、という仕立てにしたい。SOHO やブルックリン、グリニッジビレッジのようなまちがいい、ということを大まか共通項としてお持ちの人であれば、全くジャンル外の人でも良い。（国交省）
→ジャンル外の人のほうが面白いと思う。違う方向から同じことにアプローチしている人の方が面白いと思う。（西村氏）
・座談会の聴衆にはどういう人がくるのか。（西村氏）
→座談会そのものは、カフェの一角等の小さなスペースで、多少オーディエンスがいるかいないか、という状況で開催し、記録を取らせていただき、コンテンツに活用させていただければと思っている。座談会の広報は、大々的に全国に告知するというより、メンバーの大学の先生方から学生への広報など、口コミで広げることを考えている。（NSRI）
・座談会は、観客を大々的に集めるイメージはしていない。対談していただいて、それを記録させていただく、ただ、せっかくなので運のいい方は見にこれる、というイメージ。最後のシンポジウムは大々的に広報したいと思っている。（国交省）
→了解した。(西村氏)
・建築家だと乾久美子氏とかは面白い。でも、ちょっと違う方がいいかなとも思う。(西村氏)
・むしろ行政的な立場の固い人でも面白いかもしれない。せっかく出てきたので、話そう！という思い切りのある行政の人。どんなに言っても決断されない、というのは、地方政治に関わってくること。また、交通問題に関わってくることはすごく重要だと思う。（田村氏）
→東大の羽藤英二先生はどうか。ただ、忙しそうなので難しいか。(西村氏)
・**誰がいいか考える**。話が面白い人がいい。(西村氏)
・お話が面白くて、印象に残る方がよい。著書を色々出されている人の中では、経済や財務省の OB で、松谷明彦氏が人口減少社会におけるまちづくり、リノベーションによるまちづくりについて述べていた。個人的な付き合いの中では、音楽家の方でもまちの外の空間を楽しむ人がたくさんいる。まちづくりということをあまり意識せず、セルフリノベをしてお店をやっている人は渋谷や裏原宿にもたくさんいる。渋谷でタマリバ空間をつくる、社交空間を作る、ということを常々言っている方や、下町の空間はいいんだよ、という方がいる。LOTUS の山本宇一氏も、サードプレイスの話をしていた。（国交省）
→話が狭くなっても仕方なく、大きな話につながっていかないといけないと思う。個別事例の紹介にとどまると面白くない。戦う行政みたいな人がいるといい。地方にはいると思うが、地方ローカルの話になってしまう。（西村氏）

→地方発というのも、いいと思う。若い係長などがよりいいのではと思う。（国交省）

→そういう豪快なことができる人は、地方にいても、ちゃんと世界が見えている人なのでは。話が十分、そうですよね、ということで共感できるのだと思う。（NSRI）

＜その他の座談会メンバーについて＞

・今回の座談会のメンバーでもある鈴木俊治氏が、以前翻訳した本に、PPS の『パブリック空間を魅力的にする』という本がある。(国交省)

→この本は 10 年ほどの前のものだが、この時点から、いろんな分野の人が色々な方向を向いて検討している。今回は、なるべくそういう人が一堂に会する機会としたい。案外、お声掛けをすると、ほぼ同じことを視野に入れながら、お互い知らなかった、ということもある。副次的な効果として、シンポジウムの場が交流の場になればいいと考えている。(NSRI)

＜プレイスメイキングの考え方について＞

・1 つ 1 つの敷地を、点から面へ、部分から全体へ、という意味ではリノベーションスクールとバルセロナの多孔質戦略は非常に似たものがある。歩行者空間を改善すると、その周辺の重苦しい殺伐とした空間がメカニカルにパっと明るく変わるので、プレイスメイキングによる公共空間再生の役割はとても大きい。（国交省）

→歩行者空間の価値が上がると土地の価値、地域の価値が上がる。それが乗り越えられないので、地方都市は困っている。車社会からの脱却がとても難しい。既得権益もある。（西村氏）

・都市局の中では、都市計画や都市計画施設のようなマスタープラン型の施設の担当が多く、民間のまちづくり、プレイスメイキング型の取組みを支援しようというのは、気付いてはいるが、まだ庁内でも小さな取組み。局内全体に対しても、居心地の良いまちづくり、にぎわいをつくることが大切だということを発信できる。（国交省）

・これだけ、皆が研究しているのに、なっていない、という原因には、乗り越えなきゃいけない、違う大きな壁があるのではないかなとも感じる。（西村氏）

→我々の都市計画審議会ではないかなとも思う。有識者からもたまにこういう話をちょっとずつしたり、再開発ではなくて居酒屋みたいなところがいい、ということを話してもらったりする。本当にやるべきことは何かが分かると、仕事の仕方が少し変わってくると思う。（国交省）

→こういう場所にしなきゃいけないとか、こういう空間にしたいとか、そのためにどういう仕組みにしたらいいか、ということを逆に上っていかなくてはいけないのだと思う。逆に上らせようとするのだけど、上の国交省の方から戻ってくると、既存のルールにあてはめられていってしまうということは、往々にあるのかもしれない。（西村氏）

・公開空地を作っても鎖がはられていたり、ベンチがあっても、ホームレスが座れないように座りづらくしていたり。禁止マークばかりがあるのも大きな課題。（国交省）

→禁止マーク使用禁止にしたらいいと思う。赤色使用禁止、青色だけでサインを作る、とか。（西村氏）

→いろんな根深い問題が関わっている気がしている。公共空間に対するデザインの教育の問題もあり、公共空間の利用に関する市民の意識啓発の問題もあり、何か起きるとすぐクレームにつながるという風土、というのもある。行政機構的縦割りの話もあるし、補助金漬けにしている、という状態もある。全てが絡んで、一つ動かしても他は動かない、ということになっているのかもしれない。（NSRI）

・こんなに分かりやすくて、先がみえているのに、何故できないのか。そんな話をしたい。プ

レイスメイキングの分析とか状況とか制度は、既にわかっている。そこに日本が到達できない理由と、どうしたらいいのかということが議論できるとすごく良いと思う。事例紹介では面白くないと思う。（西村氏）

・補助を出すのではなくて、やっていない人の負荷をかけるとか、そういうこともあるのでは。政治的な問題だが。（田村氏）

・本来指定管理制度などもっと緩くてよい。せっかく民間に委託しているのに、行政がやっていることと同じことをしている。そこにもっと自由度はないのかな、と思う。（西村氏）

・もう一歩なんだろうと思う。表面的に制度を真似ているけれど、実際の運用としては今までと同じことをしている、というような気がする。（NSRI）

＜佐賀のわいわいコンテナについて＞

・佐賀のわいわいコンテナの、自由に走りまわっていいよ、自由に商売していいよ、という仕組みにも興味があり、県と市にも別途ヒアリングをしている。（国交省）

→わいわいコンテナ１が、一時期民間で活用されて、結局、その土地を市が取得した。そこは、緑地推進課の管理で、公園ではなく、市所有の土地・空地という位置づけで、民間に任せて維持管理し、緑地をつくる、ということをしている。条例広場までの手続きを踏んでいる時間もなかったため、もっと手前の緩やかなやり方をとっている。ただ、それを議会等で説明した方たちは、相当な手腕を発揮したと思う。（田村氏）

・見て、明らかにいいものが身近にあれば、相当頑張って取り組んでいけるのだと思う。目の前に好事例がない自治体にとっては、それはほとんど不可能な話。行政財産の公園にした瞬間、商売はだめ、何もしてはだめ、ということになってしまう。制度面と事業収支の課題があり、投資に対する回収期間と、維持管理の費用を小さくても稼げるということが明らかになると、ちゃんと収支もまわるし、制度上も落ち着くところがあるのだと、感じてもらえるのでは。そうすると、佐賀ルールが全国でいつでも使えるものになるのだと思う。（国交省）

・わいわいコンテナ２は、去年は、参加費 200 円とか 300 円とかの小さいプログラムを３日に１回、100 回程度の頻度で行ったり、チャレンジコンテナの利用料の売り上げの５％を回収し、その貯めたお金で、芝生のメンテナンスができている。（田村氏）

・できればあのプロジェクトだけで、独立財産で、自走していける組織となるといいと思う。空き地と空き店舗は地方都市には山ほどあるので、地方都市は歓迎すると思う。（国交省）

・まちが駐車場だらけというのは、地方都市みんな共通の悩みのようだ。（西村氏）

・わいわいコンテナ２の歩行者専用道の隅に、コンテナでシェアオフィスを作る。西村は、その通りの空き店舗とシャッター店舗を今年開ける、という意気込みをもって取り組んでおり、そういう意気込みも大事だと思う。誰かが口に出していうと、みんなが動く。（田村氏）

・まちを何とかするには覚悟が必要。覚悟のない人がいるから困る。覚悟のない政治家は、何のために政治家になったのかと思う。（西村氏）

Ⅱ．その他

・別予算だが、関連企画で、全国の都市行政団体に配布している新都市という月刊の機関紙に連載で、連続座談会とシンポジウムを２ページ程度連載させていただけないかということを相談している。8 月も 26 日開催であれば次号にぎりぎり間に合う。（国交省）

7）東京理科大学准教授　伊藤香織氏

日　時：　平成 26 年 7 月 23 日（水）　17：00～18：00
場　所：　東京ステーションホテルトラヤ CAFE
参加者：　東京理科大学准教授　伊藤香織氏
　　日建設計総合研究所

Ⅰ．シンポジウムと座談会の企画について

【趣旨説明】　省略

＜開催概要について＞

シンポジウムと座談会の企画案とプログラム、登壇者について NSRI より説明を行い、意見交換を行った。

・座談会は、具体的に何をどうすればよいか。（伊藤先生）
　→議論を収束させようというものではない。座談会の内容は記録を取らせていただき、シンポジウムの資料として配布、HP への公開をしようと考えている。その後の取扱いは、まだ検討中だが、色々な角度からまとめたいと思っている。（NSRI）
・モデレーターが得意ではないため、議論の収拾がつけられるか不安。（伊藤先生）
　→単純な事例紹介では面白くないので、制度上の問題や政治のことを含め話したい、と西村氏は言っていた。第２回も脱線しない範囲で自由に話してもらうのでは、と考えている。（NSRI）
・三浦氏は、ご自身の活動分野と今回のテーマでは少し異なるのでは？（伊藤先生）
　→三浦氏には、吉祥寺スタイルなどで行われていることをお話しいただこうと考えている。黒崎氏には、ご自身の活動のお話等をいただきたいと考えている。（NSRI）
・三浦氏は、吉祥寺は近年、ダメになってきてしまっている、ファーストフードのまちになってしまう、と言っていた。（伊藤先生）
・以前、丸の内の IDEE のイベントでピクニックについて話をしたことがある。その時は黒崎氏はいらしていなかったので、面識はない。（伊藤先生）
・第２回の座談会は、事前に音合わせはしなくてもよい気がする。（伊藤先生）
・シンポジウムと座談会の関係は？（伊藤先生）
　→各座談会には、シンポジウムのパネリストに１名ずつ入っているので、座談会の内容をパネルディスカッションで振り返ってもらうのもよいのではと考えている。黒崎氏や三浦氏に聞きたいことがあれば、ご連絡いただければ事前にお伝えしておく。（NSRI）
・座談会では、ちゃんと、空間の質の話をしたいと思う。（伊藤先生）

＜第２回の座談会の日程について＞

・平日は夕方、休日は日中で、20 日（土）～26 日（金）で候補日をいただきたい。（NSRI）
　→ちょうどその週から授業が始まる。21、26、27、28 日は OK。23 日は 16：30 まで授業なので、夜であれば可能。22 日は千葉のアセス委員会の時間が未定なのでそれ次第。（伊藤先生）

Ⅱ．その他

・リノベーションスクールの嶋田氏が、非常勤講師で来ている。学生みんなでリノベーションの物件を考えるというテーマで、嶋田氏が購入した実物件を対象に、３か月で、チームに分

かれてリノベ案の検討している。

・リノベーションスクールの取り組みは、まちづくりとしてはとても盛んだと思うが、どういう空間を誰が作るかという、空間の話は抜けていると感じる。（伊藤先生）

・誰がどういうモチベーションで取り組むかをうまくくすぐることが重要。まち建築という本を出版するが、そこでも、モノづくり、事づくり、場づくりという３点について記している。（伊藤先生）

・2011 年秋にシビックプライド会議を開催した。その際、西村氏、三浦氏のほか、学校の先生やフォントづくりの人など、様々な分野の人が集まって意見交換を行った。（伊藤先生）

・**社会的課題解決においてすごい人が集まっている感じ、色々な知恵が集まっている感じこそが、都市だと思う。ピクニックはすごく都市的だと思っている。その場を共有して一緒に作れることがまちづくりではないか**と思う。（伊藤先生）

２．２　シンポジウムの実施計画

（１）シンポジウムの企画

平成 26 年 9 月～11 月にかけて合計 3 回の連続座談会と 11 月 28 日にシンポジウムを開催することを企画した。企画概要は下記の通り。

■連続座談会の開催

日時/会場	テーマ/登壇者
第 1 回 9 月 3 日（水）13 時 30 分 3331 Arts Chiyoda	**『ストック活用時代のリノベーションまちづくり』** 西村　浩 氏／㈱ワークヴィジョンズ代表　※モデレーター 清水義次 氏／㈱アフタヌーンソサエティ代表 松井直人 氏／三菱地所㈱顧問
第 2 回 9 月 21 日（日）13 時 30 分 国連大学レセプションホール	**『状況やアクティビティをデザインする』** 伊藤香織 氏／東京理科大学 准教授　※モデレーター 三浦　展 氏／㈱カルチャースタディーズ研究所 代表 黒﨑輝男 氏／流石創造集団㈱ 代表
第 3 回 10 月 28 日（火）18 時 00 分 吉祥寺グランキオスク	**『賑わいや居心地良い空間をデザインする』** 渡　和由 氏／筑波大学 准教授　※モデレーター 鈴木俊治 氏／ハーツ環境デザイン 代表 三友奈々 氏／日本大学 助教

■シンポジウムの開催

開催日時	平成 26 年 11 月 28 日（金）14 時 30 分～19 時 30 分（開場　13 時 30 分）	
開催場所	東京大学 伊藤謝恩ホール　（東京都文京区本郷 7-3-1）	
テ ー マ	『ヒューマンスケールのまちづくり』	
プログラム	基調講演	Jan Gehl 氏／ゲール・アーキテクツ
	ショートプレゼンテーション	Birgitte Svarre 氏／ゲール・アーキテクツ
	鼎談	Jan Gehl 氏／ゲール・アーキテクツ 北原理雄 氏／千葉大学 名誉教授（コーディネーター） 渡　和由 氏／筑波大学 准教授
	パネルディスカッション	松村秀一 氏／東京大学 教授（コーディネーター） 西村　浩 氏／㈱ワークヴィジョンズ代表 渡　和由 氏／筑波大学 准教授 伊藤香織 氏／東京理科大学 准教授
	レセプション	自主的な参加による会費制懇親会※

※本調査業務外の実施プログラム

速報版ちらし（表）

PLACEMAKING FORUM 2014

プレイスメイキング　連続座談会

9月-10月に計3回、連続座談会を開催します。
シンポジウムのパネリストに、各座談会のモデレーターを務めていただき、
専門分野やアプローチが異なる多様な専門家を交えた、熱い議論が行われます。

PROGRAM プログラム

第1回　『ストック活用時代のリノベーションまちづくり』
西村 浩氏（㈱ワークヴィジョンズ 代表）× 清水 義次氏（㈱アフタヌーンソサエティ 代表）× 松井 直人氏（三菱地所㈱ 顧問）

第2回　『状況やアクティビティをデザインする』
伊藤 香織氏（東京理科大学 准教授）× 三浦 展氏（文化・都市空間研究者）× 黒﨑 輝男氏（渋谷創造集団㈱ 代表）

第3回　『賑わいや居心地良い空間をデザインする』
渡 和由氏（筑波大学 准教授）× 鈴木 俊治氏（ハーツ環境デザイン 代表）× 三友 奈々氏（日本大学 助教）

VENUE 会場

日時：2014.09.03（WED）13:30-15:00（開場 13:00）
場所：Arts Chiyoda 3331 コミュニティスペース
／東京都千代田区外神田6丁目11-14

日時：2014.09.21（SUN）13:30-15:00（開場 13:00）
場所：国連大学 レセプション・ホール
／東京都渋谷区神宮前5丁目53-70 国連大学ビル 2F

日時：2014.10.28（TUE）18:00-19:30（開場 17:30）
場所：吉祥寺グランキオスク
／東京都武蔵野市吉祥寺本町1-33-10 丸二ビル 2F

INQUIRY お問い合わせ

《主催者》国土交通省 都市局
《事務局》㈱日建設計総合研究所（担当：西尾、井上、小林）
E-mail：nsri_info@nikken.jp　#placemaking で検索

※入場は無料です。各会とも先着順となっております。定員が30名程度ですので、定員に達した場合は、入場をお断りする場合がありますので、あらかじめご了承ください。（なお、定員は予告なく変更する場合があります。）
※座談会で登壇者から聞いてみたい内容などがございましたら、事前に左記までお寄せください。

速報版ちらし（裏）

PLACEMAKING SYMPOSIUM 2014

プレイスメイキング　シンポジウム

『　ヒューマンスケールのまちづくり　』

旅行などで訪れた都市の素敵な景観に、思わず「わぁ」と歓声をあげたことはありませんか？
行きつけの場所やまちに行くことは、いつもワクワクしたり、ホッとしたりしませんか？
そのような驚きや、ワクワクしたりホッとしたりする秘密は何でしょうか？
都市空間の魅力の増進として、賑わいを創出し居心地を良くすることは「プレイスメイキング」と呼ばれています。
「ヒューマンスケールのデザイン」が最も基本的な哲学です。
本分野の第一人者であるヤン・ゲール氏と、国内で空間の魅力創造等に携わる研究者や実務者をお招きして、
「ヒューマンスケールのまちづくり」とは何か、どうしたらよいかをテーマに、お話をしていただきます。
連動企画として、さらに他分野にまたがる研究者・有識者による座談会を事前に開催いたします。

PROGRAM　プログラム

2014.11.28（FRI）　14:30 ～ 19:30（開場 14:00）

第１部　基調講演　14:40 ～

Jan GEHL 氏（ヤン ゲール）

1936年生まれ。ゲール・アーキテクツ主宰。1960年代からコペンハーゲンやN.Y.の低廉空間をヒューマンスケールな歩行者空間にデザインしてきた第一人者。
主な著書に、『人間の街』、『建物のあいだのアクティビティ』など。

鼎　談　15:20 ～

Jan GEHL 氏（ヤン ゲール）× **北原 理雄 氏**（キタハラ トシオ）（千葉大学 名誉教授）× **渡 和由 氏**（ワタリ カズヨシ）（筑波大学 准教授）

第２部　パネルディスカッション　16:15 ～

松村 秀一 氏（マツムラ ショウイチ）（東京大学 教授）× **渡 和由 氏**（ワタリ カズヨシ）× **西村 浩 氏**（ニシムラ ヒロシ）（㈱ワークヴィジョンズ代表）× **伊藤 香織 氏**（イトウ カオリ）（東京理科大学 准教授）

第３部　レセプション・交流会（参加自由、会費制）　18:10 ～

VENUE　会場

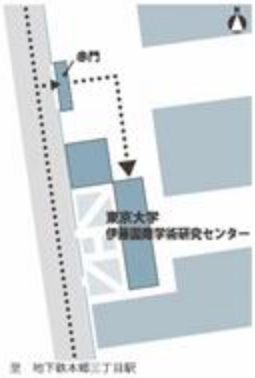
東京大学 伊藤謝恩ホール

東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学本郷キャンパス内
赤門から入って直ぐ右側突きあたり

ACCESS　アクセス情報

METRO　丸の内線 本郷三丁目駅（徒歩 8分）
大江戸線 本郷三丁目駅（徒歩 6分）

BUS　都バス 茶 51 駒込駅南口 又は 東 43 荒川土手操車場前行 東大（赤門前）バス停



INQUIRY　お問い合わせ

《主催者》国土交通省 都市局
《事務局》㈱日建設計総合研究所（担当：西尾、井上、小林）
E-mail：nsri_info@nikken.jp　　#placemaking で検索

※シンポジウムは無料、レセプションは会費制となっております。
※シンポジウム及びレセプションの申し込みは先着順となっております（定員 300 名）。
左記のメールにてお申込みください。
（氏名、所属（勤務先等）、電話番号、シンポジウム・レセプションの出席についてご記入の上、メールの件名に「シンポジウム希望」と明記してください。）

リーフレット（表）

リーフレット（表）

（２）連続座談会の実施計画

１）第１回座談会　実施計画書

１．概要

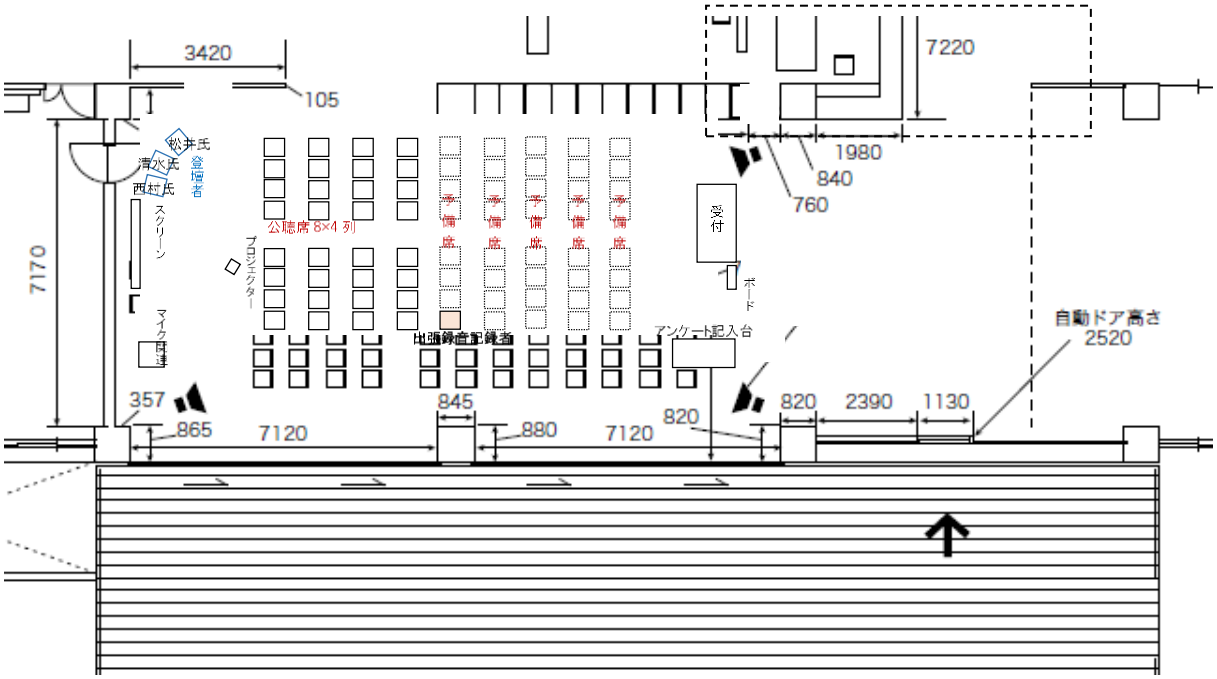
【開催日時】：2014 年 9 月 3 日（水）　13 時 30 分～15 時 00 分（開場　13 時 00 分）
【開催場所】：3331 Arts Chiyoda
【テ ー マ】：『ストック活用時代のリノベーションまちづくり』
【登 壇 者】：西村浩氏（㈱ワークヴィジョンズ代表）（モデレーター）
清水義次氏（㈱アフタヌーンソサエティ代表）
松井直人氏（三菱地所㈱顧問）

２．プログラム・進行予定表

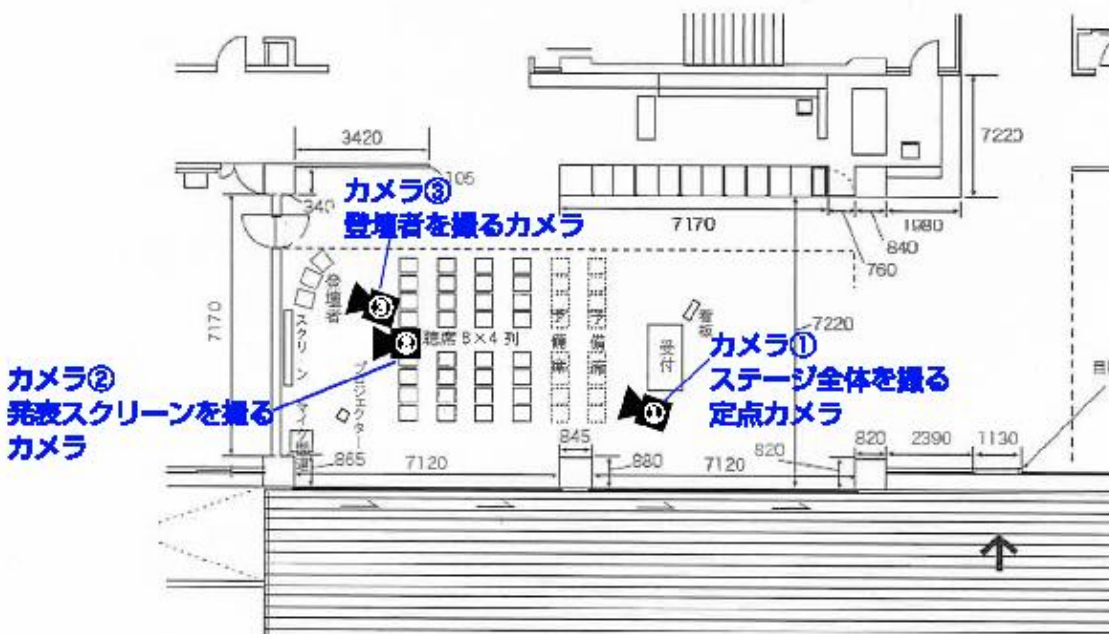
・開会、閉会の進行は、NSRI が担当する。
座談会そのものの進行は、モデレーターにお願いする。

時　間		内　容
10：30－		■国交省一部担当者会場入 ■スタッフ集合（NSRI7 名） ・初期状態でセットされたテーブルを移動 ・座席セット（40 席程度）来場状況で調整（～70 席） ・受付のセッティング ・プロジェクターセット、PPT 試写
11：00－		（映像班、カメラ班会場入） ・映像班（映像撮影会社）ビデオカメラセット ・会場確認（カメラマン）
(12：30－)		（国交省会場入り）
13：00	30 分	■受付開始（2 名） ・名簿チェック ・当日資料（リーフレット、アンケート）の配布 ⇒封筒なし
13：10	20 分	■登壇者会場入り（奥フリースペース又は 2 階会議室） ・事務局との最終確認、調整（司会）
13：30		■開会（趣旨、登壇者紹介　司会）
13：30－15：00	90 分	■座談会（進行：モデレーター　西村浩氏） １）登壇者プロフィール紹介（自己紹介）10 分×３ ２）ディスカッション　60 分
15：00		■閉会（司会） ・次回以降の座談会、シンポジウムの紹介 ・アンケートへのご協力依頼
15：00－16：00	30 分	・受付でのアンケートの回収 ・片付け・撤収（NSRI4 名＋国交省＋映像班）

３．会場設営図（１Ｆコミュニティスペース）



会場設営図２（ビデオカメラ位置）



４．受付要領

１）受付

・当日受付にて、氏名を記入いただき、属性に〇付け（参加人数と属性把握のため）⇒2 列

・受付した方から、下記配布資料を手渡し。
（予備の筆記用具はアンケート記入台に設置）

・受付には看板ではなく、イーゼルでパネルを設置。
（右図）イーゼルは NSRI 内のものを移動。

↑A2 サイズでパネル化

２）配布資料

・本格版リーフレット

・アンケート（内容は別紙参照）

５．記録作成要領

１）映像記録

・３台のビデオカメラを設置して、全景、登壇者、スクリーンを同時に記録する。
（カメラ配置場所は会場設営図を参照。カメラ位置は、当日、必要に応じて再調整。）

・映像は、ノーカット、編集なしで DVD 焼き付け。

２）写真撮影

・記録撮影用の外部に委託して、写真を撮影する。フラッシュ使用。20～30 枚程度。（全景、登壇者アップ、登壇者 3 名のみ等）

・翌日、通常解像度（1 カット２MB 程度）仕様の撮影データを国交省にお渡し（9 月 10 日新都市原稿作成用）

３）音声記録

・日常のＩＣレコーダにより記録する。（NSRI）

・テープ起こし会社の出張テープ起こしを依頼（翌日仕上げ）し、記録作成データが入稿したら、無修正で国交省へ提出する。（新都市原稿作成用）

・他方で、納品データをチェックし、逐語記録化したものをもとに、座談会記録を作成。（報告書用）

２）第２回座談会　実施計画書

１．概要

【開催日時】：2014 年 9 月 21 日（日）　13 時 30 分～15 時 00 分（開場　13 時 00 分）

【開催場所】：国連大学レセプションホール

【テ ー マ】：『状況やアクティビティをデザインする』

【登 壇 者】：伊藤香織氏（東京理科大学 准教授）（モデレーター）

三浦 展氏（㈱カルチャースタディーズ研究所 代表）

黒﨑輝男氏（流石創造集団㈱ 代表）

２．プログラム・進行予定表

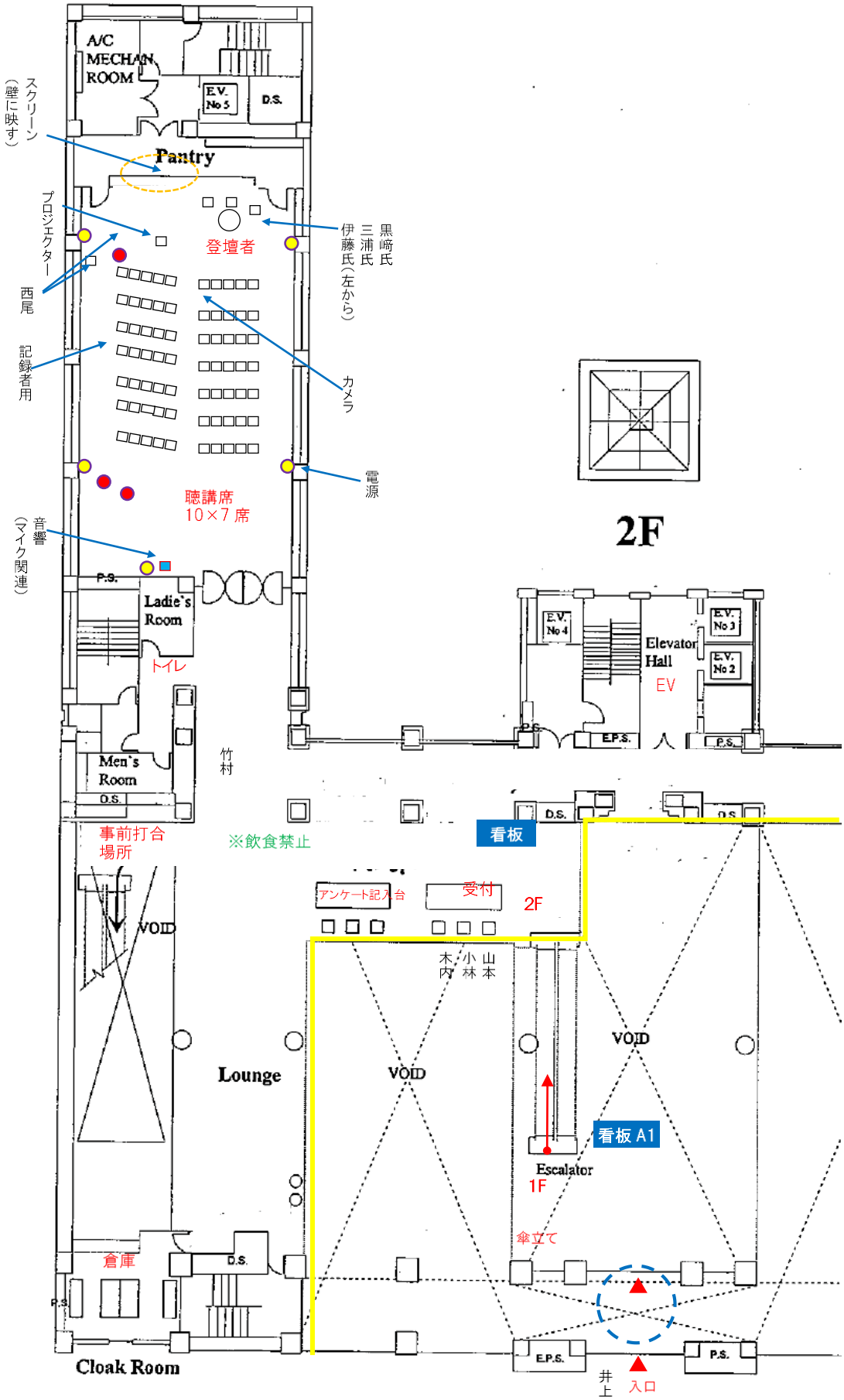
・開会、閉会の進行は、NSRI が担当する。

座談会そのものの進行は、モデレーターにお願いする。

時　間		内　容
10：00－		NSRI→国連大学へ移動（NSRI4 名）
10：30－		※一緒に入館。 ■国交省一部担当者会場入 ■スタッフ集合（6 名） ・登壇者テーブル・座席をセット ・座席セット（75 席程度） ・受付のセッティング ・プロジェクターセット、PPT 試写
11：00－		（映像班、カメラ班会場入） ・映像班（映像担当）ビデオカメラセット ・会場確認（カメラマン） ※車両２台は地下駐車場から搬入
13：00	30 分	■受付開始（3 名） ・名簿チェック、名札配布 ・当日資料（リーフレット、アンケート）の配布、封筒無 ■建物外で誘導 1 名（13 時で交代）
13：10	20 分	■登壇者会場入り（２Ｆホール外のスペース） ・事務局との最終確認、調整（司会） ・謝金、送迎要否確認（1 名）※打合せ終了後、机片づけ ・登壇者用飲み物準備（1 名） ・登壇者入場誘導（1 名）
13：30		■開会（趣旨、登壇者紹介　司会）
13：30－15：00	90 分	■座談会（進行：モデレーター　伊藤香織氏）
15：00		■閉会（司会） ・次回以降の座談会、シンポジウムの紹介 ・アンケートへのご協力依頼
15：00－16：00	30 分	・受付でのアンケート・名札回収（3 名） ・タクシー待機場での誘導（1 名） ・登壇者お見送り（2 名） ・片付け・撤収（NSRI6 名＋国交省＋映像班）

その後、ファーマーズ・マーケットの撤収まで現地調査。またデータを授受。

３．会場設営図（２階レセプションホール）



４．受付要領

１）受付

・当日受付にて、氏名、所属、国籍[2]を記入⇒3 列

・参加者リストは国連大学に後日、提出（厳重管理）

・受付した方から、配布資料と名札を手渡し。
（予備の筆記用具はアンケート記入台に設置）

・2F 受付にパーテーションにパネルを張り付ける。
（右図）1F エスカレーター横にも設置。

↑A1 サイズでパネル化×2 枚
（図は第１回のもの）

２）配布物

・本格版リーフレット

・アンケート（内容は別紙参照）

・参加者用名札（ケースのみ要返却）

５．記録作成要領

１）映像記録

・３台のビデオカメラを設置して、全景、登壇者、スクリーンを同時に記録する。
（カメラ配置場所は会場設営図を参照。カメラ位置は、当日、必要に応じて再調整。）

・映像は、ノーカット、編集なしで DVD 焼き付け。

２）写真撮影

・記録撮影用の外部に委託して、写真を撮影する。フラッシュ使用。20～30 枚程度。（全景、登壇者アップ、登壇者 3 名のみ等）

・翌日、通常解像度（1 カット２MB 程度）仕様の撮影データを国交省にお渡し（新都市原稿作成用）

３）音声記録

・日常のＩＣレコーダにより記録する。（NSRI）

・テープ起こし会社の出張テープ起こしを依頼（26 日仕上げ）し、記録作成データが入稿したら、国交省へ提出する。（新都市原稿作成用）

・他方で、納品データをチェックし、逐語記録化したものをもとに、座談会記録を作成。
（報告書用）

[2] 国連大学への入館記録作成のため確認

３）第３回座談会　実施計画書

１．概要

【開催日時】：2014 年 10 月 28 日（火）　18 時 00 分～19 時 30 分（開場　17 時 30 分）

【開催場所】：吉祥寺グランキオスク

【テ ー マ】：『賑わいや居心地良い空間をデザインする』

【登 壇 者】：渡 和由氏（筑波大学 准教授）（モデレーター）
鈴木俊治氏（ハーツ環境デザイン 代表）
三友奈々氏（日本大学 助教）

２．プログラム・進行予定表

・開会、閉会の進行は、NSRI が担当する。
座談会そのものの進行は、モデレーターにお願いする。

時　間		内　容
13：30－①		NS 準備品ピックアップ→グランキオスクへ移動（3 名） ※ワゴンタクシー
14：30－②		グランキオスク カフェにて当日会場設営会議 （3 名）
15：00－		■スタッフ集合 （6 名） ・登壇者テーブル・座席をセット ・座席セット（設置可能分） ・受付のセッティング ・プロジェクターセット、PPT 試写
15：30－		（映像班、カメラ班会場入） ・映像班（映像担当）ビデオカメラセット ・会場確認（カメラマン）
17：30	30 分	■受付開始（2 名） ・名簿チェック ・当日資料（リーフレット、アンケート）の配布 ■誘導（建物入口：1 名）17：15～18：15 ※交代
17：50	10 分	■登壇者会場入り ・最終確認、調整（司会）　　・謝金（1 名） ・登壇者用飲み物準備（1 名）
18：00		■開会（趣旨、登壇者紹介　司会）
18：00－19：30	90 分	■座談会（進行：モデレーター　渡 和由氏） １）登壇者プロフィール紹介（自己紹介）10 分×３ ２）ディスカッション　60 分
18：00		■閉会（司会） ・次回以降の座談会、シンポジウムの紹介 ・アンケートへのご協力依頼
19：30－20：00	30 分	・受付でのアンケート回収（2 名） ・片付け・撤収（NSRI6 名＋国交省＋映像班）

３．会場設営図

スクリーン設置

登壇者３名

受付はカフェ入口に設置

受付

ここからカフェ。

雑貨屋レジ。当日は、ここで、
コーヒーやパンを販売
（手前は雑貨屋）

来客用駐輪場

居住者用駐輪場

４．受付要領

１）受付

・当日受付にて、氏名、所属を記入⇒２列

・受付した方から、配布資料を手渡し。

・2F 受付にパネルを掲示。

（右図）店舗入口にも掲示。（Ａ２）

↑A1 サイズでパネル化

（図は第１回のもの）

２）配布物

・本格版リーフレット

・アンケート（内容は別紙参照）

５．記録作成要領

１）映像記録

・３台のビデオカメラを設置して、全景、登壇者、スクリーンを同時に記録する。

（カメラ配置場所は会場設営図を参照。カメラ位置は、当日、必要に応じて再調整。）

・映像は、ノーカット、編集なしで DVD 焼き付け。

２）写真撮影

・記録撮影用の外部に委託して、写真を撮影する。フラッシュ使用。20～30 枚程度。（全景、登壇者アップ、登壇者３名のみ等）

・翌日、通常解像度（1 カット２MB 程度）仕様の撮影データを国交省にお渡し（新都市原稿作成用）

３）音声記録

・日常のＩＣレコーダにより記録する。（NSRI）

・テープ起こし会社の出張テープ起こしを依頼（31 日仕上げ）し、記録作成データが入稿したら、国交省へ提出する。（新都市原稿作成用）

・他方で、納品データをチェックし、逐語記録化したものをもとに、座談会記録を作成。（報告書用）

（３）シンポジウムの実施計画

プレイスメイキングシンポジウム　実施計画書

Ⅰ．スケジュール（４日間の全体行程）

Ⅱ．鼎談関係者事前打合せ〔会食（11 月 26 日）〕

１．鼎談関係者事前打合せ

２．写真撮影（ホテルオークラ[3]・メインロビー）

〔３．会食（ホテルオークラ内）〕

Ⅲ．エクスカーション（11 月 27 日　神楽坂街歩き）

１．プログラム・出席者

２．写真撮影

Ⅳ．シンポジウム

１．会場計画

１）受付

２）みんなのイス（ホール外観覧席）

３）舞台設営計画（基調講演・プレゼン／鼎談／パネルディスカッション）

４）会場の席配置

５）映像班の配置

６）案内・サイン

７）会場計画図

２．当日の受付要領、誘導計画

１）受付要領

２）配布物

３）会場での案内、誘導

４）アンケートの配布・回収

５）会場での諸注意、連絡事項

３．当日のロジ計画

１）受付設営

２）みんなのイス搬出入

３）舞台移動

４）PPT の映写

５）司会

６）関係者対応

[3] 送迎、会合、飲食等のロジが容易な場所として移動が少なくて済む場所を設定

７)同時通訳

８)写真撮影・映像撮影

９)ロジ計画(スタッフのタイムスケジュール)

４. プログラムの進行計画

１)開会

２)基調講演、ショートプレゼンテーション

３)鼎談

４)パネルディスカッション

５)ヤン・ゲール氏感想

〔５. レセプション〕

ｖ. お見送り(11 月 29 日　)

スタッフ一覧

氏名	担当事項
西尾	総括、国交省相談、登壇者調整
竹村	総括補
井上	映像・記録
木内	会場計画、会場設営計画、会場との連絡
小林	当日ロジ計画、備品準備、みんなのイス、参加者連絡・登録
山本	ヤン・ゲール氏連絡窓口
和田	写真撮影、作業補助
木村	当日司会
吉田(佳)	参加者連絡・登録支援、ヤンゲール氏対応支援
白	会場準備、舞台移動、会場誘導(当日)
ウォン	受付(当日)
平池	受付(当日)
辻本	会場準備、舞台移動、会場誘導(当日)
水嶋	会場準備、舞台移動、会場誘導(当日)
馬場	受付、会場準備、会場誘導(当日)
大藪	会場準備、舞台移動、会場誘導(当日)
三浦	会場準備、会場誘導(当日)
大竹(筑波大)	受付、みんなのイス(当日)

Ⅰ. スケジュール（４日間の全体行程）

Placemaking Symposium 2014 （11月26日～29日の予定）

11月26日（水）（ヤン・ゲール氏来日）		
時間	予定	備考
7:55~	ヤンゲール氏・スヴァー氏成田空港着（SK981）	成田へお迎え（北原先生、富田専門官、西尾、山本）
9:40-11:40	ホテルへ移動	送迎バス（交通状況により電車）
11:40-12:00	ホテルチェックイン	ホテルオークラ（以降、3泊）
12:00-12:10	ブリーフィング	4日間の行程確認
18:00-19:00	ホテルで鼎談の事前打合せ、写真撮影（メインロビー）	北原先生、渡先生、富田専門官、持松係長、竹市研修員、西尾、山本、和田
19:00-21:00	ホテル内のレストランで会食※	北原先生、渡先生、富田専門官、NSRI(西尾、山本、和田）

11月27日（木） エクスカーション（神楽坂） ≪関係者のみ≫		
時間	予定	備考
10:15	ホテルにお迎え	NSRI（山本）
11:00-12:45	エクスカーション街歩き（神楽坂）	コーディネーター：鈴木俊治先生（第3回登壇者、NPO粋なまちづくり倶楽部）
12:45-13:45	ランチ※	鳥茶屋
13:45-15:00	神楽坂のまちづくりについてプレゼンテーションと意見交換	プレゼンテーション：鈴木先生
15:30	ホテルにお送り	

11月28日（金）（シンポジウム：東大・伊藤謝恩ホール）		
時間	予定	備考
プレイスメイキングシンポジウム		
Session 1		
14:00	開場	
14:30-14:40	開演、挨拶、ゲール氏、スヴァー氏ご紹介	
14:40-15:20	基調講演 (40分)	講演者: Prof. Jan GEHL (Gehl Architects)
15:20-15:35	ショートプレゼンテーション (15分)	講演者: Ms. Birgitte Bundesen SVARRE (Gehl Architects)
15:35-16:10	鼎談 (35分)	コーディネータ: 北原理雄氏 (千葉大学 名誉教授)
		スピーカー: Prof. Jan Gehl (Gehl Architects)
		スピーカー:渡和由氏 (筑波大学准教授)
16:10-16:20	休憩	
Session 2		
16:20-17:50	パネルディスカッション (100分)	モデレータ: 松村秀一氏 (東京大学教授)
		パネリスト: 西村浩氏（株式会社ワークヴィジョンズ代表）
		パネリスト: 伊藤香織氏（東京理科大学准教授）
		パネリスト:渡和由氏 (筑波大学准教授)
17:50-18：00	ヤン・ゲール氏からシンポジウムの感想	
18:00-18:15	休憩	
Session 3		
18:15-19:30	レセプション※	

11月29日（土）（ヤン・ゲール氏帰国）		
時間	予定	備考
12:30	ヤンゲール氏・スヴァー氏成田空港発（SK984）	成田へお見送り ホテルにて（NSRI竹村、山本）、空港にて（北原先生、富田専門官）

※は 受託調査業務外の行事

II. 関係者事前打合せ、会食（11 月 26 日）

1. 鼎談関係者事前打合せ

1）時間：18：00～19：00

2）場所：ホテルオークラ・メインロビー　（本館5階）

座席の予約ができないため、少し早目にいって場所取りを行う。

お茶のサーブはできないため、なし。

3）出席者：Jan Gehl 氏、Birgitte Svarre 氏、北原理雄先生、渡和由先生、富田専門官、持松係長、竹市研修員、事務局（NSRI 西尾、山本、和田） 10 名

4）資料：4日間のスケジュール、鼎談のシナリオ

2. 写真撮影（ホテルオークラ・メインロビー・打合せ時）

・上記メンバーによる写真撮影。

・撮影予定場所、アングルは事前に確認。

3. 会食　19：00～　　※本受託調査業務外の行事

・レストラン「山里」にて　本館5階（メインロビー隣）

（先方のご希望によりホテル内・和食で）

・出席者：上記メンバーのうち、Jan Gehl 氏、Birgitte Svarre 氏、北原理雄先生、渡和由先生、富田専門官、事務局（NSRI 西尾、山本、和田）。

Ⅲ. エクスカーション（11 月 27 日　神楽坂街歩き）

1. プログラム・出席者

日程　　:平成 26 年 11 月 27 日（木）　11:00～15:00
参加予定者:ヤン・ゲール氏、ビアギッテ・スヴァー氏（ゲスト）
鈴木俊治氏（ナビゲーター）、北原理雄先生、
国交省:富田専門官、持松係長（街歩き）竹市専門員（プレゼンテーションから参加）
NSRI:西尾、木内、山本、和田、大藪　　計 12 名

○当日のスケジュール

時刻	予定	備考
10:15	（ヤン・ゲール氏らをホテルまでお迎えにいく）	・ホテルオークラ ・タクシー使用
11:00	集合場所:地下鉄有楽町線、飯田橋駅　市ヶ谷寄り改札前 江戸時代の絵図を見て頂きながら、鈴木さんより簡単な街歩きのレクチャー	次頁
11:15	街歩き　神楽坂界隈（ヒューマンスケールな路地空間等）へ	鈴木氏によるご案内（英語）
12:45	昼食:（案）神楽坂鳥茶屋別亭※ http://www.torijaya.com/page4	事前に決定予約 （半熟卵等、苦手な食材確認）
13:45	プレゼンテーション 場所:東京理科大学　森戸記念館会議室 ・（仮）『神楽坂のまちづくり』 ハーツ環境デザイン代表　鈴木俊治氏 ・意見交換	英語 プレゼンテーション資料は別途掲載（p2-2-48）
15:00	閉会 （ヤン・ゲール氏らを送迎）	・タクシー使用（山本）

※は受託調査業務外の行事

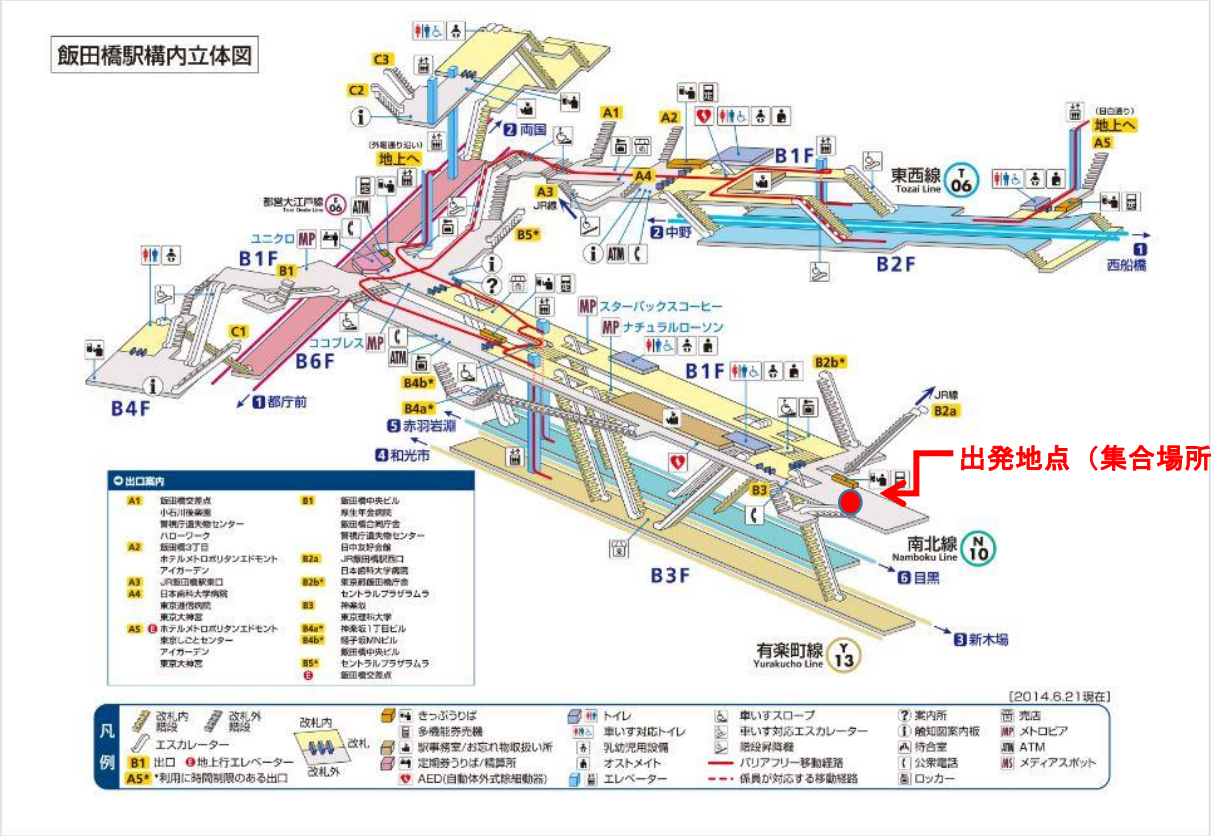
○配布予定資料
・神楽坂について（神楽坂の特徴や歴史）（鈴木氏）英語版
・‘Kagurazaka Street and Roji Map’英語版

○雨天時の対応
・荒天以外は決行。

2. 写真撮影

・街歩きの様子は、適宜、撮影。（意見交換会の様子を含め）:和田、大藪
・意見交換会会場、鳥茶屋(昼食場所)前の路地にて集合写真撮影

出発地点（集合場所）



出発地点に掲出されている江戸時代の絵図

出所：http://photozou.jp/photo/show/1011499/90620670

Ⅳ. シンポジウム

プレイスメイキングシンポジウム当日の進行計画

	時刻	項目（所要時間）	備　考
	10：00	NSRI スタッフ集合。ミーティング。	西尾
	10：15	準備開始（受付、舞台配置、舞台移動リハ等）	全員
	11：00	みんなのイス到着・搬入	小林
	11：00	会場オペレーター会場入、事前確認	井上
	12：00	映像班会場入、セッティング	井上
	13：30	開場、受付開始。	木内、小林
		北原先生会場入。ゲール氏、スヴァー氏会場入。控室案内。通訳会場入。	西尾、山本
		通訳・ゲール氏・北原先生、富田専門官で訳語最終確認。	（国交省）
	14：00	登壇者会場入。控室に案内、ゲール氏に紹介。	西尾、竹村、（井上）
	14：25	諸注意等場内アナウンス。	司会（木村）
第1部	14：30	開会、講師紹介（10 分）	開会は司会（木村） 講師紹介は北原先生
	14：40	基調講演（40 分）ヤン・ゲール氏	ゲール氏（山本） PPT（西尾）
	15:20	ショートプレゼンテーション（15 分） ビアギッテ・スヴァー氏	スヴァー氏（山本） PPT（西尾）
	15:35	鼎談（35 分） 北原氏（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）、ゲール氏、渡氏	ゲール氏（山本） PPT（西尾） 舞台移動 6 名
	16：10	ブレイクタイム（10 分）　場内アナウンス、舞台移動	木村、舞台移動 6 名
第2部	16：20	パネルディスカッション（90 分） ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：松村氏　　渡氏×西村氏×伊藤氏	
	17：50	ヤン・ゲール氏よりシンポジウムの感想	
	18：00	ブレイクタイム（15 分）	
	18：00	ホール・みんなのイス撤収作業開始	
第3部	18：15	レセプション（75 分） 参加者　約 100 名　軽食	乾杯　北原先生 ご感想：ヤン・ゲール氏 〃：ﾋﾞｱｷﾞｯﾃ･ｽｳﾞｧｰ氏 締めのお言葉：松村先生
	19：15	タクシー会場脇に配車。	
	19：30	終了、ゲール氏・スヴァー氏お見送り	北原、富田、西尾 ホテル迄山本が同行

1. 会場計画 ⇒ 資料1 会場計画図参照

1）受付

・受付はホワイエ奥に設置。（机3台）

・受付と並んで、書籍販売スペースを設置。参加者の便宜を図るため邦訳が出ているヤン・ゲール氏の著書2点（『人間の街』、『建物のあいだのアクティビティ』」）を販売。（机2台/協力：鹿島出版会）

2）みんなのイス（ホール外観客席）

・つくばスタイル実行委員会所有の「みんなのイス」50 脚を借り入れて配置。（協力：渡和由准教授、つくばスタイル実行委員会）

・スクリーン（会場備品）をホール壁面前に設置、会場の様子を映写。

・音声は、同時通訳の日本語チャンネルの音声をホワイエに流す。（同時通訳室から会場調整室へ同時通訳音声2chを提供。調整室からホワイエに対して、会場側技術スタッフが日本語音声 ch を送信）

3）舞台設営計画

・開会・基調講演・ショートプレゼン／鼎談／パネルディスカッション の 3 種の舞台設営。

・舞台上のイス、テーブルは、会場アリーナ席のものを使用。（予め舞台袖倉庫に配置）

・舞台前にスクリーン映像と同期するディスプレイを設置し、講演者・登壇者がスクリーン内容を確認できるようにする。（会場側備品で対応）

4）会場の席配置

・最前列に登壇者、2列目に関係者（座談会登壇者、国交省シンポ関係者、メディア関係者）を配置。

・一般参加者は、レセプション参加者と不参加者の2つにわけ、会場前方を参加者用、後方を不参加者用のブロックとする。

・シンポ関係者以外で参加者として登録した国土交通省関係職員は、会場最後方に座席を配置。

5）映像班の配置

・映像記録班は、会場最後方部、映像撮影用の区画に機器を配置して撮影。（memem 嶋津氏）

・同時通訳室から会場調整室へ同時通訳音声 2ch を提供。調整室から会場後方へマイク音声とあわせた 3ch をキャノンで送信。

・カメラマンは会場内を移動して撮影する。（Gottingum 杉山氏）

6）案内・サイン

・案内看板は、速報版ちらしと同様のデザインのものを A1 判パネルで制作し、イーゼルを使用して1階、階段入口脇に配置。

・芝生広場前と赤門付近の二箇所に案内係員を配置

2. 当日の受付要領、誘導計画

1）受付要領

・参加者を滞りなく迎えるため、4 列で受付を行う。

① レセプション参加者列

② レセプション不参加者　3列

・不参加者の列は、（五十音順等の）区別は特に行わず、3 列で全体を取り扱う。

・レセプション参加者は、現金でお支払頂く。（つり札用意）会費納入者は、参加者着用札にシールを貼って区別。

・クロークは会場側に委託。

2）配布物

・受付にて下記のものを配布する。

・ホワイエの「みんなのイス」観覧者と区別するため、参加登録者には、参加者札（下記参照）をお渡しし、着用いただく。

・前方から詰めてお座りいただくため、座席番号札をお渡しする。（レセプション参加者、不参加者、関係者でブロック分け）

・数点の資料を手際よく配布するため、配布物は封筒に入れて準備しておく。

①A5 判リーフレット

②シンポジウムプログラム

③ビアギッテ・スヴァー氏プロフィール

④12 の質的基準（参考資料）

⑤「人間の街」関連資料

⑥アンケート

⑦参加者札（みんなのイス観覧者と区別するため）

⑧座席番号札

45mm x 45mm

↑　参加者に着用頂く札

配布用（左側：アリーナ席の座席番号表示）

アリーナ席（可動席）用

固定席用

３）会場での案内、誘導

・入場時の入り口は一か所。

・会場に入ったところに座席番号の配置図（概略）を掲出する。

・場内係員は座席を見つけやすいよう補助する。

・休憩時間、終了後の出入り口は 3 か所とする。

４）アンケートの配布・回収

・アンケートは受付にて配布。出口付近（3 か所）で回収。

５）会場での諸注意、連絡事項

・開演 5 分前に下記内容を場内にアナウンス。

①携帯の電源 OFF

②録音、撮影の禁止

③禁煙

④飲食の禁止

⑤リーフレットの差し替え

⑥アンケート記入依頼

⑦同時通訳機器の使用法説明、回収依頼

・休憩時間開始時に下記内容を場内にアナウンス。

①受付脇にて、ヤン・ゲール氏の著作書籍を販売

②レセプション会費未納者は受付まで

・終了時に下記内容を場内にアナウンス。

①アンケート記入

②同時通訳機器の回収依頼

③座談会記録等新都市に掲載の件

3. 当日のロジ計画

1）受付設営

当日 10 時より設置。

2）みんなのイス搬出入

・当日、朝8時半につくば市の倉庫から搬出。（筑波大・大竹氏）11時00分ごろまでには到着見込み。

・到着後、搬入用 EV で地下 2 階へ移動。

・スクリーン、プロジェクターは会場側備品を当日、セッティング。

・記帳台を設置して、来場者に記帳を依頼。（氏名、所属等）

3）舞台移動

・スヴァー氏のショートプレゼン後、倉庫から机・イスを移動して鼎談用に配置。（6 名）

・休憩時間中に、倉庫から机・イスを移動してパネルディスカッション用に配置。（6 名）

4）PPT の映写

・NSRI の PC[4]に登壇者関係の PPT を保存し、舞台脇客席から操作。（西尾）登壇者等の希望によっては、PPT 送り機能付レーザーポインターを操作いただく。

・ヤン・ゲール氏とスヴァー氏のプレゼンは同一ファイルに保存。

・パネルディスカッション時の PPT も同一ファイルに保存。

5）司会

・NSRI の木村千博　主査研究員が担当。

6）関係者対応

・登壇者・座談会登壇者、メディア、国交省事務局関係者は、会場前方に座席を設置。

・登壇者、座談会登壇者は受付前に来場確認後、個別に案内（竹村、西尾）

7）同時通訳

・サイマル・インターナショナル社が担当。（3 名）

・人間の街（日本語版、英語版）を参考資料として貸与。

・要注意の訳語リストを事前に提供。

・訳語に関する不明点は事前に確認（北原先生、富田専門官に相談）の上、当日、13 時半～14 時半の間にゲール氏、北原先生、富田専門官に最終確認。[5]

8）写真撮影・映像撮影

・当日 12 時から設営準備。

9）ロジ計画（スタッフのタイムスケジュール、場内配置図）

・当日のスタッフタイムスケジュールは別紙（資料 2）。

・当日の時間帯別スタッフ場内配置図は別紙（資料 3）。

---

[4] 登壇者の PC が Mac のため、当日、PPT データの文字ズレ等で準備に手間取った。可能であれば準備するとよい。

[5] 当日確認した内容のメモが通訳によって廃棄されたため、後日活用することができなくなった。事前に記録保管の準備が必要。

4. プログラムの進行計画

１)開会

・司会より開会。

・司会よりプログラムに変更（ショートプレゼン）があることをアナウンス。

・北原先生よりヤン・ゲール氏、ビアギッテ・スヴァー氏をご紹介。

２)基調講演、ショートプレゼンテーション

・ヤン・ゲール氏、ビアギッテ・スヴァー氏よりご講演。

３)鼎談

・準備のためのイス、テーブルのセット。（司会から一言）

・別紙進行イメージにより、北原先生に進行いただく。

４)パネルディスカッション

・14 日事前打合せに基づき、松村先生に進行いただく。

・冒頭 30 分、座談会のトピックをご紹介頂く。

５)ヤン・ゲール氏感想

・ヤン・ゲール氏からシンポジウムのご感想を一言いただく。

5. レセプション

１)プログラム

・北原先生のご挨拶・乾杯のご発声により開会。

・ヤン・ゲール氏から感想を一言いただく。

・ビアギッテ・スヴァー氏から感想を一言いただく。

・松村先生から締めのお言葉を頂いて閉会。

・（閉会後、時間の許す範囲でヤン・ゲール氏が書籍のサインに応じる。）

・同時通訳スタッフ 2 名がレセプションに残り、ヤン・ゲール氏とスヴァー氏のコミュニケーションをフォローし、挨拶を逐語訳。

２)ホール撤収作業・みんなのイス搬出（18:00～18:30）

・来場者の退出状況を見極め、速やかにホールの撤収作業を 18 時より実施。

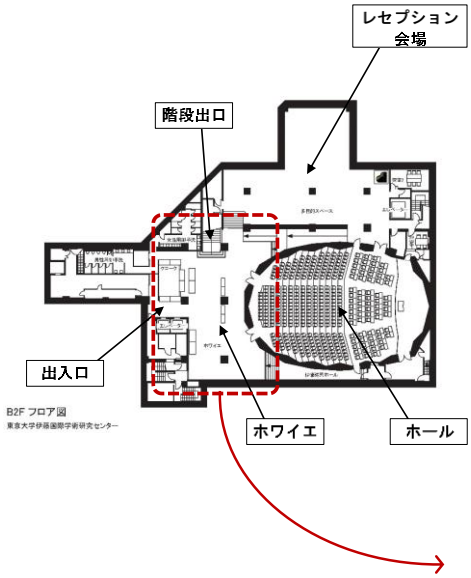
・みんなのイスは、レセプションの妨げとならないよう、ホール内を動線として、搬出用 EV を経由して外部に搬出。

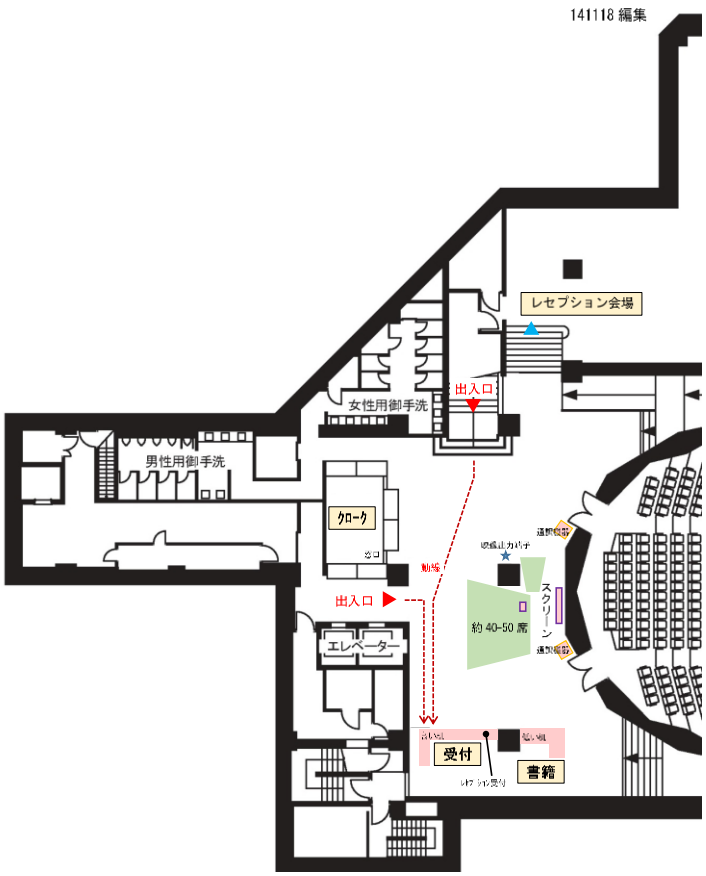
■ 当日問題等が発生した場合は、下記に連絡する

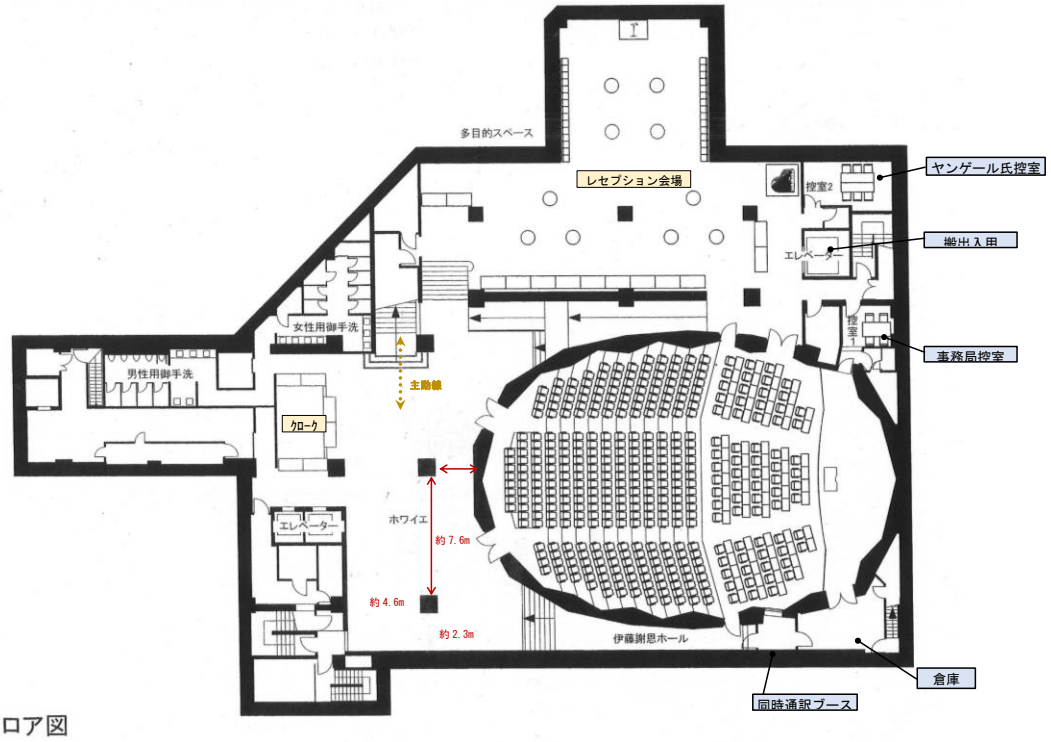
西尾

資料１　会場計画図

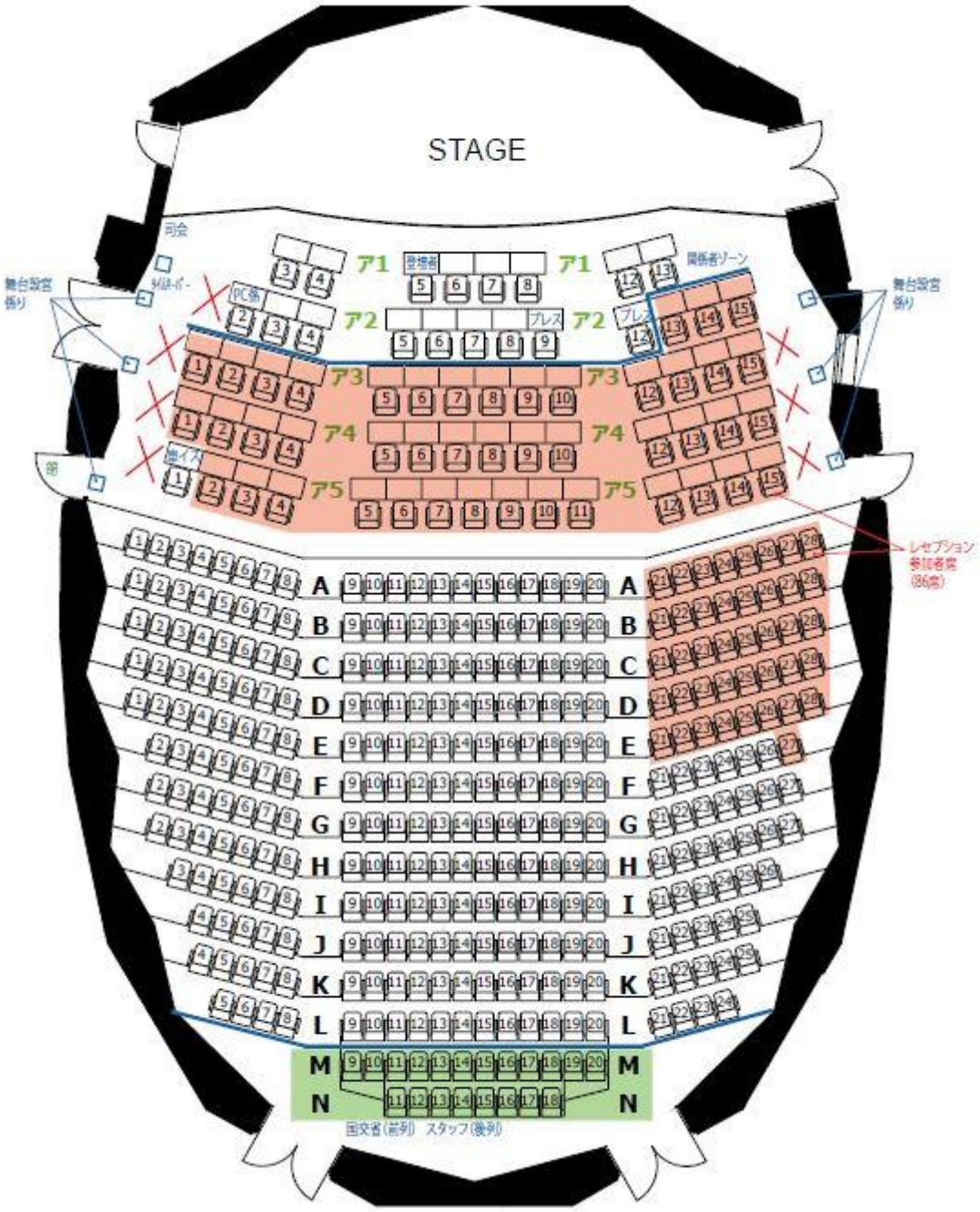
会場：東京大学　伊藤謝恩ホール



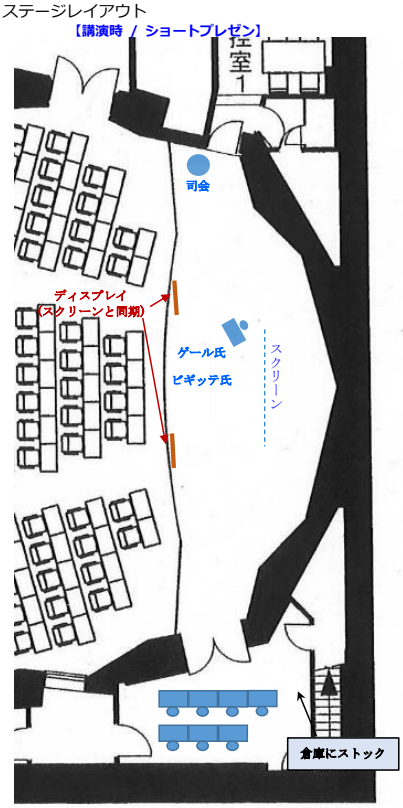


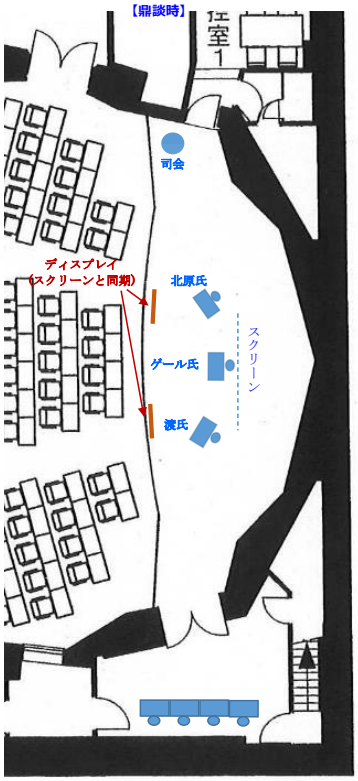


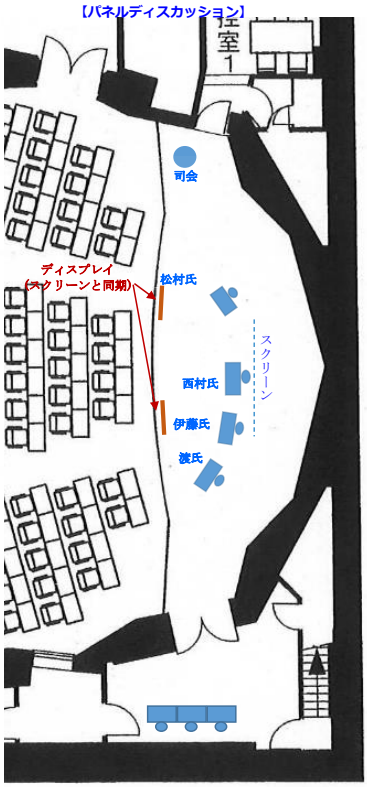
B2F フロア図


STAGE
司会
舞台設営係り
PC係
登壇者
関係者ゾーン
プレス
ア1
ア2
ア3
ア4
ア5
通イス
レセプション参加者席(86席)
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
国交省(前列) スタッフ(後列)

■ステージレイアウト


【講演時 / ショートプレゼン】
任室1
司会
ディスプレイ
(スクリーンと同期)
ゲール氏
ビギッテ氏
スクリーン
倉庫にストック


【鼎談時】
任室1
司会
ディスプレイ
(スクリーンと同期)
北原氏
ゲール氏
渡氏
スクリーン


【パネルディスカッション】
任室1
司会
ディスプレイ
(スクリーンと同期)
松村氏
西村氏
伊藤氏
渡氏
スクリーン

（４）シンポジウムの進行に関する事前打合せ等

シンポジウムの鼎談及びパネルディスカッションの進行について、関係者と下記の通り事前打合せを実施した。

図表　事前打合せの実施状況

日程	出席者	趣旨
平成 26 年 10 月 30 日	千葉大学名誉教授　北原理雄氏 東京大学教授　松村　秀一氏 筑波大学准教授　渡　和由氏 国土交通省、ＮＳＲＩ	鼎談の進行・内容について 鼎談とパネルディスカッションの関連について
平成 26 年 11 月 14 日	東京大学教授　松村　秀一氏 (株)ﾜｰｸ･ｳﾞｨｼﾞｮﾝｽﾞ代表西村浩氏 東京理科大学准教授　伊藤香織氏 筑波大学准教授　渡　和由氏 国土交通省、ＮＳＲＩ	パネルディスカッションの進行について
平成 26 年 11 月 26 日	ヤン・ゲール氏 ヴィアギッテ・スヴァー氏 千葉大学名誉教授　北原理雄氏 筑波大学准教授　渡　和由氏 国土交通省、ＮＳＲＩ	鼎談の進行・内容について

プレイスメイキングシンポジウム　鼎談の進行イメージ案

北原理雄先生（コーディネータ）／ヤン・ゲール先生／渡和由先生
時　間：15:35-16:10（35 分間）

○ 趣旨（北原先生より）（２分）

○ 一巡目（17 分）

【渡先生】

・ヤン・ゲール先生、ビアギッテ先生のお話を受けて、最近の日本では、ヒューマンスケールのまちづくりやプレイスメイキングに関してどのような状況にあるか、渡先生ご自身の取組をふくめて、新しい萌芽をご紹介いただく。（PPT 準備）

【北原先生】

・“Life Between Buildings”を訳された時（1990 年）と比べて、日本の中での「ヒューマンスケールのまちづくり」に対する認識がどうように変わったか、お話いただく。また、人口減少、ストック活用時代など、日本社会が変曲点を超えた今こそ、マクロな「マスタープラン型のまちづくり」だけでは対応できなくなっており、それを補完するミクロなまちづくり、人間の生態や行動特性にきちんと目を向けた（ヤン・ゲール氏が数十年にわたり実践してきた）「ヒューマンスケールのまちづくり」が重要になっているのではないか、という点についてコメントいただく。

【ヤン・ゲール先生】

・ヤン・ゲール先生が徹底してこられた、「現場を観察し、分析し、発想する」という考え方。そのアプローチの中で、外すことのできない要諦がどこにあるか、勘所をお話いただく。

○ 二巡目（16 分）

【北原先生】

・（千葉のパラソルギャラリーの取り組み写真を背景に）ヤン・ゲール先生へのご質問。

【ヤン・ゲール先生】

・「場所からはじまるまちづくり」をどのように実践していけばよいのか、フィールドワークの中で何に着眼し、何をとらえて、どう計画へと取り込んでいけばよいのか、具体的なアプローチの方法をご紹介いただく。

【渡先生】

・これまで、都市の装置や施設ではなく単なる備品として扱われてきたイス。居心地のよい都市空間をつくる上で不可欠なイスを都市の装置として位置付けていくべきだと考える渡先生のご意見に対して、ヤン・ゲール先生がどのようにお考えになるか、問いかけていただく。

【ヤン・ゲール先生】

・渡先生の問いかけに対するお答え。

・日本の歴史や風土、都市空間の特徴や人々の行動様式などを踏まえて、日本らしい「ヒューマンスケールのまちづくり」や「プレイスメイキング」対して、このようなことができるのではないか、というご提案と未来への期待について。

○最後に北原先生から簡単なコメント

進行イメージ（英語版）

Talk session (flow of discussion)

Coordinator: Prof. Toshio Kitahara (Chiba University)

Speaker: Prof. Jan Gehl (Gehl Architects), Assoc.prof. Kazuyoshi Watari (University of Tsukuba)

Time: 15:35-16:10 (35min)

I. Introduction

Prof. Kitahara	Brief introduction of objectives.

II. First session

Assoc.prof. Watari	Current trend of urban planning regarding a human scale urban planning in Japan. Talk about what Assoc.prof. Watari has been working on recently.
Prof. Kitahara	How has the people's attitude towards the human scale urban planning been changing since 1990, when Prof. Kitahara translated "Life Between Buildings". Give some comments on the issues that Japan will be moving towards the age of population decline and utilization of existing stock, in such circumstance, transitioning from a Master Planning scheme into a "Human Scale" urban planning is required in Japan.
Prof. Gehl	Prof. Gehl has been carrying on the approach that to research a public life and analyze the place and get ideas from these studies. What did you find out through the experience? Talk about some essentials.

III. Second session

Prof. Kitahara	Ask a few questions to Prof. Gehl to gain a better understanding.
Prof. Gehl	Talk about what we should focus and perceive on the fieldwork, and how we can apply its outcome in the planning.
Assoc.prof. Watari	Chair has been treated as just an equipment not an urban device or infrastructure. Assoc.prof. Watari says that a chair is essential for creating comfortable urban space, so that the chair supposes to be defined as an urban device. Assoc.prof. Watari will ask Prof. Gehl what Prof. Gehl thinks about his idea.
Prof. Gehl	Answer to the question On the basis of history and climate of Japan and feature of the urban space and people's behavior, any suggestion or expectation towards Japanese style human scale urban planning and placemaking.

Ⅳ. Closing

Prof. Kitahara	Comment on the session.

１）鼎談・パネルディスカッション事前打合せ

日　時：　平成 26 年 10 月 30 日（木）　15：00～16：20
場　所：　東京大学 松村研究室
参加者：　北原理雄氏、松村秀一氏、渡和由氏
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所
提出資料　シンポジウム修正プログラム、ビアギッテさんのプロフィール、
　　鼎談の進行イメージ、11/26～28 スケジュール
受領資料　千葉市での取組み論文（北原氏）

■打合せ内容

Ⅰ．シンポジウムプログラムの一部変更について

・ヤンゲールアークテクトで、ヤン・ゲール氏と協働研究を行っているビアギッテ・スヴァー氏がゲール氏と来日することになり、あわせて、シンポジウムで 15 分のショートプレゼンテーションをしていただけることになった。（NSRI）

・ついては、北原先生に、ゲール氏とあわせてスヴァー氏の簡単なプロフェールを紹介していただきたい。（NSRI）

→了解した。プロフィールをお送りいただきたい。（北原氏）

・レセプションでの、挨拶・乾杯と閉会の言葉については、挨拶・乾杯を北原先生、閉会の挨拶を松村先生にお願いしたい。

→了解した。（北原氏、松村氏）

Ⅱ．鼎談の進行イメージについて

・鼎談にもビアギッテさんにご参加頂いた方がよいか。（NSRI）

→参加して頂ければ盛り上がると思うが、時間的に余裕がないので予定通りで良いと思う。（北原氏）

・二巡目については、渡先生とゲール氏の順序は逆の方が話の流れとして良いのでは。渡先生から直接ゲール氏に問いかけて頂いても良いとも思う。（北原氏）

→実践的立場から、日本では何が難しいかということをコメントし、ゲール氏に投げかけていただければ。（NSRI）

・ゲール氏に聞きたいことは、装置としての座席、イスは都市の中で重要だが、日本では建築の付属物という扱いで、認められていない部分がある。自身として、イスは施設と考えており、福祉的な観点からも重要であると認識している。デンマークではどう使われているのか、イ

ンテリアが重要視される北欧ではどのように考えられているか、ミクロな視点でも話を聞きたい。（渡氏）

→『人間の街』では、基本的に適切な場所に設置すべきベンチと、階段や噴水の基壇なども補助的なベンチ“secondary seat”がうまく混在することが重要としている。ブライアントパークの自由に使えるイスも評価していた。ベーシックなベンチ（“コペンハーゲンベンチ”のような）が良く、奇をてらったものはデザイナーの自己満足になる、と考えているようだ。『建物の間のアクティビティ』でもベンチについては重要視して多く記載している。（北原氏）

→その辺りの話を引き出したいと思う。（北原氏）

・可変性はなく固定的でも、うまく使いこなせるポイントがあるのかもしれない。（NSRI）

→エッジゾーンにアクティビティに向けて設置するべき、と言っていた。（北原氏）

・地域的な特徴を捉えたヒューマンスケールのまちづくりは大事で、日本にうまくあったやり方があると思う。ゲール氏が考える日本型のプレイスメイキング、ヒューマンスケールのまちづくりについてアイディアを伺いたい。（NSRI）

→来日する度に楽しんでいるので、コメントをもらえると思う。向島に訪れた際は、狭い空間の使い方が日本人は上手であると言っていた。（北原氏）

・第３回の座談会でも話が出ていたが、ブライアントパークのような場所が日本にあっても、日本人は使い方を知らないので難しいという慎重な見方があり、小野寺康氏の著書『広場のデザイン』においても同じような話が書かれていた。（MILT）

→ブライアントパークもそうだが、マネジメントとセットである。（北原氏）

→日本でイスを並べるような社会実験を実施しても、日本人は気軽に座るのを躊躇する傾向にある。日本人はまちなかでそのような風景を見たことがないので、慣れれば良い、と自由に使っていたドイツ人が話していた。日本には花見や祭などの文化があるので、慣れであると思う。（渡氏）

・小野寺康氏の著書『広場のデザイン』のあとがきに篠原修氏が「日本には広場がない」と記していたのも気になっている。日本の広場の本もあり、違和感がある。（MILT）

→建築文化の特集『日本の広場』では、ヨーロッパでは“広場という空間を広場としてつくる”、日本では“ある空間を広場として使いまわす”とし、仮設のものを設置し、空間を分節して広場とする『広場化』である、としていた。仮設の装置を設置し、広場空間をつくりあげるというのは、日本人の伝統的文化である。その文化をうまく使えれば良い。（北原氏）

・渡先生から、病院内でのプレイスメイキング（外来待合室に稼働イスを設置する）の取組みをご紹介いただいた。（NSRI）

→ジャズコンサートを行ったり、コーヒーをテイクアウトして飲んだり、ある意味小さな広場と

なっていた。そのための“建築空間のつくり方”は重要である。（渡氏）

・鼎談では、スライドなど事例を使って話をした方が良いのか、概念的な話をすべきか。（渡氏）

→ゲール氏とビアギッテさんの話の流れを受けて、一巡目ではそうであってよいのでは。パネルディスカッションの頭出しのような意味あい。（北原氏）

・鼎談では、一巡目で北原先生からも取組みからの知見をお話頂きたいと思う。鼎談から PD へ、視点が広がっていく、具体のイメージが見えてくるような流れが良いのでは。また、日本の具体的な取組みなど話が広がる PD を受けて、ゲール氏からコメントをもらってはどうか。（渡氏）

→一巡目は、場所からのスタートすることが求められているが、そこの勘所をゲール氏に投げかけるイメージにする。（北原氏）

→一巡目は、ゲール氏、ビアギッテさんの話を受け、北原先生より渡先生へ日本での取組みについて投げかけ、ゲール氏には、場所からどう考えるか、何を捉えるべきなのか、より具体的なアプローチ方法についての勘所をゲール氏に投げかける、という流れとする。（NSRI）

・『建物の間のアクティビティ』の頃は“本当にそれができるのか”だったが、現在は“どうやってやるのか”に変わり、色々な挑戦が行われてきおり、大きな時代の変化がある。（北原氏）

・ゲール氏は超現場主義。現場で具体的なアクティビティ・ライフを捉え、高度なモデルを使うのを嫌う。場所から出発し、場所に戻る、という話にしたい。（北原氏）

・いただいたご意見を基に、進行イメージを修正しご確認頂き、ゲール氏も英訳版をお送りしたいと思っている。（NSRI）

Ⅲ．パネルディスカッションについて

・大きな流れとしては、３回のモデレーターよりお話をいただくが、鼎談の話を受けるかどうか、ご判断いただきたい。（NSRI）

→PD の打合せと当日の話を受けて判断したい。（松村氏）

・PD の最後でゲール氏からコメントについてはどうか。（北原氏）

→10 分程度残して、PD 含む全体の感想について、ゲール氏からコメントをいただくようにする。（松村氏）

Ⅳ．来日スケジュールについて

・北原先生から関係者間の会食をセッティングしてはどうかとお話をいただいているので、全員

が揃う 26 日の夜に席を設けたいと考えている。（NSRI）

・雑司ヶ谷『あぶくり』のカフェで嶋田洋平氏主催のトークイベント、会食（20 時～）があるので、飛び入りゲストで参加というのもあるかと思っている。（国交省）

→コアメンバーとホテルでミーティング後に会食（ホテル内・外）、もしくは、ホテルのラウンジで打合せのみなどいくつか選択肢を設けてゲール氏に選んでもらってみてはどうか。5～10 分の近場の移動であれば良いと思う。（北原氏）

→了解した。（NSRI）

・ラウンジのミーティングの際にメンバーで写真を撮りたいと思っている。（国交省）

→了解した。（北原氏、渡氏）

Ⅴ．その他

・同時通訳の日本語訳をする際、ゲール氏の専門用語（重要なキーワード）をどう訳すかを決めた方が良いのでは。Placemaking はワンワードであり、「プレイスメイキング」とそのまま訳すなど。（渡氏）

→『建物のあいだのアクティビティ（屋外空間の生活とデザイン）』（“Life between buildings”）では、“Life”を“アクティビティ”と置き換えている。（北原氏）

→まちなかの人間・歩行者中心の“街路”（Street）と都市間交通の“車道”（Road）も言い分けてほしい。居心地を感じる人の目線の“居場所”（Place）と物理的な“空間”（Space）なども。数多くの原書で意図的に使い分けられている。鈴木先生にも確認し、きちんと整理してほしい。（国交省）

→了解した。（NSRI）

２）パネルディスカッション事前打合せ

日　時：　平成 26 年 11 月 14 日（金）　9：30～11：00
場　所：　東京大学 松村研究室
参加者：　松村秀一教授、西村浩氏、渡和由准教授、伊藤香織准教授
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所
提出資料　プログラム、スヴァー氏プロフィール、ヤン・ゲール氏依頼内容、PPT 事例、鼎談シナリオ、座談会アンケート結果、新都市原稿（第 1 回、2 回）、国交大学校資料

■議事概要　（敬称略）

Ⅰ．シンポジウムのねらいについて

・シンポジウムのねらいは何か。（松村）

→都市空間の魅力を増進し居心地をよくすること、これが都市行政においてきわめて重要であることを訴えたい。特に首長に対して訴求したい。また、日頃寄せられる様々な意見に対して、以下のようにロジカルに回答することも考えている。（国交省）

「プレイスメイキングなんて分からない。そもそもなんなのか？またどうせ一過性のものなのではないか？」という質問に対して	→	近代都市計画・近代建築への反省から生まれた取り組み。マスタープラン(MP)型トップダウン型の都市計画、区画整理、都市施設整備など「マクロのまちづくり」の対極の、ボトムアップ型「ミクロのまちづくり」であり、住民の総意工夫を活かそうとする取り組みで、欧米では 1950 年代から活動が芽生えたものです。最近プレイスメイキングと呼ばれることもあります。
「プレイスメイキングなんて、不要ではないか？日本人にはなじまないのではないか？」という声に対して	→	『江戸庶民風俗図絵』などの図版がありますが、日本人はもともと広場の過ごし方が得意です。
「プレイスメイキングなんて、どうせできないのではないか？これまでやってきても広まらなかったのではないか？」という声に対して	→	「どういうやり方を選んでやるか」という段階です。
「そんなことやってるよ。『空き家・長屋の活用』『無電柱化』『高齢者の居場所づくり』『イベントによる賑わいづくり』『アーティスト・イン・レジデンス』でしょ。」という誤解に対して。また、「一生懸命やってるんだけど」「○○法・○○補助事業やってるんだけど」など、そもそも何をしたら良いのか分からないという声に対して	→	ヒューマンスケールのまちづくりが基本です。SPACE(空間)ではなく PLACE(居場所)、ROAD(道路)ではなく STREET(街路)、全く別のものと区別して考えられています。

・ロジカルに反論の余地を排除する、説得力を高めてより多くの人の共感を呼ぶ等、いくつかのアプローチが考えられるが、ロジカルに反論の余地をなくすのは難しいと感じる。取り組みは来年度以降も継続していくのか。（松村）

→継続されなくてはならないと考えている。ストック過剰の時代。住宅局が推進している中古住宅リフォーム市場の育成は 2010 年現在 10 兆円規模だが 2020 年は 20 兆円市場。それらがほとんどテンデバラバラに行われてしまうと空間資源の浪費だが、リノベーションまちづくりの最後のチャンス。現状でも都市局・道路予算はそれぞれ 2 兆円規模にすぎないが、国の GDP は 500 兆円あり、建築・土木の GDP は 40 兆円、これらが民間まちづくり活動の市場規模でありもともと非常に大きい。この大きな市場を育成するチャンスであり、リノベーションまちづくりや現代版家守、都市マネジメントをしっかり伸ばしていきたいことから都市局では都市マネジメント小委員会も開催していると考える。（国交省）

・民都機構の佐々木氏に呼ばれて、リノベーションまちづくりや場の産業について話してくれと言われている。いろんなところで、意識の変化が進みつつあるのを感じる。（松村）

Ⅱ．座談会のトピックについて

・第 1 回は、小さなプレイスメイキングと都市の構造に関わる大きなスケールの都市課題の解決がどのようにつながるかがテーマだった。その矛盾をあぶりだしたかったのだが、線引き型から誘導型へと転換していくということで、両者のつながりが見えてくることとなった。従来、行政が行ってきた線引きは、小さく線を引くことはできなかった。しかし、民間がエリアを定めて取り組み、それを後から行政が線を引く、誘導型のアプローチが重要、という話が見いだされた。（西村）

・第 2 回は、このような街が心地よい、というテーマからはじまり、住むだけでなく、働く場としてのまち、働き方そのものが変化している、という話題などへと展開した。また、身近な場所での交流が重要であるという点も話題となった。（伊藤）

・第 3 回は、アメリカの事例を共通の話題に、都市的区間の設定の仕方がテーマとなった。他方、鈴木氏からは横浜でのエリアマネジメントの実践例や神楽坂の例の紹介があった。プレイスメイキングには、生活系とエンタメ系があり、アジア諸国に色濃く残る生活系のものも重要である、との視点が提起された。三友氏からは、利用者が環境を自ら作り出すブライアントパークの可動イスの話題が提供され、私からは、国内の事例として、群馬県や茨城県などで病院のロビー等も含めて実践している「みんなのイス」に関する話題提供と防犯環境設計、プレイスメイキングにおける７つの場の話をした。（渡）

・プレイスメイキングに関するアプローチに「空間のデザイン」「アクティビティ・状況のデザイン」の二つあるという渡先生の整理に従って第２・３回座談会はテーマを設定。普通それで良いわけだが、日本でのまちづくりの現状を考えると第１回でプレイスメイキングしつつ行われる「ストック活用時代のリノベーションまちづくり」というテーマが欠かせなかった。（国交省）

Ⅲ．パネルディスカッションのテーマについて

・『人間の街』(ヤン・ゲール)の中の「アクティビティ→空間→建築」という順序はよく分かる。「居心地のよい空間をつくる」ということに客観的な基準がないため、多くの人に理解を広めることに限界があるように思った。その点をどう考えるか。（松村）

→農学部地理学系景観工学にその回答があるが、人間は一瞬で判断している。堀繁先生の講演では、人間も生き物であるという観点から、居心地良い景観とそうでないものを写真を比較対照し、どなたが見てもどちらが居心地良い景観なのか体感しながら、わかりやすく解説いただける。「眺望-隠れ家理論」(ジェイ・アップルトン)、「パーソナルスペース」(ロバート・ソマー)、「ソシオペタル、ソシオフーガル」(ハンフリー・オズモンド)など、景観工学や心理学、認知工学などの分野では、どのようにすれば居心地の良い場となるかという研究が進んでいるが、その知見が建築・都市・土木の分野に取り入れられていないと感じている。（国交省）

・地価の上昇や集客の数、雇用の増加、人口の増加といった、居心地のよい場づくりをした結果、何がもたらされるか示されることも重要だろう。コペンハーゲンで実績があっても、人口減少だといっても、投資にはファイナンスも課題。（松村）

・私が話しているのは、まさにそこで、取り組みの成果を、その対象だけでみるのではなく、周辺への波及としてみる視点が重要だ。我々がやっていることをハードづくりだととられると誤った解釈になる。動き・アクションをつくりだすための環境や仕組み、ソフトをつくっている。（西村）

・松村先生のご指摘は欠かせない。歩行者空間で商売など自由に活用していただき高質な維持管理を実現しつつ、占用料収入で維持管理費を回収しまたまちに再投資することでコスト低減を図る、というのが財務部局向けの理屈。道路占用許可特例など都市再生法改正のときの説明のポイントだった。加えて、お金の話は財政サイドに対しては必須であるとしても、「お金になるよ」だけでは不十分で「意義があるよ」が不可欠だというのがモチベーションの知見で、実際に歩行者空間を活用しはじめるのには意義づけが必要。「都市空間の魅力の増進として、居心地良い賑わい活気のある都市空間・歩行者空間を創出すると、都市空間が本来持っている性質が発揮されて、人にやさしいまちづくり、安全・安心なまちづくり、歩いて健康なまちづくりが実現する」というのが意義。それによって行動を起こすための大義名分が成り立つ。頭の整理としては、「人に行動に移すべく一歩を踏み出そうとしさせるには、意義付けが必要であり、同時に、財政や雇用の点からも合理性があることを説明できればよい」。取り組みがビジネスにもなり、社会的な意義もあるという点が重要。両方説明できる。（また、銀行・保険会社の投資判断は要は帝国データバンクの評点がC(51点)以上かどうか。創業年数、売り上げ、社員数、地域内ランキングなど）（国交省）

・今後の国家の枠組みの変化を考えるような大きな話だと思うが、どのような社会の仕組みによって、この居心地のよい場づくりを実現するのか、ということを考えていく必要がある。リノベーションスクールは、少額で効果の高い施策だと思うが、それすらも自治体が自前でやるには負担が大きい。（松村）

・北九州の他、和歌山、浜松などは自前の財源でスクールを開催しているが、山形では、ふるさと財団の資金を活用していると聞いている。最大でも半額までであるが、そのようなものは利用できると思う。（国交省）

・地方創生に対する期待もあると思うが、どのような施策が考えられるのか。（松村）

・このテーマは将来的には数兆円の産業にも成長する話だと思うが、現時点で北九州リノベーションスクールの雇用は 300 人、事業規模は日本中合わせても数十億～数百億円程度であろうから、GDP500 兆円からするとまだ大きな政策の柱になる規模ではない。（国交省）

・産業構造が転換していく中で、ゼネコンや住宅メーカーなど従来型の産業に従事していた人が、このような分野で仕事をするためには、どうすればいいかも考える必要がある。（松村）

・このような分野は、現場に近いところに本社をおく中小工務店などにメリットが大きい。東京に大きな本社があるところよりも。（国交省）

・もはや仕事が人生の 8 割・9 割を占める時代ではなくなっている。「青豆ハウス」人々の暮らし方などを見ても、生き方の選択肢が多様にありうることが示されつつある時代であると感じる。都市、まちという以前に、人間の生き方が変化し、こんなアクティビティや経験もありうる、ということを示すもの、生き方が変わっていくことを導く一つの手段として、居場所づくりというのもあるのではないかと感じた。（松村）

・それを誰かから提供されるものだけでなく、場所・環境・道具・料理など、それを自分自身で選び、生み出すことができるのがピクニックであると考えている。（伊藤）

・他方で、サードプレイスの作り方に関しては、留意すべき点が東京と地方で全く違うことを念頭におく必要がある。地方には人間関係に匿名性がなく、心地よく一人になることが難しい、例えばオープンカフェに誰かと居るとすぐ街中に噂されるので、オープンカフェもしつらえつつ室内に個室も作るような、完全なオープンでもなく、クローズでもない、デザインの工夫が求められる。（西村）

・東京ローカルにもそういうことがある。幡ヶ谷の地元の喫茶店にも入るとギョッとされる。（国交省）

・東京と地方が違うのと同様に、『人間の街』には世界中の都市の事例が出てくるが、それぞれに社会背景や文化の異なる都市を一つにして議論することはできない部分もあると感じる。（松村）

・第 2 回座談会では、匿名性の高い吉祥寺と、知り合いと道ばたで会ったりお茶したりできる程良い賑わいの荻窪との違いが三浦氏から話題提供された。同じ東京の中でもそのようなことがある。（伊藤）

・（『人間の街』（ヤン・ゲール）p. 77～82 に「高密度---必要なのは適切な密度」等の論考有り。（国交省））

・地方では、群馬県の中之条町で、公共施設の整備にあわせて「みんなのイス」を設置した。一人で来る人もグループで来る人もいて、うまく機能していると感じている。（渡）

・幹部にも、リノベーションスクールは、まちづくり、ひとづくり、しごとづくりの全てを兼ねていて、まさに地方創生だ、と高く評価されている。リノベーションスクールによってエリアの価値を高め、生み出された収益をエリアに再投資する仕組みがあることも、高く評価されている理由の一つだが、プレイスメイキングは、お金をかけずに、すぐに効果のでるやり方でエリアの価値を高める方法でもある。（国交省）

Ⅳ．パネルディスカッションの進行要領について　（確認事項）

・冒頭に、各パネリストから約 10 分ずつ、1 回～3 回の座談会の振り返りをしていただく。

・その後、一巡目で、ご自身はどのようにそれを受け止めていたかをお話いただく。その後は、当日のヤン・ゲール氏の講演内容も踏まえて臨機応変に対応。

・最後に、プレイスメイキングでまちを良くしていくためのいくつかのポイント、というまとめがいただきたい。一言で、各パネリストから１つ～３つぐらいずつ示していただく。

・各登壇者が使用される PPT は 25 日火曜までに事務局にお送り頂く。

ｖ．その他　（当日のご予定に関する確認）

・当日、28 日は 14 時過ぎに会場にお越しいただく。

・レセプションは全員ご出席。　　以　上

３）鼎談事前打合せ

日　時：　平成 26 年 11 月 26 日（水）　18：00～19：00
場　所：　ホテルオークラ・メインロビー
参加者：　ヤン・ゲール氏、ビアギッテ・スヴァー氏
　　北原理雄名誉教授、渡和由准教授
　　国土交通省まちづくり推進課、日建設計総合研究所
提出資料　鼎談の進行イメージ、11/26～28 スケジュール

■打合せ内容

Ⅰ．シンポジウム全体の構成について説明（省略）

Ⅱ．鼎談について

・　北原先生のイントロ（英語）の後、渡先生に日本におけるヒューマンスケールのまちづくりの取組み、及びご自身が実践されているプロジェクトを紹介頂く。その後、北原先生には「建物のあいだのアクティビティ」日本語版の発刊以降、日本においてヒューマンスケールのまちづくりに対する人々の眼差しがどのように変化してきたのか、また、日本が直面する高齢化、人口減少の問題に言及し、既存のマスタープランによるまちづくりから、ストック活用型・ヒューマンスケールのまちづくりへ人々の関心が移りつつある現状をコメント頂く。その後、研究に基づく知見を活かし、日本のこのような動向に対してゲール先生からコメントをお願いしたい。特に、フィールドワークが最も重要とされている観点から、どのように現地を調査し、デザイン、プランニングに調査の内容を反映するのかをお話し頂きたい。(NSRI)

・　その点は、この本の中でも言及している。多くの都市が“調査”をプランニングのツールとして利用している。(ゲール氏)

・　その後、渡教授が可動椅子のプロジェクトについて紹介する。渡氏はブライアントパークのように、可動椅子を用いたプロジェクトを日本で多数実施されている。これについて、ゲール先生にコメント頂きたい。(NSRI)

・　渡先生のプレゼンテーションは前半がよいのでは。後半では渡先生が質問をし、ゲール先生が応えるという構成でいかがか(北原)

・　可動椅子の実験に際して、利用者がどのように椅子をアレンジしていたかを記録し、どこに多くの人が集まっているのか、どのように滞留が起こっているのか、どの椅子が使われているのかを調べることで、多くのことが学べる。ともあれ、可動椅子は素晴らしいツールだと思う。(ゲール氏)

・　そのようなコメントを交えて、セッションの最後に渡先生の質問に答え、椅子の使い方、日

本のプレイスメイキングについてコメントをしてください。(NSRI)

・ これは 35 分に詰め込むのにはいささか大胆なプログラム構成だ(笑)。(ゲール氏)

Ⅲ. 基調講演のトピックについて

・ このシンポジウムの中でヒューマンスケールのまちづくりが如何に重要かをお話しいただきたい。日本ではヒューマンスケールのまちづくりはあまり普及していない。特に、市長、弁護士、税理士、会計士等他、他の分野の方はこのようなコンセプトを知らない方も多い。面と向かって言われたこともあるが、なかにはヒューマンスケールの都市計画は日本に合わないという人さえいる。(国交省)

・ どこに行ってもそのような声は聞こえてくる。(ヒューマンスケールのまちづくりは)アメリカではできない、オーストラリアではできない、中国ではできない、できる場所はないと主張する人は数多くいた。ただ、そのような街で実際に数年間実施すると、やがて彼らはこう言い出す「私はそんなことは言っていない」。(ゲール氏)

・ そのようなことは頻繁に起こる。なぜなら、多くの文化、(民族の)傾向が存在するが、自分たちの文化の中にヒューマンスケールの考え方が存在することに気づかないからだ。(モータリゼーションが加速する)65 年前にはヒューマンスケールのまちづくりは全ての場所にあった。現在は忘れられているだけなのだ。(ゲール氏)

・ 日本人は伝統的に小さな空間を好む。ゲール先生は向島を覚えていると思うが、あそこにも小さな空間がたくさんあった。(北原)

・ 全ての都市に親しみのもてる空間がある。しかし建築家、都市計画家はこれまでそのような空間を取り除き、交通のエンジニアは自動車の為に道路を建設してきた。私たちはその環境に慣れてしまった。しかしそれは普通の環境ではないのだ。(ゲール氏)

・ 基調講演の中で、自動車がどのように都市を侵食しているか、そしてそれからどのように逃れるかをお話する。その中で、50 年前にジェーンジェイコブスがリバブルシティで提唱したフレーズについて言及するつもりだ。彼女はモダニストや交通工学者が都市計画を行うと、(アメリカの)大都市は死に至るといった。50 年の時を経て、今は NY やモスクワでさえ、ヒューマンスケールのまちづくりが導入されている。アメリカ人は、ヨーロッパで発展したヒューマンスケールのまちづくりは NY のような大都市では通用しないといった。24 時間眠らない大都市では、ヨーロッパの小さな街の方法は成り立たないと。(ゲール氏)

・ しかし、市長の英断で、NY の車道を歩行者専用道路に変える期間限定の社会実験を実施した。半年後には多大な成果が得られ、社会実験ではなく恒常的に歩行者専用道路となった。アメリカ人も人間なのだ。(ゲール氏)

・ この本の中でもその点がポイントで、私たちは種としての人類(ホモサピエンス)の居住地(アーバンハビタット)について研究している。(ゲール氏)

・ エンリケ・ペニャロサ（Enrique Peñalosa 元ボゴタ市長）が言った、「私たちはゴリラやク

ジラ、象が好むハビタットついては詳細に研究しています。しかし、ホモサピエンスのアーバンハビタットについて研究は少なく、知らないことが多い。私たちは運転することや摩天楼を建造することに忙しく、これらを研究することを怠った」。(ゲール氏)

- 私たちは会社でこのような仕事をしている。2000 年、63 歳の時に設立したので 14 年しかたっていないが、ご存知のとおり、今日では世界中の多くの都市がこのような人中心の都市計画に興味を持っている。(ゲール氏)

- 先日オーストラリアのウーロンゴンという街で公演をした際、「200 以上の街のデザインを手がけたゲール・アーキテクツが、私たちの街に来た」と歓迎を受けた。(ゲール氏)

- このように、多くの人々がデベロッパーや政治家、交通工学者のエゴに則った街ではなく、人間中心の街に関心を寄せている。私はそのようなことを基調講演で話すつもりだ。また、日本で起こりうる課題についても述べたいと思う。(ゲール氏)

- ヒューマンスケールのまちづくりのお話を聞くため、400 名の方がシンポジウムに参加する。今回のシンポジウムはプレイスメイキングの名を冠しているが、プレゼンテーションの中ではあなたの 50 年の実績についてもお話しいただきたい。例えば、街の外部空間の改善や、活き活きとした街路のプロジェクトについてもお聞きしたい。(国交省)

- 私たちは“ヒューマンダイメンションインシティプランニング”と呼んでいる。私はプレイスメイキングという言葉では十分でないと考える。物質的なものに偏っている。(ゲール氏)

- 私のコンセプトはハビタット。人々が生活する場と定義する。都市全体といえるかもしれない。City for people は意味的に重複する。プレイスメイキングはこのコンセプトの一部といえるかもしれないが、同義ではない。(ゲール氏)

- あなたたちがプレイスメイキングという言葉をどこから引用したかはわかりませんが、NY の公共空間のプロジェクトではプレイスメイキングという言葉を使うことが多い。これらの公共プロジェクトは都市のツボ治療的に行われることが多い(面的ではなく点的なプロジェクトにプレイスメイキングという言葉を使うことが多い)。私は、より範囲の広いハビタットを意識している。(ゲール氏)

- コペンハーゲンは、全ての人々にとって住みやすい街づくりを政策に掲げている。場所ではなく街。そのことについても基調講演でお話するつもりだ。(ゲール氏)

- 渡先生はヒューマンビオトープとおっしゃっている。(国交省)

- ハビタットという言葉がいいのではないか。UN ハビタットなど、国際的にも頻繁に使われている。(ゲール氏)

- このような歩行者優先の街をつくりたいと思っている。金曜日のシンポジウムで聴衆を勇気づけて頂きたい。(国交省)

- もちろん。私たちはそのような仕事に 50 年取り組んできた。パキスタン、グリーンランド、

アフリカでもこのような取り組みをしてきた。全ての人々がグッドハビタットを望んでいる。(ゲール氏)

- 一点捕捉させて頂きたい。日本のプレイスメイキングについてのプレゼンテーションをお聞きいただくことになるが、それに対するコメント若しくは提案をお願いしたい。(NSRI)
- それは、3 時間で日本の事情を理解し、意見を言うということだ。努力はするが、3 時間で日本のプレイスメイキングを学ぶことは難しい。一般的なコメントになる。ただ、このようなシンポジウムが開かれること自体、ポジティブなサインといえる。歯車が動き出している。(ゲール氏)
- 日本では景気の低迷が続いている。私たちは、人間を中心としたまちづくりほど安くつく方法はないことに気づいた。(ゲール氏)
- コペンハーゲンでは、財政的に厳しい時期に多くのいいアイディアが生まれた。彼らは、限られた予算の中で、街路の改善を迅速に実施した。人々は我々が行っているプロジェクトを見て、改善を実感した。リヨン、バルセロナでも同様のことが行われた。なぜなら、活き活きとした通りを作るのにお金はあまりかからないから。高速道路等その他のインフラを作るのにはお金がかかる。しかし、人々にとっていい環境を作るのにはお金がかからない。このような手法は、経済が低迷する状況にはうってつけの手法だ。このようなお話もしたいとおもう。(ゲール氏)
- コペンハーゲンでは、人々の考え方(マインドセット)の転換が重要だといわれた。考え方が変われば、変化はおのずとおこる。例えば昔は道路わきに駐車場を作っていたが、今では自転車道を作っている。日本の自転車交通の状況はどうか？(ゲール氏)
- 徐々に増えていますが、インフラ整備はまだまだの状況。(渡)
- 日本では自転車が歩道を走っている。この状況は歩行者にとってよくない。日本は急速な高齢化が進んでいる。彼らは健康のために外に出て運動する必要がある。外部空間に良好なハビタットを整備すれば彼らは歩くようになる。このような人口動態を見ても、人間中心のまちづくりが重要であることが分かる。(ゲール氏)
- 日本でどのような取り組みが行われているのか、聞くのが楽しみだ。また、どのような方が聞きに来るのか楽しみだ。(ゲール氏)
- 約 360 名の申込みを頂いており、その後も参加希望が相次いだため結局約 120 名をお断りする結果となった。参加者の構成は、40%は民間企業、30%は自治体行政、15%は学生や大学関係者となっている。参加者の専門は、建築、都市計画、土木の方が多く約 8 割を占める。デベロッパーもいる。(NSRI)

以上

プレイスメイキングシンポジウムについて
（基調講演に先立つヤン・ゲール氏へのインプット）

１．シンポジウムの開催趣旨

・ヒューマンスケールで居心地のよい都市空間や、人々が街に出て生き生きと交流し、賑わうまちが求められている。日本でも一部の有識者の間では Public life の研究が行われてきたが、首長や市民には、Public life study の必要性や重要性はなかなか理解されず、また、Public の概念も未成熟である。

・日本社会は、人口が増加し、都市や建築をつくり広げてきた時代から、人口減少、ストックを活用する時代へと変曲点を超えた。成長時代を支えてきた、マクロな「マスタープラン型のまちづくり」だけでは対応できなくなっており、それを補完するミクロなまちづくり、人間の生態や行動特性にきちんと目を向けた「ヒューマンスケールのまちづくり」がきわめて重要となっている。

・「ヒューマンスケールのまちづくり」とは何か、どのように進めて行けばよいのか、「ヒューマンスケールのまちづくり」における世界的な権威であるヤン・ゲール氏と、国内の先駆的な有識者は実務家を招いてお話いただくことで、その普及・啓発を図る。

２．普及啓発のターゲット（シンポジウム事務局の考える仮説）

・普及啓発のターゲットを設定するにあたり、ハイテクマーケティングで高名な、Geoffery A. Moore 氏の著書、Crossing the Chasm の考え方を参考に、我々は下記のような仮説を設定している。

ｉ）都市空間の魅力の増進として、居心地の良い賑わい活気のある都市空間・歩行者空間を創出すること、最も基本的な哲学でありヤン・ゲール先生提唱の「ヒューマンスケールのまちづくり」や、近年「Placemaking」と呼ばれる取組、それは、

ｉ）街路・公園等の整備・維持管理や有効な民間公開空地等の誘導にあたって問題を抱えていたり、都市空間の魅力向上に意欲を持つがその方法論が分からなかったりしている、自治体首長等向けの、近代都市計画への反省を踏まえ、都市観察や認知科学の知見を取り入れて、人間の感覚・認知に寄り添った手法であり、デザインにより工学的に実現可能な段階にあり、再現性が高く、具体的な実施方法とプロセスを構想できる都市政策であり、

ⅲ）実施した結果、リラックス状況下における知的な刺激が人的交流を育み、人びとのクリエイティヴィティ・創意工夫やモチベーションを引き出し、多様な人々を引き寄せ、滞留時間も増大することにより、人々の交流による情報や知の創造、住民の地域に対する愛着、経済活動の活性化など、都市空間が本来持っていた機能が発揮される。

ⅳ）そして、「“補助金に依存したまちづくり”や単なる“お祭り”“路上イベント”“歩行者天国”“フリーマーケット”など 」とは違って、この方法論には「快適で魅力的な都市空間・歩行者空間の形成・維持、自立的・継続的なまちづくりの実現・定着、地域活力の向上、整備や管理に係るコストの縮減等の都市の多面的な課題解決力」が備わっている。

３．Key Note Speech について

・「ヒューマンスケールのまちづくり」は、21 世紀の Livable cities にとって必須であり、世界的にも mainstreem となりつつあることをお話頂きたい。

・人間の街（特に第 4 章"The City at eye level"）などに蓄積された知見を活かして、まちを魅力あるものにするためにできることは何か、何が大切か、具体的にご紹介いただきたい。

・世界の都市へと「ヒューマンスケールのまちづくり」を広げてこられたお立場から、普及啓発にはどのようなキーポイントがあり、工夫が求められるのかお聞きしたい。

Placemaking Symposium

1. Objectives of the symposium

A human scale urban space with a comfortable and lively activity, where people mingle with others, has been required to develop in Japan. Even a few experts has been studying on “public life”, its importance is not yet understood by local administrative chiefs and citizens. And more, we haven’t clearly determined the picture of “public” yet.

After peaking its population growth, Japan is projected to suffer from an acute decline in its population. As such, urban planning under master Plan (“bird’s eye” scheme), once the mainstream, no longer works in Japan. Japan urgently requires an alternative scheme to effectively utilize existing stock of public facilities and real estate properties. Transitioning from a Master Planning scheme into a “Human Scale” urban Planning is absolutely essential in 21st Century.

To learn and share the idea of what a human scale urban development is and how we conduct to develop through new scheme, by holding a symposium to invite Prof. Gehl, an internationally well known as urban designer and experts on urban design in Japan.

2. Our consciousness about issues of introduction & promotion of the idea in Japan

A human scale urban planning, creating a comfortable and lively urban space and pedestrian street, advocated by Prof. Gehl is an ideal approach for urban development in 21st century. Recently, local administrative chiefs in Japan, they are willing to improve attractiveness of the urban space but they are not sure its methodology, what and how to do. A human scale urban planning is the answer for them. They are facing the difficulties in development and maintenance of street and park and implementation of planning instrument like POPS (privately owned public spaces).

Based on the reflections of modern age urban planning, we have understood that it is important to implement proper planning instruments developed in considering the people’s behavior by studying on the public life and knowledge of cognitive science. Already it is spatially achievable by designing the urban space. And we are ready to introduce actual implementation methods and their processes.

If local government realizes its importance and work on it, it vitalizes urban activity; intellectual stimulus causes intercommunion among people and enhances people’s creativity, ingenuity and motivation. Such a vibrant city attracts people and leads more people to visit the city and spend the time longer than before. This positive circle brings about positive effects such as knowledge creation among people, attachment to the region, and revitalization of economic activities.

In Japan, local government depends largely on national and local subsidy to improve urban attractiveness. Festivals, street events, pedestrian paradise (a street where vehicles are shut out temporarily) and a flea market are all temporally device for creating lively atmosphere on the street. We are expecting that an approach of the human scale urban planning helps to realize sustainable and attractive urban space, improve regional vibrant, and reduce cost for development and maintenance of urban infrastructures and so forth.

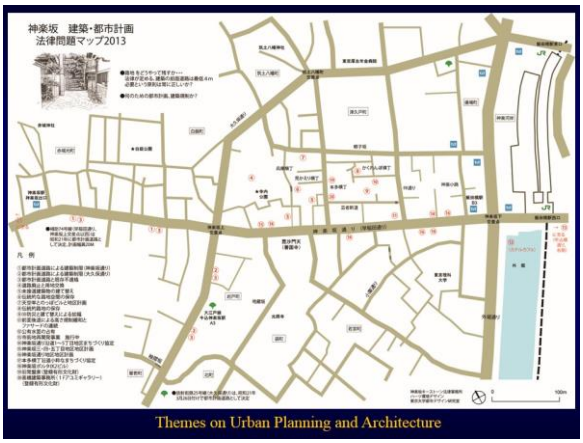
3. Key note speech (What we expect to hear)

1) The importance of the idea of a human scale urban planning. This is a significant approach for realization of livable cities in 21st century. On a worldwide, recently, the idea of planning on a human scale tends to become a mainstream.

2)Specific example of what we can do and what we should do for regenerating cities more attractive by using the knowledge you have accumulated throughout your research on the "cities for the people; especially in chapter4: the city at eye level"

3)From your point of view that you have successfully spread out the idea of the human scale urban planning into the cities in over the world, any tips and suggestions for introducing and promoting the idea of the human scale urban planning to widely share the idea in Japan.

（４）エクスカーション（11 月 27 日）のプレゼンテーション資料　鈴木俊治氏



KAGURAZAKA
Attractiveness and Urban Problems

- Preservation and utilization of historic/traditional zone
- Disaster preservation/preparation in the wood structured building district
- Form of living in the urban center

- Existence and effect of “Authorized Road Plan”
- Vitalization and Promotion of the Main Commercial Street

- Space design and pedestrian/auto traffic planning at the Iidabashi Station area
- Improvement and utilization of waterfront of “The Sotobori” moat
- Improvement of street-scape

- Enhancement and sustainability of “Sense of Place”

How can we solve the problems and move forward?

Diversity

The Location

Sense of Kagurazaka = Diversity and Harmony “和”
～ Not only traditional Japanese, but accepts diversity ～

The Bishamonten
Zenkokuji Temple

Landmark of Kagurazaka
400 years since opening
200 years in Kagurazaka

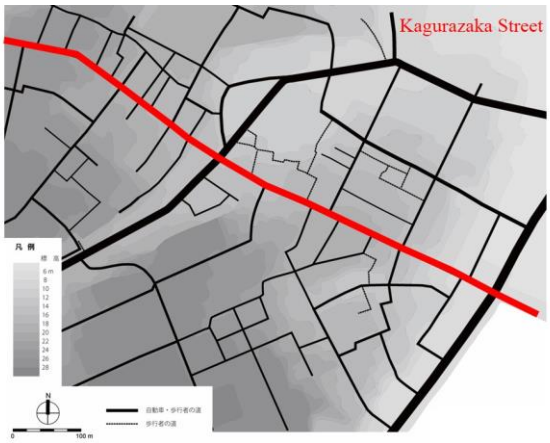
Kagurazaka Street - Everyone can find his/her place

Street Pattern and Lot division of Edo Period remain as basic framework

Kagurazaka
Street

Consecutive
Narrow
Façade

Friendly relationship
between street and
shops



The Alley (ROJI) Community

Established and maintained by
"Karyukai"
(The place and society of
Ryotei and Geisha)

Remains as the CORE of the town
How can we preserve and utilize the place?

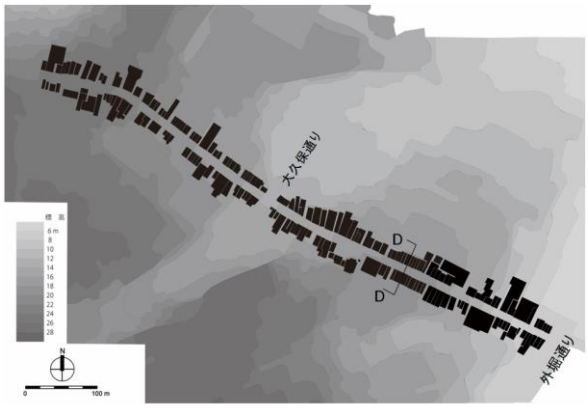
■Kagurazaka St.

The Main
Street
In Kagurazaka

- Slope street, with a holistic sense of place.
- Friendly relationship of street and shop front – façade open to street
- Rhythmical change by consecutive narrow facade
- Welcome space at shop front

The Atamiyu Stairs

Used in scenes of TV drama



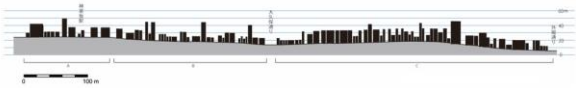
■Kagurazaka Street

The Hyogo Alley

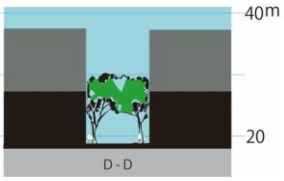
Special atmosphere of history, culture and life mixed

If once lost, never again
Special features of space and manner

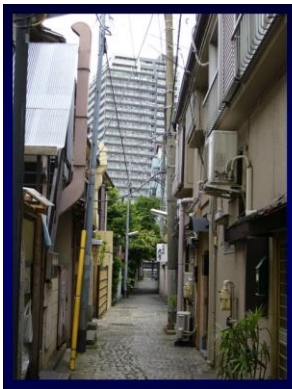
Safe walk for senior citizens
"Barrier free" does not necessary mean "no stairs"



	神楽坂通り
延長(m)	790.0
平均幅員 W (m)	11.0
平均勾配(%)	3%
建築数(棟)	93.5
平均間口(m)	8.9
沿道建物階数(階)	4.6
沿道建物高さ H (m)	15.0
H高さ/W幅員	1.4



■神楽坂通り



Hide and Seek Alley

Alley space with historic sense of scale
(yet high rise tower on the back)

Looking down the alley space

Hide and Seek Alley

Character of Kagurazaka

- Living, retail, restaurant, history and culture exist in harmony
- Street pattern and lot division since the Edo Period remain and are alive.
- Two commercial street are vital, at lower side and upper side.
- Alleys and culture, founded and brought up by "Karyukai"
- Rich accumulation of people

Alley with
casual, relaxed atmosphere

Development
after development

- Identity of Kagurazaka is getting stronger, to become a brand.
- New style of urban sightseeing, mainly by walk.
- Comfortable and convenient place to live
- Traditional culture and atmosphere
- "High-end" and "Casual" both exist in town, everyone finds his/her favorite place.

Diversity in restaurant/ retail façade, with "human scale"

Festival / Event

Variety of Night Life,
Modern and Tradition

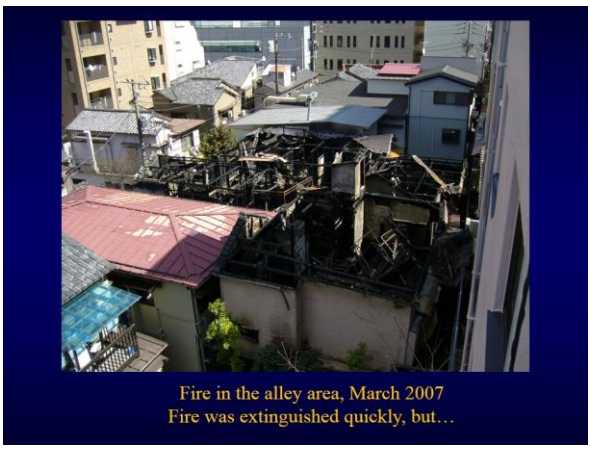
Kagurazaka
Festival

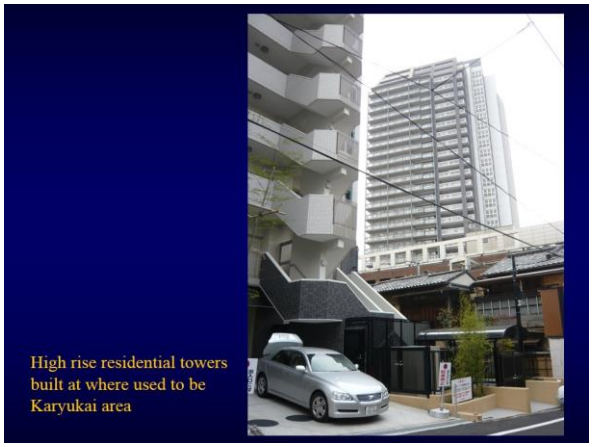
Every year, end of July
Wed. & Thu : Hoozuki Market (ground cherry), Evening Concerge
Food stalls only by the local shops
Fri. & Sat. : Awa-Odori festival

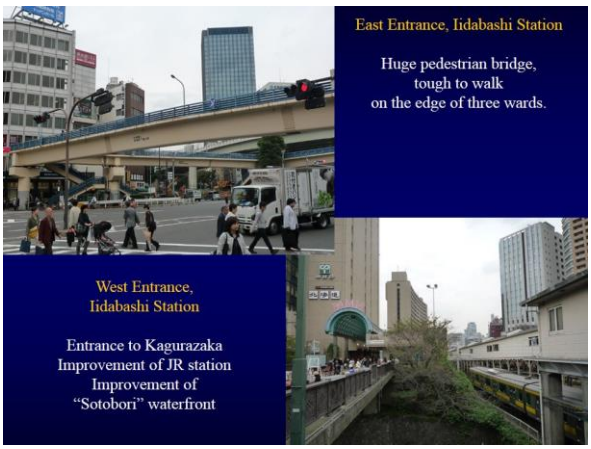
What have been happening in recent years….

Kagurazaka's Value and Succession

- An intimate place where you recognize "faces" of variety of people, and where everyone finds his/her favorite place
  - → Share the vision, make the place a bit better, and succeed the value for the next generation
- Balance of
  Unity / Rule ⇔ Personality / Freedom
- Loose connection between local entities







Process of Planning and Revitalization "Machizukuri"

- 1970-80's : Redevelopment around Iidabashi Station, Protest movement for reclamation of "Iidabori Moat"
- 1990 Designation as "Machizukuri promotion district" by Shinjuku ward
- 1991 "Kagurazaka Machizukuri Organization" established, the local leaders of relevant groups became the member.
- 1992 "Machizukuri promotion plan" was proposed to the ward, the goal being "Iki (Chic, cool, matured, noble, friendly) place where tradition and modern cross-over.

- 1994 "**The Charter of Kagurazaka**" by the Machizukuri Organization

(1) We will make the place friendly to pedestrians, with the streets and stone paved alleys on the slopes.
(2) We will make the place of rich culture, with its unique history and tradition.
(3) We will make the vibrant main street where people enjoy shopping safely.
(4) We will make the soft-touch place where is comfortable to live.
(5) We will make the future of Kagurazaka by making "Machizukuri Agreement"

- Comprehensive approach to preserve and enhance both the street-scape and culture.
- Mention not only on history and culture, but shopping and living environment.
- Formulation of Machizukuri Agreement, as a tool to realize the vision of the charter.
- Respects "diversity", "flexible tie" and is the basis of the area management.

Summary of the Process

- Started by the citizens' action to preserve the local environment.
- The main objective : preserve, enhance and sustain the local value.
- Development and improvement of legal scheme and plans, collaborating with the ward government.

【Problems】

- Widening of alleys and demolish of wood structured building were done largely in the last 20 years.
- Scrap-and-Build, at possible places by the possible ways.
- Small size lots along narrow alleys remain untouched. Difficult to solve by the current legal methods.

- 1996 Kagurazaka was designated as "Place of vibrant interactions" and "Iki Place on the slope, by the moat and with history" in the Shinjuku ward urban master plan.
- 1997 The policy of Street scape Improvement was admitted by the national minister and approved by the merchant association. Started improvement of sidewalk, street trees, street lights and underground wiring.
- 1997 "**The Machizukuri Agreement**, Block 1-5 along Kagurazaka Street "

(1) Make consecutive street scape – Unity in the built-to line
(2) Make friendly streetscape – Control of building height and form
(3) Make a space for comfort and to welcome visitors at shop-front
(4) Apply "iki" idea, design and devices

Workshops, Presentations
by citizens, students and professionals.

The Machizukuri Agreement – important points

- Refers to "building form", based upon the concept of "The Charter of Kagurazaka"
- Basic and simple description, respecting diversity and self-initiative.
- Not legally mandatory, but keeps practical validity, as the base of discussion between entities, collaborating with the ward office.
- The agreement is practically managed by the merchants association, supported by the "Ikimachi Club" and other specialists in law, urban planning, and architecture.

Kagurazaka Street Scape Guideline (Tentative)

- Based upon the Kagurazaka Charter
- Covers whole Kagurazaka, mainly
  Kagurazaka Street block 1-5 zone
  Traditional alley zone
- Supplemental of the Machizukuri Agreement and the District Plans

} Standards for the physical design of Street Scape and Building

Respect the mentality and manner as reasons or background for the physical design

- In 2009, discussed and made through 6 workshops (managed by the Ikimachi Club) and proposed to the Koryukai.
- The guideline is to be managed by the design committee, positioned under the Koryukai. NPO Ikimachi Club will support the management activity.

- 2000 Case of 26 story super high-rise residential tower
  - Local citizens accused the ward and developer for the change (move) of public street. Accusation not accepted at the supreme court.
  - Recognition for necessity of "district plan" and comprehensive countermeasures as the whole district.
  - More high rise residential towers followed.
- 2004 "Kagurazaka Machizukuri Koryukai", the main local body for the district plan established.
- 2007 District Plan of "Kagurazaka 3,4,5 Chome (block). Partial regulation of building use and height.
- 2009 "Landscape and Machizukuri Plan" by the ward.
  - Policy of street scape preservation described.
  - Scheme of landscape advisor started.
- 2011 District Plan of "Kagurazaka Street"

■The 7 Major Articles, for Block 1-5 along Kagurazaka Street

1. Keep the Human Scale of the street
2. Keep friendly relationship of the street and shops.
3. Control and coordinate the building height.
4. Use the ground floor in the way to fit to the street
5. Use natural or traditional materials for the lower floor façade, and create continuity.
6. Beautiful and comfortable entrance to the street
7. Arrange the signage and lights for the pedestrians to enjoy walking

■The 7 Major Articles for the Traditional Alley Zone

1. Do not widen, do not extinguish an alley
2. Keep the scale of the "The Kagurazaka alley scale"
3. Keep continuity of alley scape and façades
4. Use natural stone for alley surface finish
5. Make the best use of natural materials for building exterior or property edge, and make them compatible with the surroundings.
6. Use signage and lights that fit to the alley environment.
7. Keep the traditional good manner in the alley zone, succeed it to the next generation.

Kagurazaka,

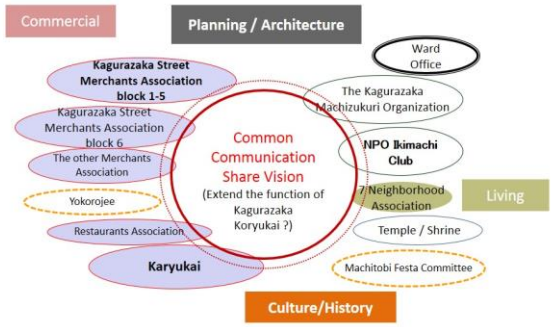
More to come, more to DO!

ssuzuki@hearts-design.com

A Plan of Street and Alley Network in Kagurazaka

Consider the hierarchy, and discuss the legal conditions.

Organizations relevant to the Area Management and their Relationship



■The Next Step

- New scheme of planning and area management, that meets the present conditions. Local-oriented planning,
- New way of consensus building, including not only property owners but tenants and users, sharing appropriate rights and responsibilities.
- Realize the value and sense of the place, use and manage the town accordingly, and make the place sustainable.
- Preserve and utilize the traditional alley zone while considering disaster prevention / preparation.

２．３　シンポジウムの広報展開

（１）実施した広報展開

平成 26 年 8 月～11 月にかけて、シンポジウム企画の一環として、登壇者、各団体等のご協力を得て、以下の広報展開を実施した。

図表　広報展開の実施状況

	方法	内容・対象等	広報時期
開催案内	ちらし、リーフレットの製作・配布	■速報版ちらしの製作・配布 ■リーフレットの製作・配布 （郵送配布） ・全国の都道府県、市区町村 ・国土交通省地方整備局、北海道開発局、（内閣府沖縄振興局） ・連続座談会・シンポジウム登壇者 ・事務局関係者からのダイレクトメール （会場の協力による配布） ・3331Arts chiyoda ・吉祥寺グランキオスク	速報版ちらしは8月第1週～ リーフレットは9月第1週～
	登壇者等による広報	ちらし、メール、SNS、口コミ等の方法による広報	同上
	ＨＰへの掲載	■国交省ＨＰへの掲載 ・「プレイスメイキングシンポジウム 2014　『ヒューマンスケールのまちづくり』」として国土交通省 HP に掲載 ■関係団体等での HP 掲載協力 ・（公）JIA 日本建築家協会 ・建築士会連合会	平成 26 年 8 月～
	メールマガジン メーリングリスト	■関係団体等での情報発信協力 ・（一）日本都市計画家協会 ・（一）都市計画コンサルタント協会 ・matiza	平成 26 年 8 月
	国交省ロビーでの広報	リーフレット等のポスター掲示による広報	11 月 20 日～28 日
広報	雑誌「新都市」への掲載	■（公）都市計画協会発行「新都市」への記事の掲載 ・連続座談会の記録ダイジェストを平成 26 年 9 月号～平成 27 年 2 月号にかけて掲載。 第１回：平成 26 年 9 月号、10 月号で前/後編 第２回：平成 26 年 9 月号、10 月号で前/後編 第３回：平成 27 年 1 月号、2 月号で前/後編（予定） シンポジウム（鼎談）：平成 27 年 3 月号（予定）	

（２）広報展開で重視した点

広報展開の実施に際しては特に以下の点を重視した。

〇速報版ちらしを活用した、地方公共団体（首長）への早期情報伝達

本調査の広報方策（シンポジウムの実施）では、地方公共団体、特に首長等への普及啓発を重視していたことから、首長を始めとする地方公共団体関係者の予定を確保していただくため（遅くとも 3 か月以前）、シンポジウム企画の概要が確定した段階で可能な限り早く情報を伝達すべく、速報版のちらしを製作・配布した。（連続座談会第 1 回開催の１ヶ月前、シンポジウム開催の約４か月前）

〇リーフレット製作

リーフレットの製作においては、事前に有識者ヒアリングを実施した結果をもとに、印象に残るメッセージを抽出、記載することにより、手に取る人の関心を高めるような紙面となるように配慮した。

判型、形態に関しては、手に取りたくなるようにすること、メッセージが一覧できるよう片面に配置すること、メッセージを明快に伝えること、感度の高い人々にも高い関心をよせてもらうこと等を念頭に、リーフレットの好例を参考にしながら検討した（連続座談会第２回の登壇者でもある黒﨑輝男氏が設立した自由大学のリーフレット等）。結果、A2 サイズ八つ折（判型 A5）のリーフレットとし、開いた状態でポスターとしても掲示できるようデザインを工夫した。

また、登壇者のプロフィールについても詳細に掲載し、登壇者が関係する先進事例の写真を使用するなど、プレイスメイキングに対する関心を高めるような紙面構成とした。

（３）速報版ちらし、リーフレット

速報版ちらし（表）

PLACEMAKING FORUM 2014

プレイスメイキング　連続座談会

9月-10月に計3回、連続座談会を開催します。
シンポジウムのパネリストに、各座談会のモデレーターを務めていただき、
専門分野やアプローチが異なる多様な専門家を交えた、熱い議論が行われます。

PROGRAM プログラム

第1回　『ストック活用時代のリノベーションまちづくり』
西村 浩氏（㈱ワークヴィジョンズ 代表）× 清水 義次氏（㈱アフタヌーンソサエティ 代表）× 松井 直人氏（三菱地所㈱ 顧問）

第2回　『状況やアクティビティをデザインする』
伊藤 香織氏（東京理科大学 准教授）× 三浦 展氏（文化・都市空間研究者）× 黒崎 輝男氏（渋谷創造集団㈱ 代表）

第3回　『賑わいや居心地良い空間をデザインする』
渡 和由氏（筑波大学 准教授）× 鈴木 俊治氏（ハーツ環境デザイン 代表）× 三友 奈々氏（日本大学 助教）

VENUE 会場

日時：2014.09.03（WED）13:30-15:00（開場 13:00）
場所：Arts Chiyoda 3331 コミュニティスペース
／東京都千代田区外神田6丁目11-14

日時：2014.09.21（SUN）13:30-15:00（開場 13:00）
場所：国連大学 レセプション・ホール
／東京都渋谷区神宮前5丁目53-70 国連大学ビル 2F

日時：2014.10.28（TUE）18:00-19:30（開場 17:30）
場所：吉祥寺グランキオスク
／東京都武蔵野市吉祥寺本町1-33-10 丸二ビル 2F

INQUIRY お問い合わせ

《主催者》国土交通省 都市局
《事務局》㈱日建設計総合研究所（担当：西尾、井上、小林）
E-mail：nsri_info@nikken.jp　#placemaking で検索

※入場は無料です。各会とも先着順となっております。定員が30名程度ですので、定員に達した場合は、入場をお断りする場合がありますので、あらかじめご了承ください。（なお、定員は予告なく変更する場合があります。）
※座談会で登壇者から聞いてみたい内容などがございましたら、事前に左記までお寄せください。

速報版ちらし（裏）

PLACEMAKING SYMPOSIUM 2014

プレイスメイキング　シンポジウム

『　ヒューマンスケールのまちづくり　』

旅行などで訪れた都市の素敵な景観に、思わず「わぁ」と歓声をあげたことはありませんか？
行きつけの場所やまちに行くことは、いつもワクワクしたり、ホッとしたりしませんか？
そのような驚きや、ワクワクしたりホッとしたりする秘密は何でしょうか？
都市空間の魅力の増進として、賑わいを創出し居心地を良くすることは「プレイスメイキング」と呼ばれています。
「ヒューマンスケールのデザイン」が最も基本的な哲学です。
本分野の第一人者であるヤン・ゲール氏と、国内で空間の魅力創造等に携わる研究者や実務者をお招きして、
「ヒューマンスケールのまちづくり」とは何か、どうしたらよいかをテーマに、お話をしていただきます。
連動企画として、さらに他分野にまたがる研究者・有識者による座談会を事前に開催いたします。

PROGRAM　プログラム

2014.11.28（FRI）　14:30 ～ 19:30（開場 14:00）

第１部　基調講演　14:40 ～

Jan GEHL 氏（ヤン ゲール）

1936年生まれ。ゲール・アーキテクツ主宰。1960年代からコペンハーゲンやN.Y.の低層空間をヒューマンスケールな歩行者空間にデザインしてきた第一人者。主な著書に、『人間の街』、『建物のあいだのアクティビティ』など。

鼎　談　15:20 ～

Jan GEHL 氏（ヤン ゲール） × **北原 理雄 氏**（キタハラ トシオ）（千葉大学 名誉教授） × **渡 和由 氏**（ワタリ カズヨシ）（筑波大学 准教授）

第２部　パネルディスカッション　16:15 ～

松村 秀一 氏（マツムラ ショウイチ）（東京大学 教授） × **渡 和由 氏**（ワタリ カズヨシ） × **西村 浩 氏**（ニシムラ ヒロシ）（㈱ワークヴィジョンズ代表） × **伊藤 香織 氏**（イトウ カオリ）（東京理科大学 准教授）

第３部　レセプション・交流会（参加自由、会費制）　18:10 ～

VENUE　会場

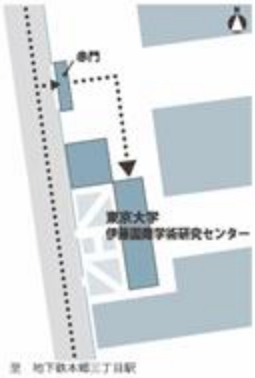
東京大学 伊藤謝恩ホール

東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学本郷キャンパス内
赤門から入って直ぐ右側突きあたり

ACCESS　アクセス情報

METRO　丸の内線 本郷三丁目駅（徒歩 8分）
大江戸線 本郷三丁目駅（徒歩 6分）

BUS　都バス 茶 51 駒込駅南口 又は 東 43 荒川土手操車場前行 東大（赤門前）バス停



INQUIRY　お問い合わせ

《主催者》国土交通省 都市局
《事務局》㈱日建設計総合研究所（担当：西尾、井上、小林）
E-mail：nsri_info@nikken.jp　　#placemaking で検索

※シンポジウムは無料、レセプションは会費制となっております。
※シンポジウム及びレセプションの申し込みは先着順となっております（定員 300 名）。
左記のメールにてお申込みください。
（氏名、所属（勤務先等）、電話番号、シンポジウム・レセプションの出席についてご記入の上、メールの件名に「シンポジウム希望」と明記してください。）

リーフレット（表）

リーフレット（裏）

３．居心地を良くし賑わい活気のある都市空間創出に関する広報方策の実施

【　本章のサマリー　】

・連続座談会は、約９割の人が満足するなど、非常に高い成果を得た。
・参加者は 90%以上の人が「よくわかった」「わかった」と回答するなどプレイスメイキングに対して高い理解度を得られることがわかった。
・「プレイスメイキング」「ヒューマンスケールのまちづくり」に関して 99%の人が「もっと情報を知りたい」と回答をするなど、市民は高い関心を寄せていることがわかる。

３．１　シンポジウムの開催結果（概要）

（１）座談会

参加者へのアンケートによると、各回ともに全体的に約９割の方が満足（満足、やや満足あわせ）と回答しており、特に第１回は満足という回答が 80%と非常に満足度が高い結果となった。

①第１回座談会

開催日時	平成 26 年 9 月 3 日（水）13 時 30 分～15 時 00 分（開場　13 時 00 分）
開催場所	3331 Arts Chiyoda （東京都千代田区外神田 6 丁目 11-14）
テ ー マ	『ストック活用時代のリノベーションまちづくり』
登 壇 者	西村　浩 氏／㈱ワークヴィジョンズ代表　※モデレーター 清水義次 氏／㈱アフタヌーンソサエティ代表 松井直人 氏／三菱地所㈱顧問
参加者数	60 名（男性 46 名、女性 14 名）

②第２回座談会

開催日時	平成 26 年 9 月 21 日（日）13 時 30 分～15 時 00 分（開場　13 時 00 分）
開催場所	国連大学レセプションホール（東京都渋谷区神宮前 5-53-70）
テ ー マ	『状況やアクティビティをデザインする』
登 壇 者	伊藤香織 氏／東京理科大学 准教授　※モデレーター 三浦　展 氏／㈱カルチャースタディーズ研究所 代表 黒﨑輝男 氏／流石創造集団㈱ 代表
参加者数	55 名（男性 39 名、女性 16 名）

③第３回座談会

開催日時	平成 26 年 10 月 28 日（火）18 時 00 分～19 時 30 分（開場　17 時 30 分）
開催場所	吉祥寺グランキオスク（東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-33-10 丸二ビル 2F）
テ ー マ	『賑わいや居心地良い空間をデザインする』
登 壇 者	渡　和由 氏／筑波大学 准教授　※モデレーター 鈴木俊治 氏／ハーツ環境デザイン 代表 三友奈々 氏／日本大学 助教
参加者数	60 名（男性 42 名、女性 18 名）

【開催状況】

①第１回座談会

②第２回座談会

③第３回座談会

【登壇者プロフィール】

①第１回座談会

西村　浩 氏 	建築家・デザイナー。 1967 年佐賀県生まれ、東京大学工学部土木学科卒業。同大学大学院工学系研究科修士課程修了後、設計事務所勤務を経て、1999 年㈱ワークヴィジョンズ設立。建築・土木・まちづくり等、常に「まち」を視野にいれ、分野を超えてモノづくりに取り組む。 2011 年から佐賀市で「空き地リビング」をコンセプトに地域の居場所をつくる社会実験として、まちなかの空き地に芝生広場を整備し、中古コンテナを連結した雑誌図書館と交流スペースを設置する「わいわい!!コンテナ」プロジェクトを実践。企画・設計・デザインを手がける。 主な計画・作品は大分都心南北軸構想、佐賀市街なか再生計画、函館中心市街地トータルデザイン、岩見沢複合駅舎、鳥羽海辺のプロムナード、長崎水辺の森公園橋梁群など。2009 年度グッドデザイン賞、2010 年日本建築学会賞受賞（岩見沢複合駅舎）。
清水 義次 氏 	㈱アフタヌーンソサエティ代表取締役、建築・都市・地域再生プロデューサー、東洋大学大学院公民連携専攻客員教授。 1949 年山梨県生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業後、コンサルタント会社を経て 1992 年㈱アフタヌーンソサエティ設立。都市生活者の潜在意識の変化に根ざした地区のプロデュース・プロジェクトマネジメント、都市・地域再生プロデュースを行う。 3331 Arts Chiyoda、北九州市小倉家守プロジェクト、岩手県紫波町オガールプロジェクトなどをプロデュース。 著書に『リノベーションまちづくり』など。
松井 直人 氏 	三菱地所㈱顧問。 北海道函館市出身。北海島大学大学院工学研究科土木工学専攻修了、1980 年建設省入省。都市局街路課街路事業調整官、大分市助役、国土交通省都市・地域整備局まちづくり推進課都市総合事業推進室長、街路交通施設課長などを経て、2011 年、国土交通省大臣官房技術審議官（都市局担当）に就任。まちづくり交付金（現・社会資本整備総合交付金）の創設、公共交通一体まちづくり、東日本大震災復興まちづくり推進等の都市政策を推進。 2009 年に北海道大学客員教授に就任、2013 年に国土交通省を退官後、現職。

②第２回座談会

伊藤 香織 氏 	東京理科大学理工学部建築学科准教授。専門は都市デザイン/都市空間解析。 東京生まれ。東京大学大学院修了、博士（工学）。東京大学空間情報科学研究センター助手を経て、東京理科大学専任講師、2008 年より現職。 主な著書に『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』『まち建築：まちを生かす 36 のモノづくり、コトづくり』など。 2006 年よりシビックプライド研究会を主宰し、他分野の連携によりシビックプライド（都市に対する市民の誇り）とコミュニケーションデザインの研究、提案を行う。また、クリエイティブユニット「東京ピクニッククラブ」を 2002 年より共同主催し、ピクニックを通して、公共空間の創造的な利用可能性を探るプロジェクトを国内外の都市で行っている。
三浦　展 氏 	マーケティング・リサーチャー、社会デザイン研究者。㈱カルチャースタディーズ研究所代表取締役。新潟県上越市出身。一橋大学社会学部を卒業後、㈱パルコに入社、86 年マーケティング雑誌「アクロス」編集室編集長に就任。90 年、三菱総合研究所に入社、マーケティングや労働行政等の調査・研究にあたる。99 年、独立し、カルチャースタディーズ研究所を創設。消費社会、家族、若者、階層、都市などの研究を踏まえ、新しい時代を予測し、社会デザインを提案している。著書に、80 万部のベストセラー『下流社会』のほか、『第四の消費 つながりを生み出す社会』、『データで分かる 2030 年の日本』、『日本人はこれから何を買うのか？』、『東京は郊外から消えていく！』、『「家族」と「幸福」の戦後史』、『ファスト風土化する日本』、『東京高級住宅地探訪』など多数。渡和由氏と『吉祥寺スタイル』を共著。
黒﨑 輝男 氏 	流石創造集団株式会社代表。1949 年東京生まれ。「IDEE」のファウンダー。オリジナル家具の企画販売・国内額のデザイナーのプロデュースを中心に『生活の探求』をテーマに生活文化を広くビジネスとして展開。「東京デザイナーズブロック」「R プロジェクト」などデザインをとりまく都市の状況をつくる。廃校となった中学校校舎を再生した「世田谷ものづくり学校（IDD）」内に、新しい学びの場「スクーリング・パッド／自由大学」を開校。「Farmer’s Market @NUU」、青山の遊休地を活用したコミュニティ型商業空間「246COMMON」「IKI-BA」「みどり荘」などの「場」を手がけ、新しい価値観で次の来るべき社会を模索しながら起業し続けている。自転車乗りがつくる、年に一度の自転車フェス「PEDALDAY 2014」をプロデュース。

③第３回座談会

渡　和由 氏 	筑波大学芸術系環境デザイン領域准教授。 1957 年群馬県生まれ。82 年から GK 設計にて科学博や横浜博覧会などの会場計画や公的施設設計を担当。90 年に渡米し、日本の計画住宅地や都市のサイトプランニング実務を行う。98 年秋に帰国し現職。 自治体や病院などと大学の連携による能動的な場のプロデュース、茨城県域 TX 沿線まちづくりの総合プロデュース、公共の交流施設計画などで、プレイスメイキングの導入を実践。 総合的な環境デザイン手法と「好かれ続ける能動的な生活環境」を研究。「ビオシティ」誌に米国のサスティナブルデザイン、他ニューアーバニズムやプレイスメイキングに関する執筆。『吉祥寺スタイル』を三浦展氏と共著。
鈴木 俊治 氏 	有限会社ハーツ環境デザイン代表取締役。明治大学工学部客員教授。1960 年東京生まれ。日本での都市・環境計画実務ののち、カリフォルニア大学バークレー校大学院都市地域計画学科修了。同校助手、カルソープ・ソシエイツを経て 2000 年有限会社ハーツ環境デザインを設立、現在に至る。 全国各地において住民参加型都市デザイン、都市計画、まちづくりに従事。拠点とする東京・神楽坂では NPO 法人粋なまちづくり倶楽部副理事長として活動している。
三友 奈々 氏 	日本大学理工学部助教。 筑波大学大学院芸術研究科修了後、筑波大学大学院芸術系助教、神戸大学工科大学環境・建築デザイン学科助手を経て現職。専門は環境デザイン学。公共空間（公園・広場・街路等）、公共施設、商店街、商業施設を対象としたプレイスメイキング（まちなかの居場所づくり）を研究テーマとしている。主な研究対象地はブライアントパーク。研究の成果を活かしたプレイスメイキングの実践として、ハード・ソフト両面を対象としたデザイン実務、デザイン教育を行っている。

（２）シンポジウム

開催日時	平成 26 年 11 月 28 日（金）14 時 30 分～19 時 30 分（開場　13 時 30 分）	
開催場所	東京大学 伊藤謝恩ホール　（東京都文京区本郷 7-3-1）	
テ ー マ	『ヒューマンスケールのまちづくり』	
登 壇 者	基調講演	Jan Gehl 氏／ゲール・アーキテクツ
	ショートプレゼンテーション	Birgitte Svarre 氏／ゲール・アーキテクツ
	鼎談	Jan Gehl 氏／ゲール・アーキテクツ 北原理雄 氏／千葉大学 名誉教授（コーディネーター） 渡　和由 氏／筑波大学 准教授
	パネルディスカッション	松村秀一 氏／東京大学 教授（コーディネーター） 西村　浩 氏／㈱ワークヴィジョンズ代表 渡　和由 氏／筑波大学 准教授 伊藤香織 氏／東京理科大学 准教授
参加者数	シンポジウム：332 名（ホール：294 名　男性 214 名、女性 80 名） （みんなのイス：38 名　男性 25 名、女性 13 名） レセプション：68 名（男性 53 名、女性 15 名）	

【プログラム】

14：30　開会、講師紹介

14：40　基調講演（40 分）
／Jan Gehl 氏

15：20　ショートプレゼンテーション（15 分）
／Birgitte Svarre 氏

15：35　鼎談（35 分）
／Jan Gehl 氏 × 北原 理雄 氏 × 渡 和由 氏

16：20　パネルディスカッション（120 分）
／松村 秀一 氏 × 渡 和由 氏 × 西村 浩 氏 × 伊藤 香織 氏

17：50　Jan Gehl 氏 よりシンポジウムの感想（10 分）

18：15　レセプション（75 分）

【開催状況】

〇ヤン・ゲール氏による基調講演

〇ビアギッテ氏によるショートプレゼンテーション

〇鼎談

〇パネルディスカッション

〇会場風景

〇みんなのイス

（〇レセプション）

【登壇者プロフィール】

基調講演	
Jan Gehl 氏 	1936 年生まれ。1960 年デンマーク王立芸術大学建築学部卒業。米国、カナダ、メキシコ、オーストリア、ヨーロッパ各国で研究・教育・実践に携わり、王立芸術大学建築学部教授を経て、現在、ゲール・アーキテクツ主宰。1993 年すぐれた都市計画業績に対して授与される国際建築家連合のパトリック・アバークロンビー賞を受賞。人間のための空間として、公共空間の再製やデザインを行うプロジェクトを多数手掛けており、ニューヨークタイムズスクエア周辺を歩行者、自転車のための空間として再生した事例は特に著名。 著書として『建物のあいだのアクティビティ』『人間の街：公共空間のデザイン』『HOW TO STUDY PUBLIC LIFE』など多数。
ショートプレゼンテーション	
Birgitte Svarre 氏 	デンマーク王立芸術大学建築学部公共空間研究センターの博士課程を修了し、2008 年からゲール建築事務所に所属。ヤン・ゲール氏とデンマーク王立芸術大学建築学部によってはじめられゲール建築事務所の頭脳ともいえるゲール研究所の中心的研究者。ゲール研究所の基本哲学にある「ヒューマンスケールのまちづくり」に欠かせない建築表現や伝達戦略、そして都市計画など、多岐にわたるプロジェクトに携わっている。
鼎談（Jan Gehl 氏 × 北原 理雄 氏 × 渡 和由 氏）	
北原 理雄 氏 	千葉大学名誉教授。 1947 年生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院修了。名古屋大学助手、三重大学助教授、千葉大学大学院教授を経て、現職。工学博士。人びとの生活と活動の舞台になっている都市環境を、モノとココロの両面でより豊かで魅力的なものにするために、都市空間や景観のあり方とその実現システムを検討している。専門は都市計画、都市デザイン。 主な著書・訳書に『都市の個性と市民生活』、『公共空間の活用と賑わいまちづくり』、『生活景』、J. ゲール『人間の街：公共空間のデザイン』、『建物のあいだのアクティビティ』など多数。
渡　和由 氏 	筑波大学芸術系環境デザイン領域准教授。 1957 年群馬県生まれ。82 年から GK 設計にて科学博や横浜博覧会などの会場計画や公的施設設計を担当。90 年に渡米し、日本の計画住宅地や都市のサイトプランニング実務を行う。98 年秋に帰国し現職。 自治体や病院などと大学の連携による能動的な場のプロデュース、茨城県域 TX 沿線まちづくりの総合プロデュース、公共の交流施設計画などで、プレイスメイキングの導入を実践。 総合的な環境デザイン手法と「好かれ続ける能動的な生活環境」を研究。「ビオシティ」誌に米国のサスティナブルデザイン、他ニューアーバニズムやプレイスメイキングに関する執筆。『吉祥寺スタイル』を三浦展氏と共著。

パネルディスカッション（松村 秀一 氏 × 渡 和由 氏 × 西村 浩 氏 × 伊藤 香織 氏）	
松村 秀一 氏 	東京大学大学院教授。 1957 年生まれ。80 年東京大学建築学科卒業。85 年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、工学博士。92 年ローマ大学客員教授、95 年トレント大学客員教授、南京大学客員教授、大連理工大学客員教授などを経て、2006 年より現職。 「日本の建築と部品の潜在性能をとき放つ」をテーマに活動する専門家頭脳集団「HEAD 研究会」の副理事長を務める。専門は建築工法、建築生産。 主な著書に『建築－新しい仕事のかたち－箱の産業から場の産業へ』、『「住宅ができる世界」のしくみ』、『「住宅」という考え方』、『工業化住宅・考』、『団地再生－よみがえる欧米の住宅』など多数。
西村　浩 氏 	建築家・デザイナー。 1967 年佐賀県生まれ、東京大学工学部土木学科卒業。同大学大学院工学系研究科修士課程修了後、設計事務所勤務を経て、1999 年㈱ワークヴィジョンズ設立。建築・土木・まちづくり等、常に「まち」を視野にいれ、分野を超えてモノづくりに取り組む。 2011 年から佐賀市で「空き地リビング」をコンセプトに地域の居場所をつくる社会実験として、まちなかの空き地に芝生広場を整備し、中古コンテナを連結した雑誌図書館と交流スペースを設置する「わいわい!!コンテナ」プロジェクトを実践。企画・設計・デザインを手がける。 主な計画・作品は大分都心南北軸構想、佐賀市街なか再生計画、函館中心市街地トータルデザイン、岩見沢複合駅舎、鳥羽海辺のプロムナード、長崎水辺の森公園橋梁群など。2009 年度グッドデザイン賞、2010 年日本建築学会賞受賞（岩見沢複合駅舎）。
伊藤 香織 氏 	東京理科大学理工学部建築学科准教授。専門は都市デザイン/都市空間解析。 東京生まれ。東京大学大学院修了、博士（工学）。東京大学空間情報科学研究センター助手を経て、東京理科大学専任講師、2008 年より現職。 主な著書に『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』『まち建築：まちを生かす 36 のモノづくり、コトづくり』など。 2006 年よりシビックプライド研究会を主宰し、他分野の連携によりシビックプライド（都市に対する市民の誇り）とコミュニケーションデザインの研究、提案を行う。また、クリエイティブユニット「東京ピクニッククラブ」を 2002 年より共同主宰し、ピクニックを通して、公共空間の創造的な利用可能性を探るプロジェクトを国内外の都市で行っている。

３．２　シンポジウムに対する評価等

（１）アンケートの実施

連続座談会、シンポジウムの参加者に対して以下の方法により今回の広報方策に対するアンケートを実施した。

図表　アンケートの実施状況

方法	内容・対象等	アンケート回答者数
各座談会でのアンケートの実施	第１回から第３回の連続座談会の会場において、参加者にアンケートを配布し回答を依頼した。 （質問内容） ・参加のきっかけ ・座談会の内容に対する評価・満足度 ・プレイスメイキング、ヒューマンスケールのまちづくりに対する周知度 ・参加した結果の理解度の向上 ・プレイスメイキング、ヒューマンスケールのまちづくりに対する関心度 ・座談会の情報の入手手段・ルート ・属性（年齢、性別、職業、専門）　等	第 1 回 48 名（回答率 80%） 第 2 回 44 名（回答率 80%） 第 3 回 45 名（回答率 75%）
シンポジウムの申込者に対する事前アンケートの実施	シンポジウムに事前申し込みがあった参加予定者に対して、メールによるアンケートを実施し、メール又は WEB 上でのアンケート回収を行った。 （質問内容） ・座談会の情報の入手手段・ルート ・属性（年齢、性別、職業、専門）　等	回答者 161 名 （回答率 40%）
シンポジウム会場での参加者に対する当日アンケートの実施	シンポジウム会場において、参加者にアンケートを配布し回答を依頼した。 （質問内容） ・参加のきっかけ ・座談会の内容に対する評価・満足度 ・プレイスメイキング、ヒューマンスケールのまちづくりに対する周知度 ・参加した結果の理解度の向上 ・プレイスメイキング、ヒューマンスケールのまちづくりに対する関心度　等	回答者 155 名 （回答率 46%）

（２）アンケートの結果

アンケートの結果を次頁以降に示す。

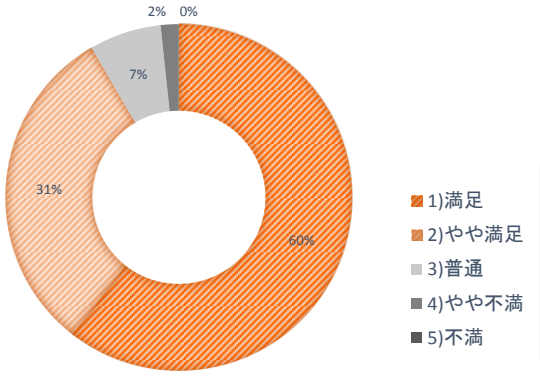
１）アンケート結果についての考察

■座談会・シンポジウムに対する参加者の満足度、理解度

座談会では９割を超える参加者が、シンポジウムにおいても全てのプログラムで８割を超える参加者が「満足」「やや満足」と回答するなど、今回の広報方策に対する満足度は高かった。また、**プレイスメイキングに関する理解度においても、９割を超える人が「よくわかった」「わかった」と回答する**など、プレイスメイキングが理解できる内容であることが示された。

図表：座談会・シンポジウム参加者の満足度

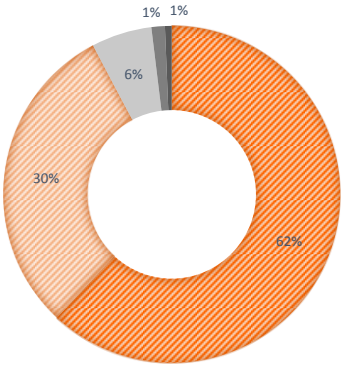
【全座談会】



n＝119

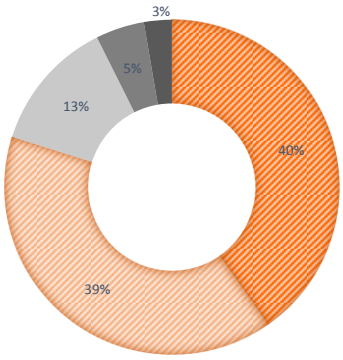
【シンポジウム】

（基調講演と
ショートプレゼンテーション）



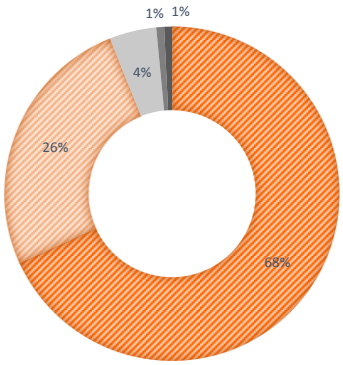
n＝155

（鼎談）



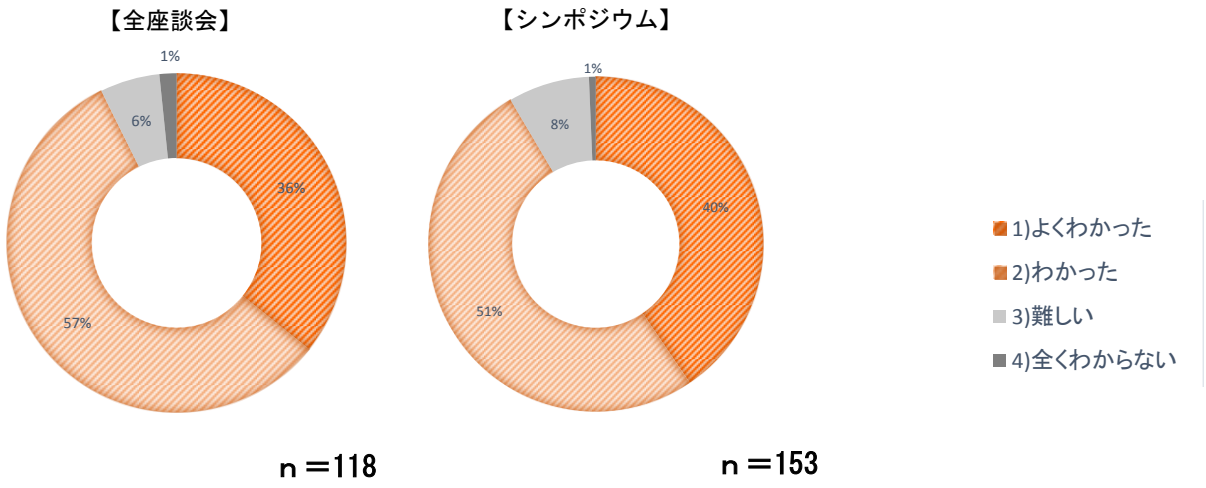
n＝149

（パネルディスカッション）



n＝132

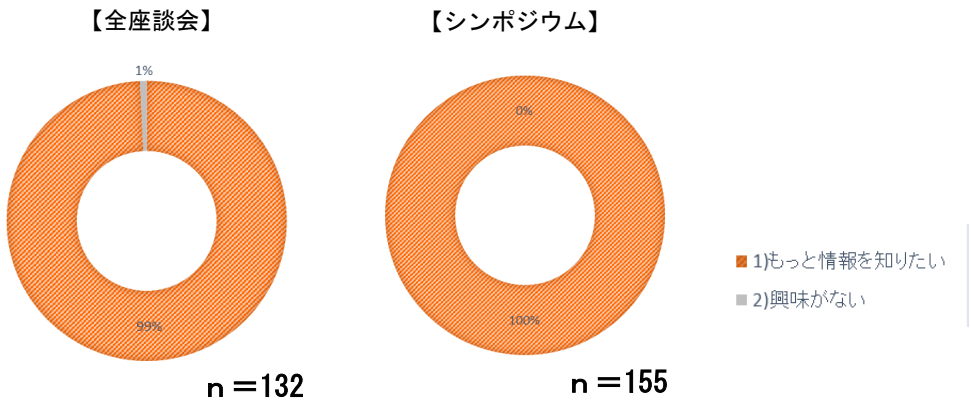
図表：座談会・シンポジウム参加者のプレイスメイキングの理解度



■普及啓発のニーズ

<u>99～100%の参加者が、「もっと知りたい」と回答する</u>など、普及啓発ニーズは高い。特に、地方公共団体からの参加者はプレイスメイキング、ヒューマンスケールのまちづくりについての認知度が低く、普及啓発のニーズが高い。

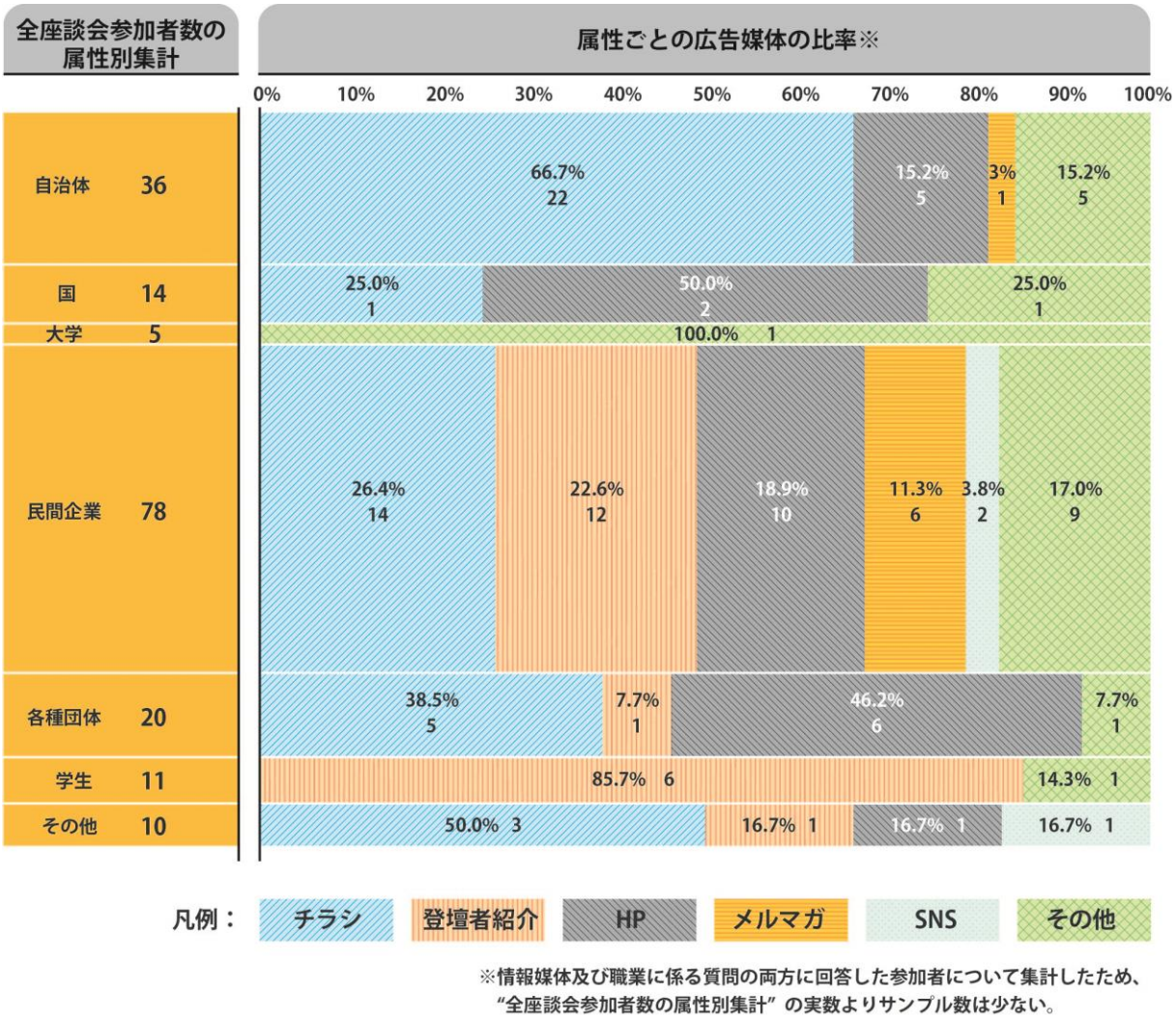
図表：座談会・シンポジウム参加者のこのテーマに関する情報ニーズ



■広報に対する情報入手の手段

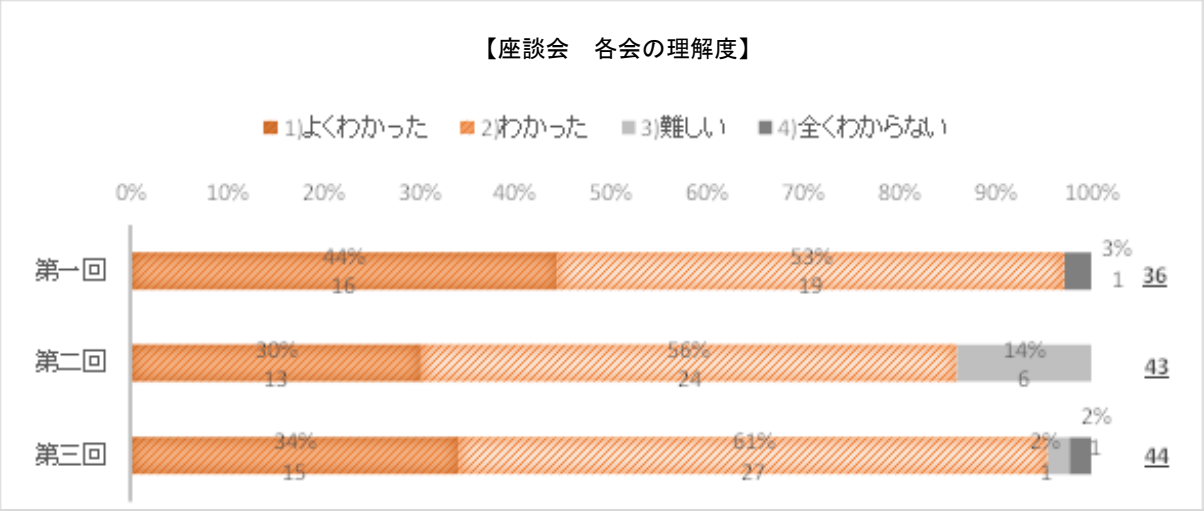
座談会を知るきっかけなった広報媒体として、**チラシが広く利用されている**。チラシが利用された割合は特に自治体からの参加者に多く、**広報手段としての有効性**が確認された。 また、登壇者による紹介も多く広報において重要な存在であることが確認された。**広く情報発信力のある登壇者を登用する必要性**が認められた。 大学関係者や学生への周知に関しては、有効な広報媒体を見出すことができなかった。 民間企業に比較して、自治体、国、大学等の情報収集の範囲の狭さが際立っている。

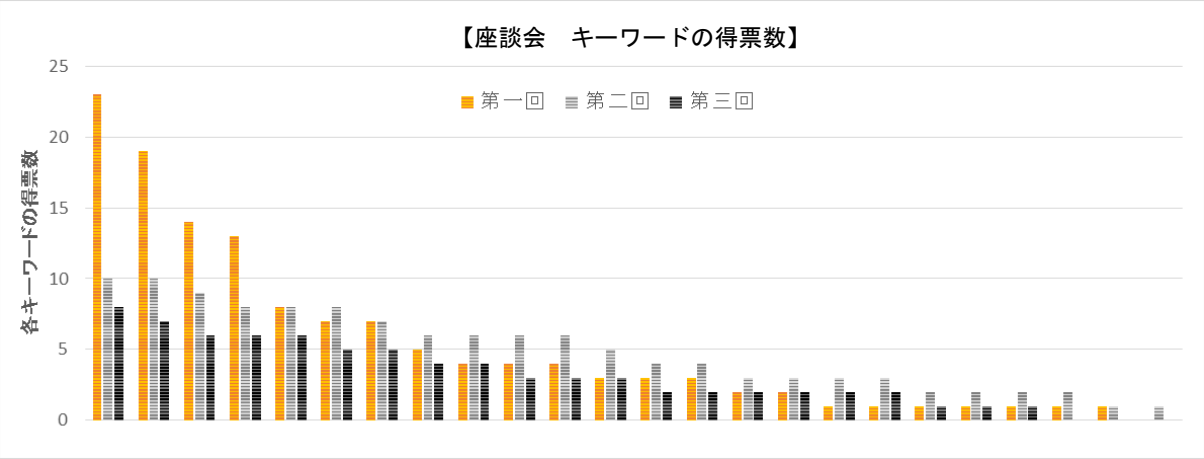
図表：座談会を知ったきっかけとなった広報媒体



■コーディネーターの重要性

全体を通じて、理解度の点で非常に高い成果を出しているのは、第 1 回座談会である。参加者の理解度が高く、「印象に残ったキーワード」も特定のキーワードに集中する傾向がみられる。効果的にメッセージを伝える上で、**実務に通じ説明力の高い専門家にコーディネーターや登壇者として協力を得ることの重要性**が認められた。

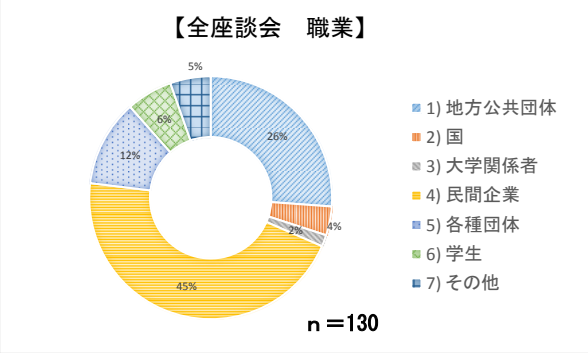


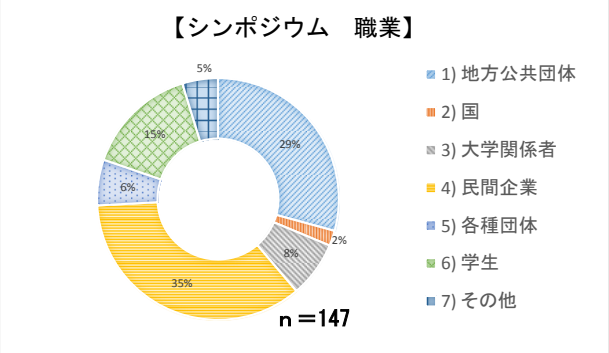


■大学関係者・学生への訴求に課題

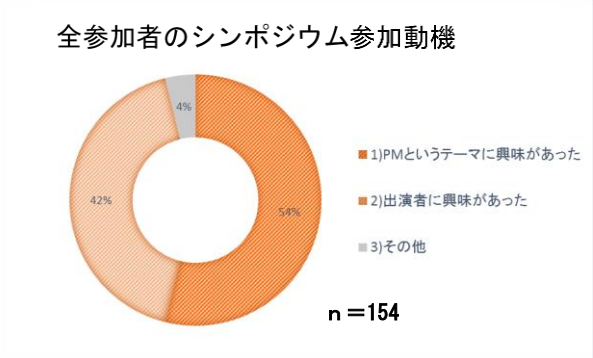
座談会における**大学関係者、学生の参加比率が低い**。シンポジウムと座談会、両方の存在を認知しながら、座談会には参加しなかった人も多いと考えられる。大学関係者・学生はシンポジウムに参加した動機について、「出演者に興味があった」と回答した人の割合が高く、そのすべてが「ヤン・ゲール氏に興味があった」と回答している。専門分野で著名な登壇者に誘引される傾向が高い。

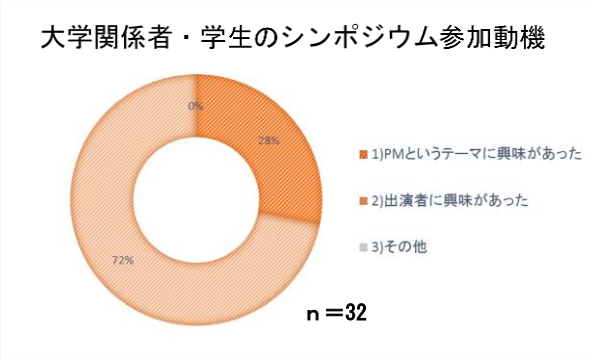
図表：職業別にみた座談会・シンポジウム参加者の属性比較





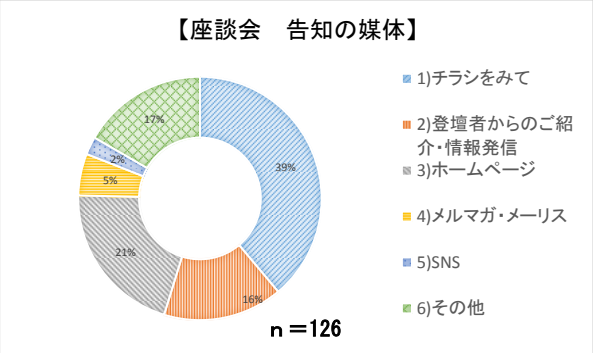
図表：シンポジウムにおける参加動機の比較（全参加者／大学関係者・学生）

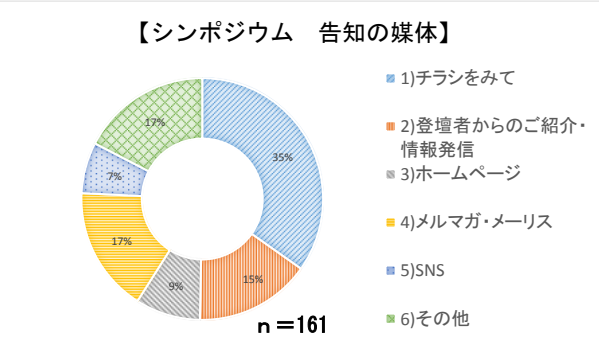




（メルマガの活用）

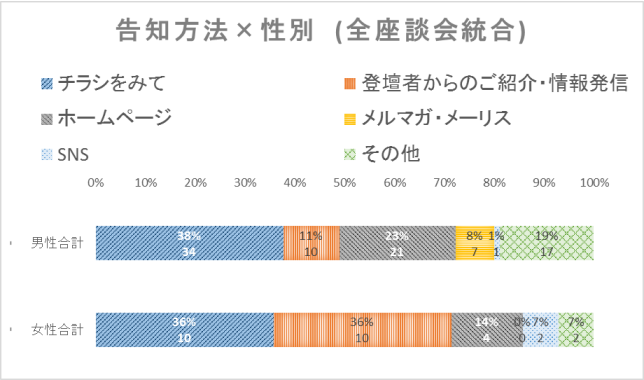
また、シンポジウムでは座談会に比べて「メルマガ」による情報取得の比率が高い。特にシンポジウムに関する情報はメールマガジン「matiza」でも広報した効果が大きく、効果的なメールマガジンの活用も広報上の課題である。





（性別による広報媒体の使い分け）

男女別に利用された告知方法の違いをみると、女性では「登壇者からのご紹介・情報発信」が非常に多いという特徴がある。登壇者、関係者への広報協力の働きかけも普及啓発対象の掘り起しに重要であることがわかる。



２）アンケートの集計結果

次頁以降にアンケートの集計結果をしめす。

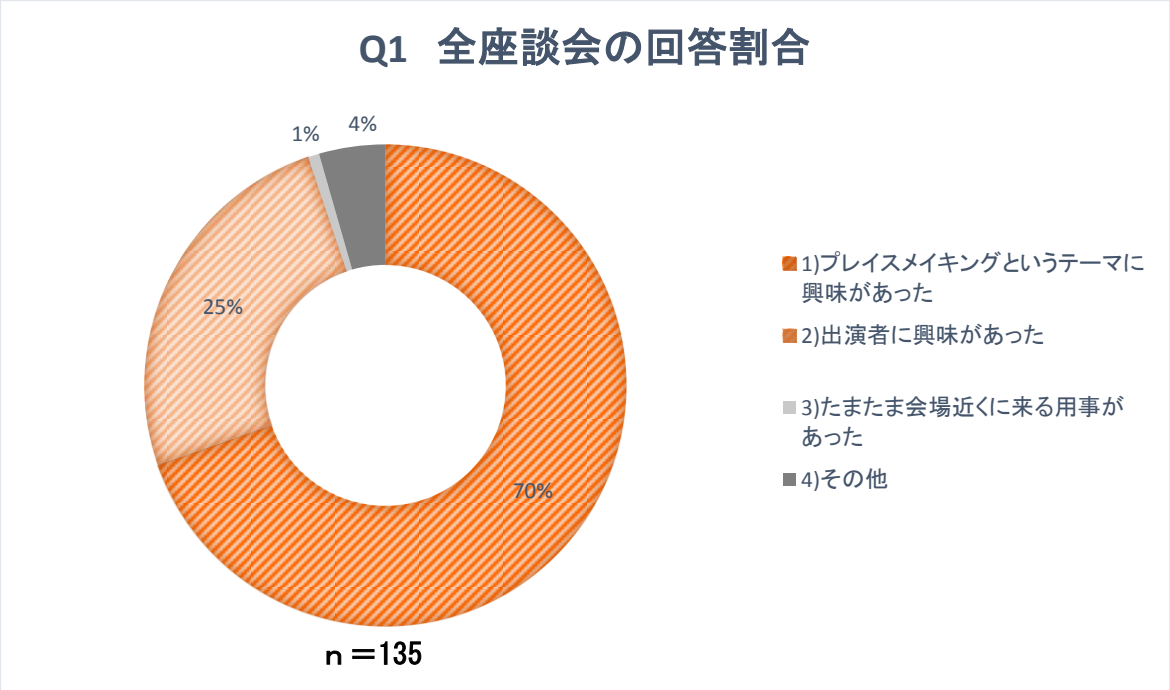
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

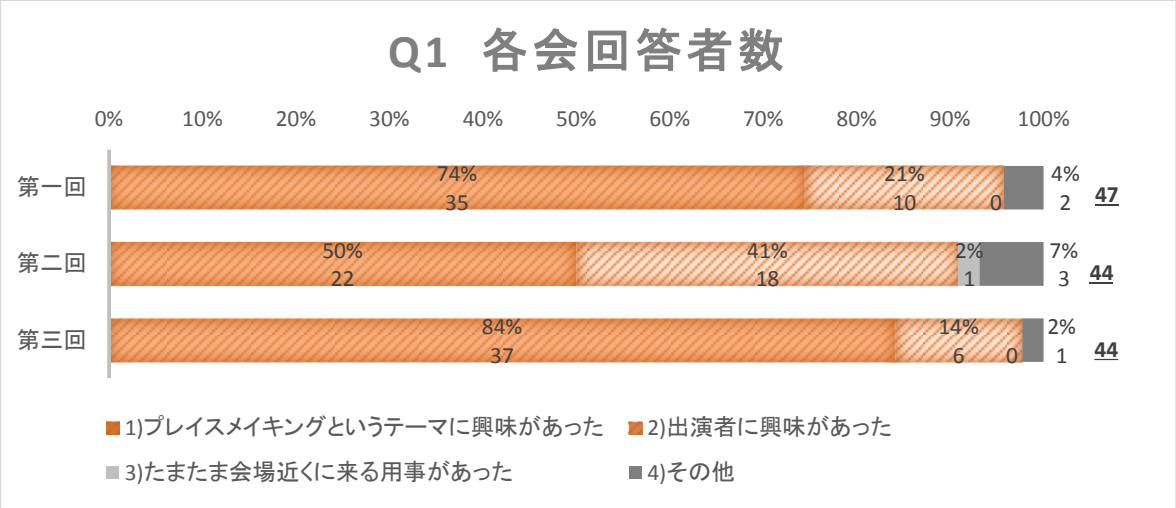
Q1. 参加しようと思った理由はなんですか

「1) プレイスメイキングというテーマに興味があった」が最多となっており、プレイスメイキングへの注目度の高さが伺える。一方、Q3-1 では 54%の回答者が「プレイスメイキングを初めて知った」と回答していることから、キーワードとしては認識されているものの、意味については深く浸透していないと考えられる。個別の集計結果を見ると、第二回は「2) 出演者に興味があった」が他の回と比較して 10 ポイント程度高くなっており、同会の出演者への注目度の高さが伺える。

Q1. 参加しようと思った理由はなんですか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)プレイスメイキングというテーマに興味があった	35	22	37	**94**
2)出演者に興味があった	10	18	6	**34**
3)たまたま会場近くに来る用事があった	0	1	0	**1**
4)その他	2	3	1	**6**
有効回答者数	47	44	44	**135**





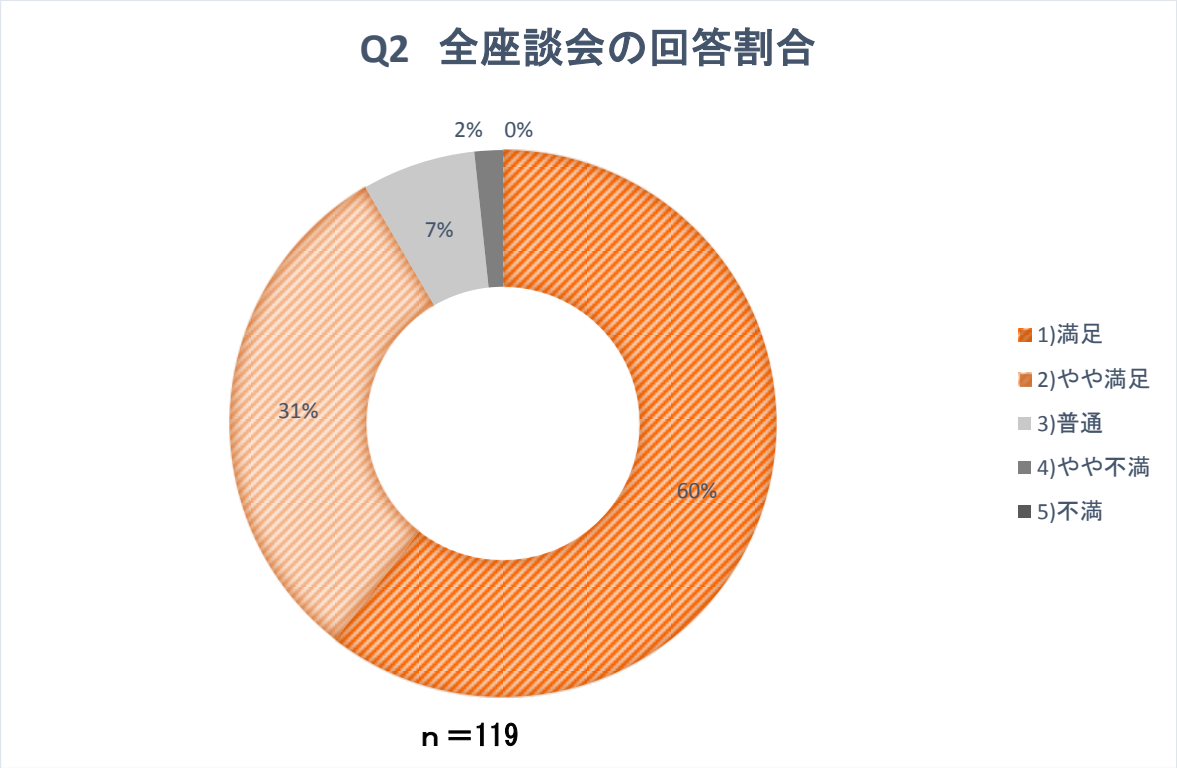
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

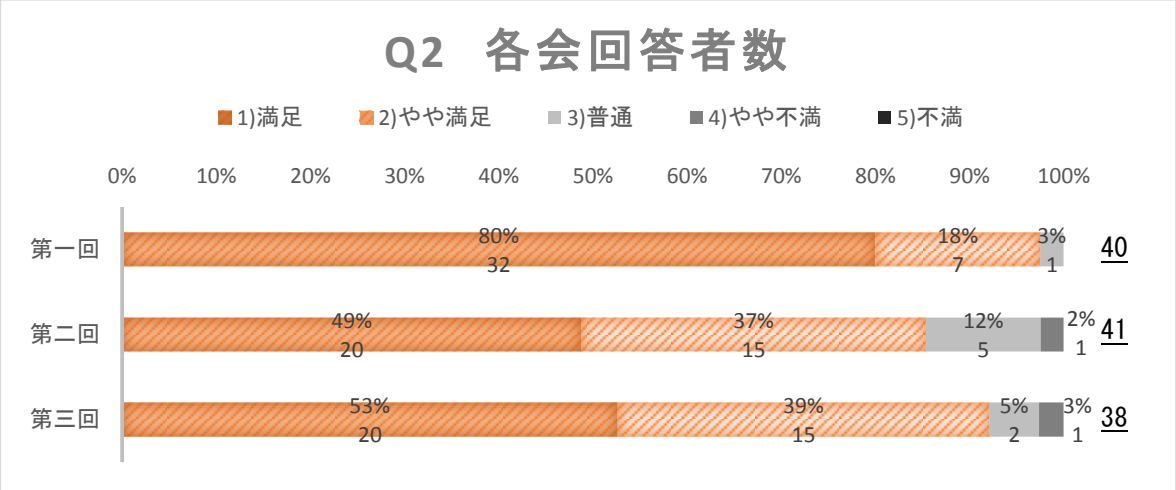
Q2.　座談会の内容は如何でしたか

「1)満足」「2)やや満足」の合計が 81%と参加者の満足度は高い。また、第一回は「1)満足」のポイントが他の回と比較して約 30 ポイント上回る 80%となっており、出演者の講演が高く評価されていることが分かる。

Q2. 座談会の内容は如何でしたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)満足	32	20	20	**72**
2)やや満足	7	15	15	**37**
3)普通	1	5	2	**8**
4)やや不満	0	1	1	**2**
5)不満	0	0	0	**0**
有効回答者数	40	41	38	**119**

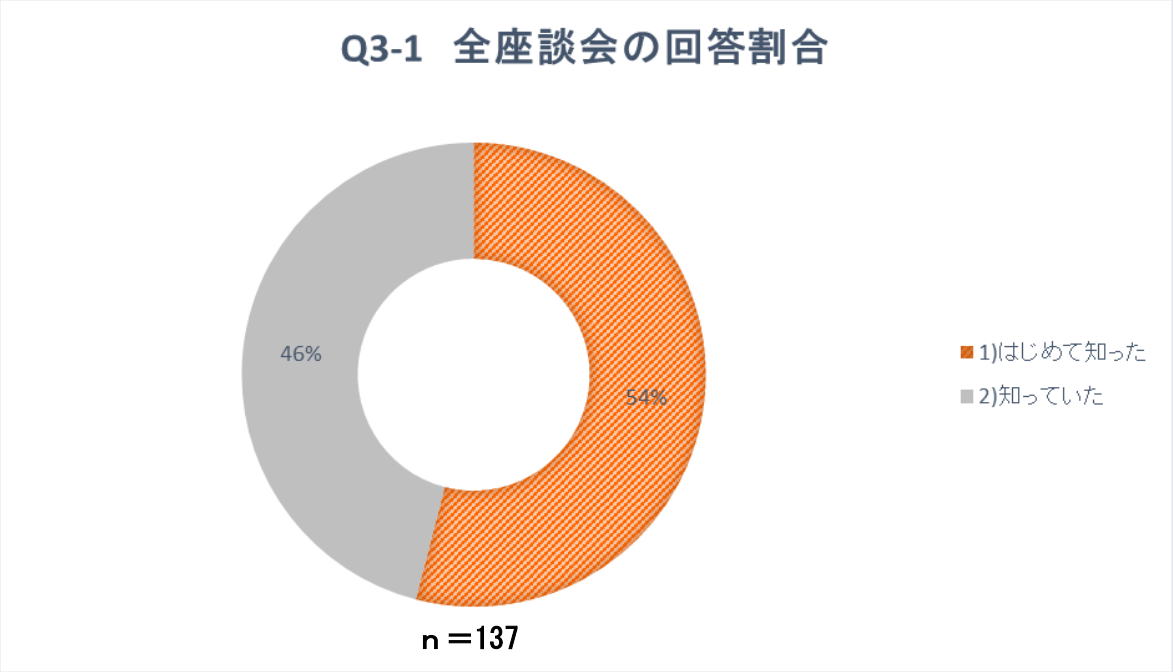


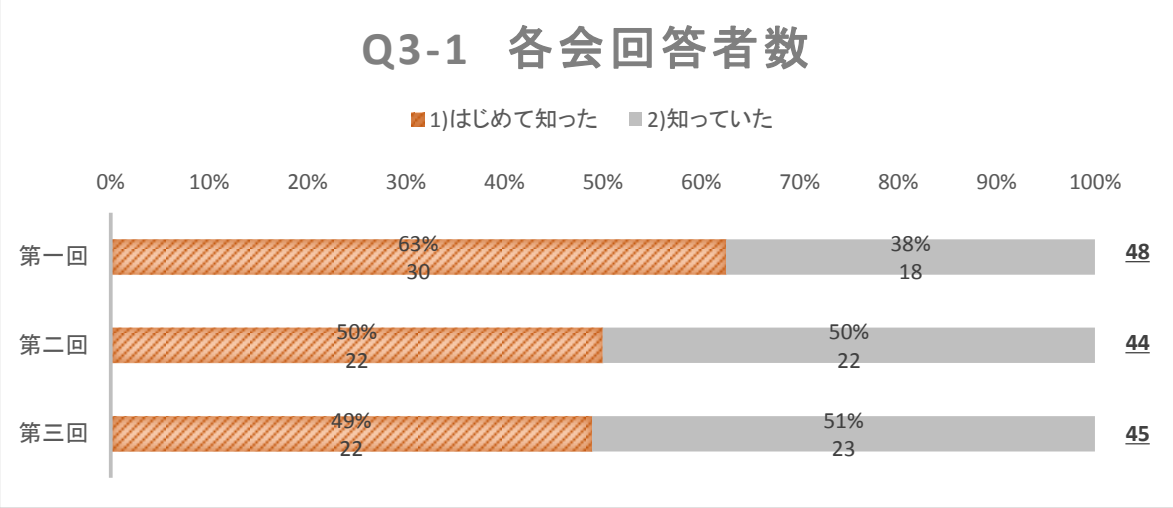


プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

Q3-1.「プレイスメイキング」のことを御存知でしたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)はじめて知った	30	22	22	**74**
2)知っていた	18	22	23	**63**
有効回答者数	48	44	45	**137**





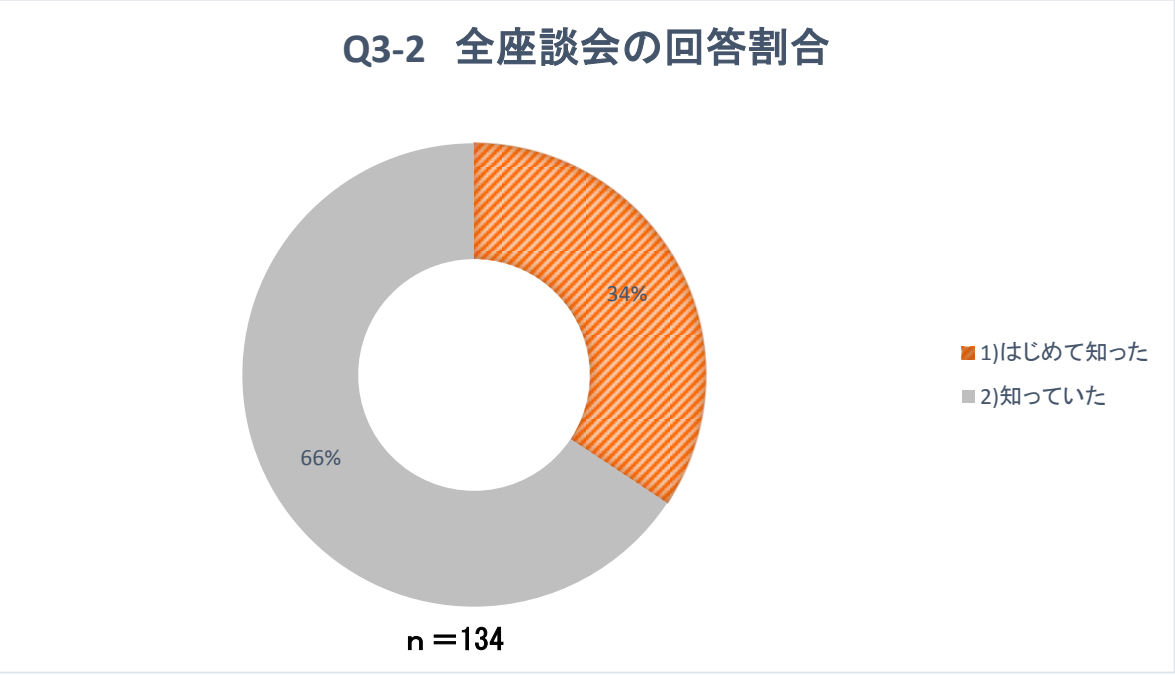
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

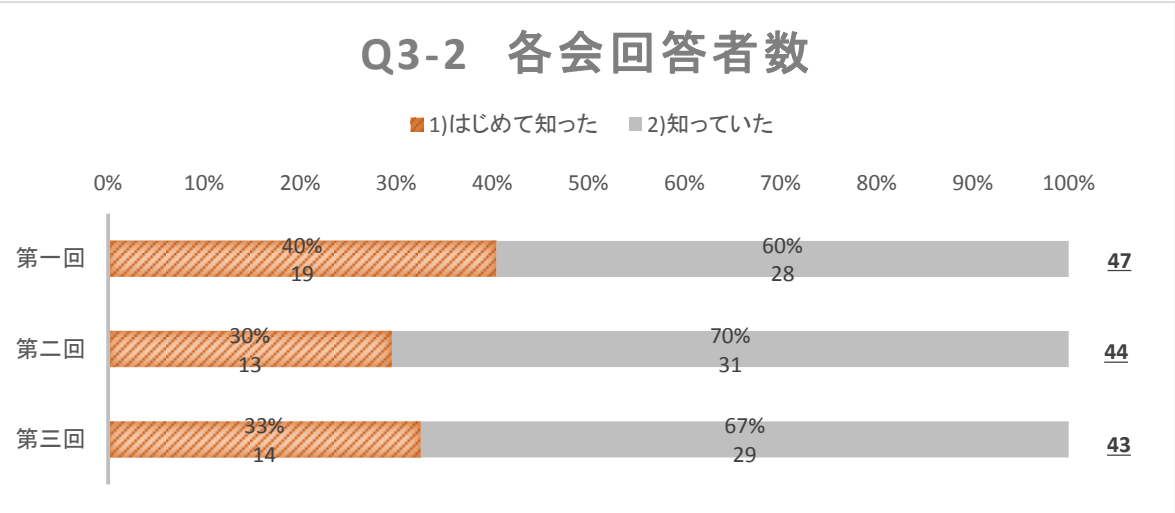
Q3-2.　「ヒューマンスケールのまちづくり」のことをご存知でしたか

プレイスメイキングと比較して、「2)知っていた」が 20 ポイント高くなっており、「ヒューマンスケールのまちづくり」がキーワードとしてより広く普及していることが分かる。

Q3-2.「ヒューマンスケールのまちづくり」のことを御存知でしたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)はじめて知った	19	13	14	**46**
2)知っていた	28	31	29	**88**
有効回答者数	47	44	43	**134**





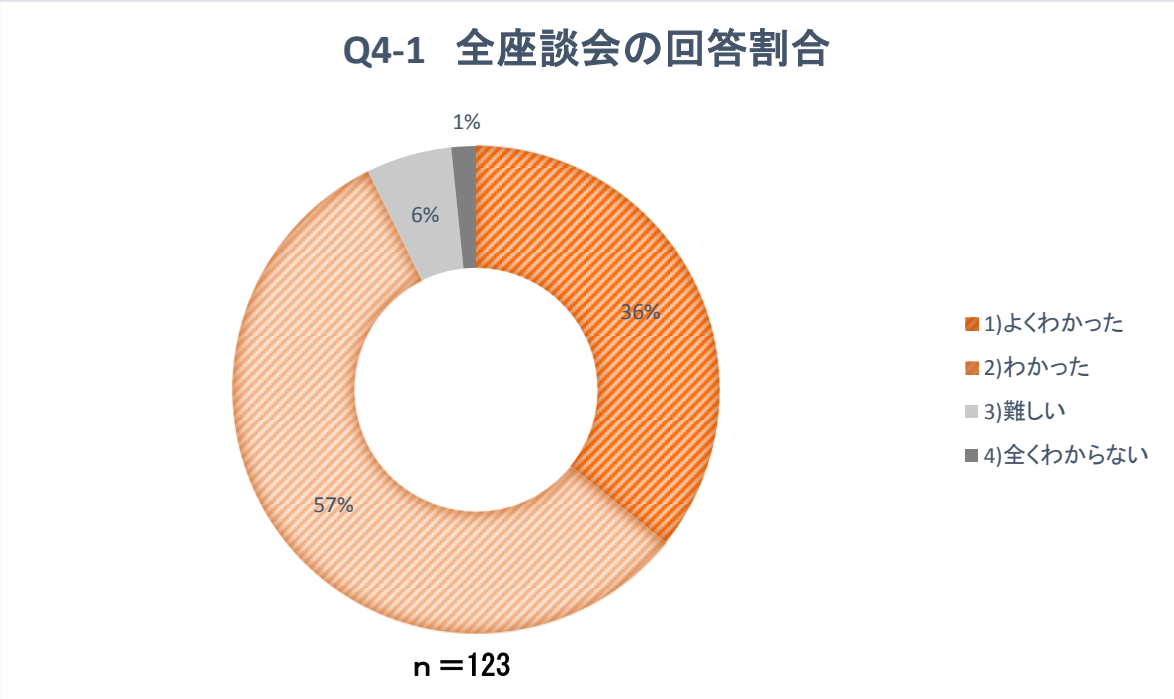
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

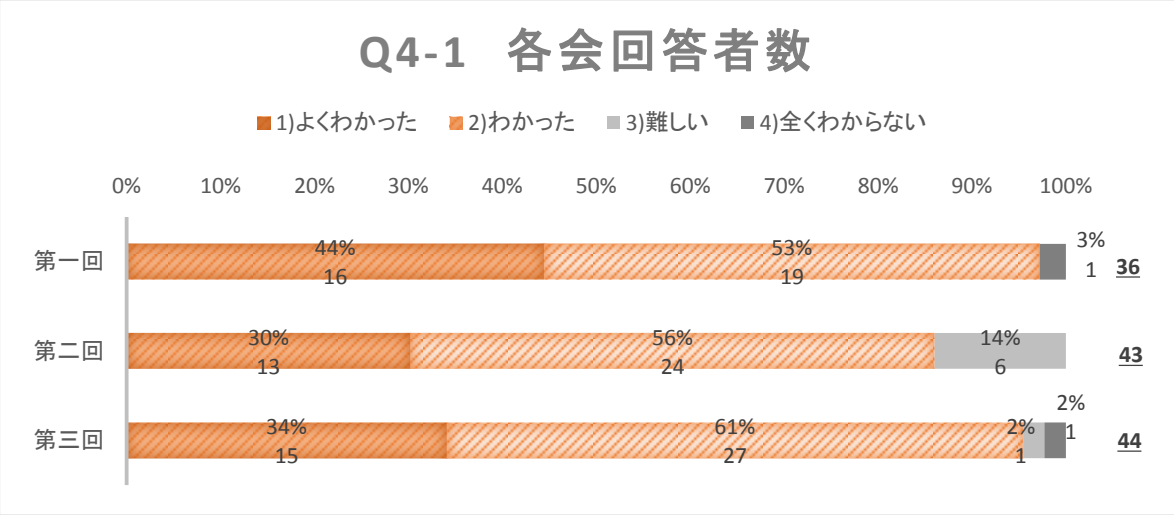
Q4-1.　「プレイスメイキング」に関する理解は深まりましたか

「1)よくわかった」「2)わかった」の合計が93%となっており、各座談会が参加者の理解に貢献していることが分かる。

Q4-1.「プレイスメイキング」に関する理解は深まりましたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)よくわかった	16	13	15	**44**
2)わかった	19	24	27	**70**
3)難しい	0	6	1	**7**
4)全くわからない	1	0	1	**2**
有効回答者数	36	43	44	**123**





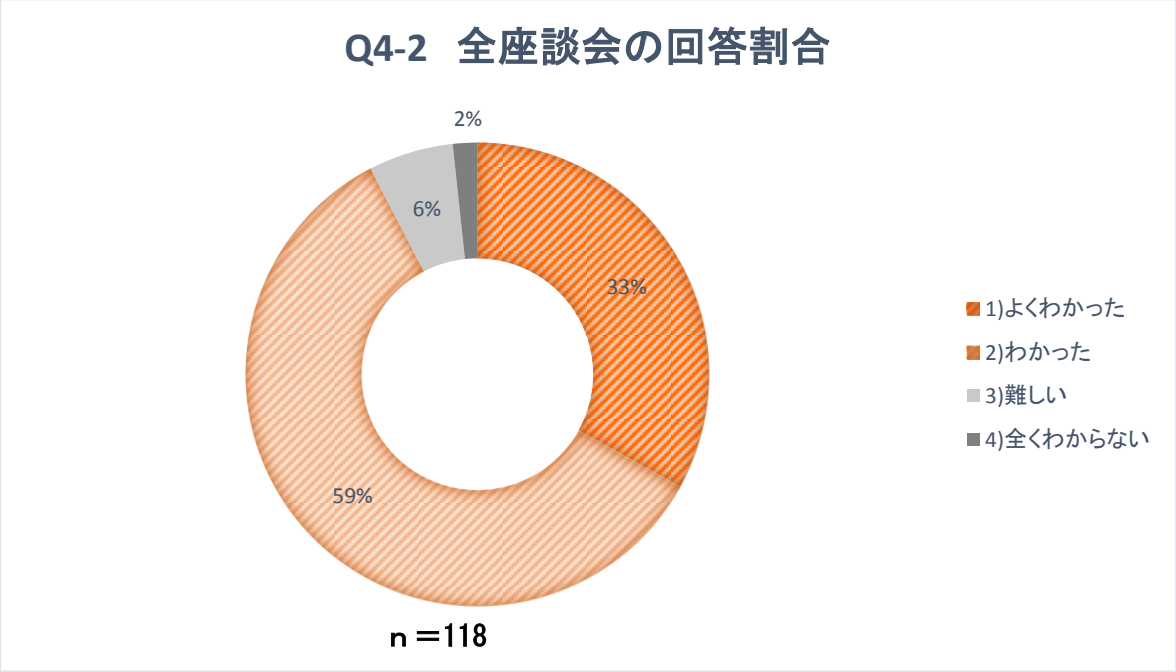
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

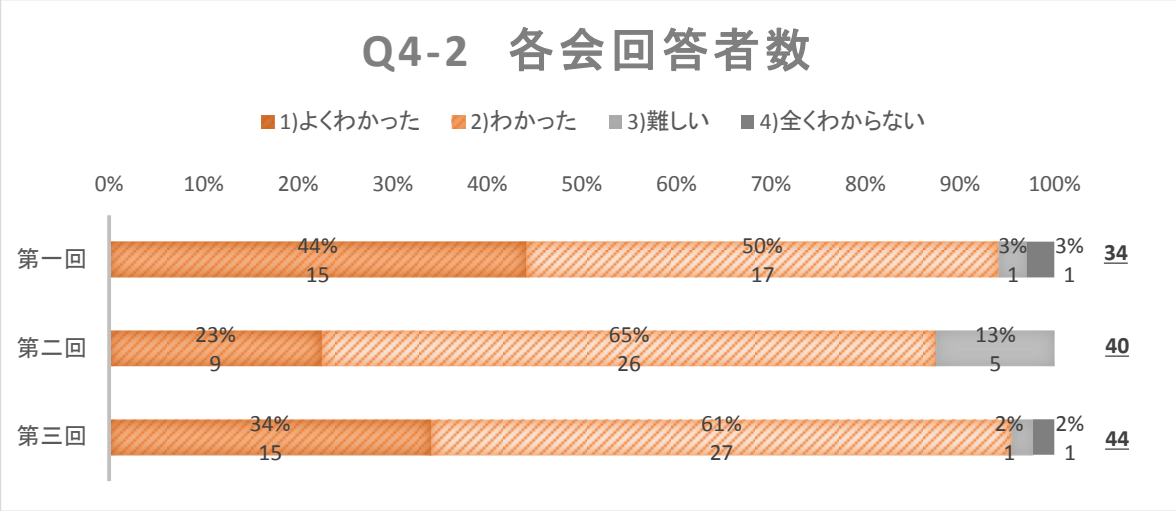
Q4-2.　「ヒューマンスケールのまちづくり」に関する理解は深まりましたか

Q4-1 と同様に、「1) よくわかった」「2) わかった」の合計が 93%となっており、各座談会が参加者の理解に貢献していることが分かる。

Q4-2.「ヒューマンスケールのまちづくり」に関する理解は深まりましたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)よくわかった	15	9	15	**39**
2)わかった	17	26	27	**70**
3)難しい	1	5	1	**7**
4)全くわからない	1	0	1	**2**
有効回答者数	34	40	44	**118**

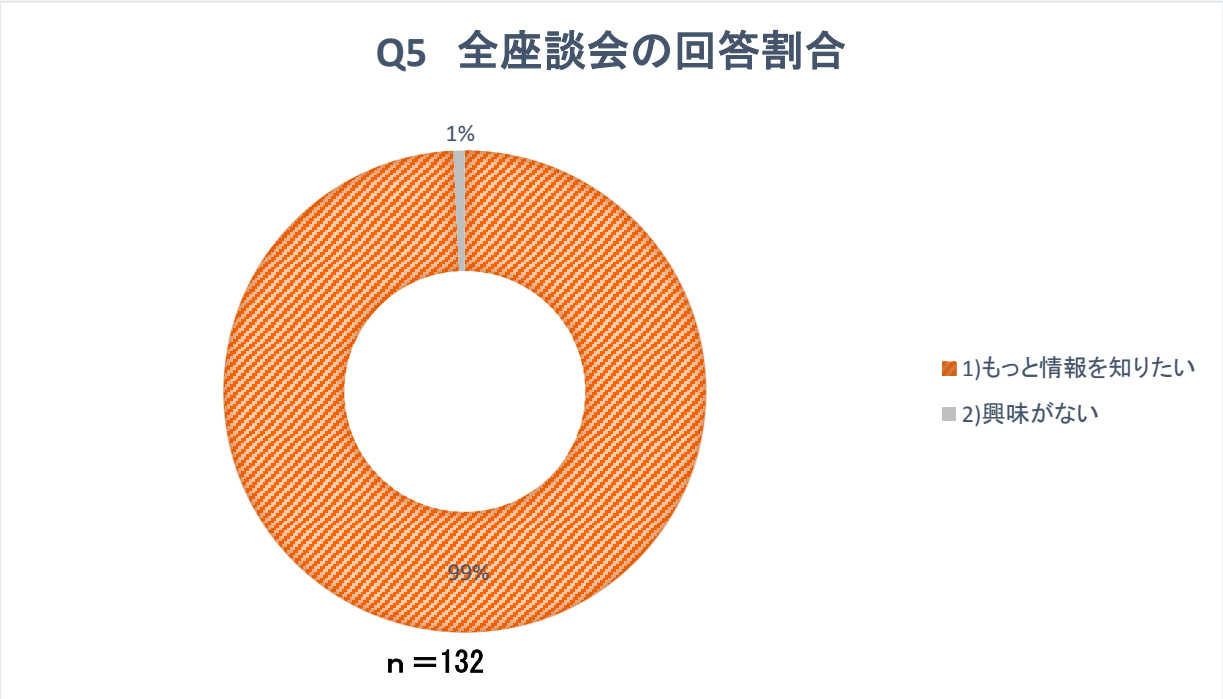




プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

Q5.「プレイスメイキング」、「ヒューマンスケールのまちづくり」へのご関心についてお尋ねします

	第一回	第二回	第三回	合計
1)もっと情報を知りたい	42	43	46	**131**
2)興味がない	0	1	0	**1**
有効回答者数	42	44	46	**132**



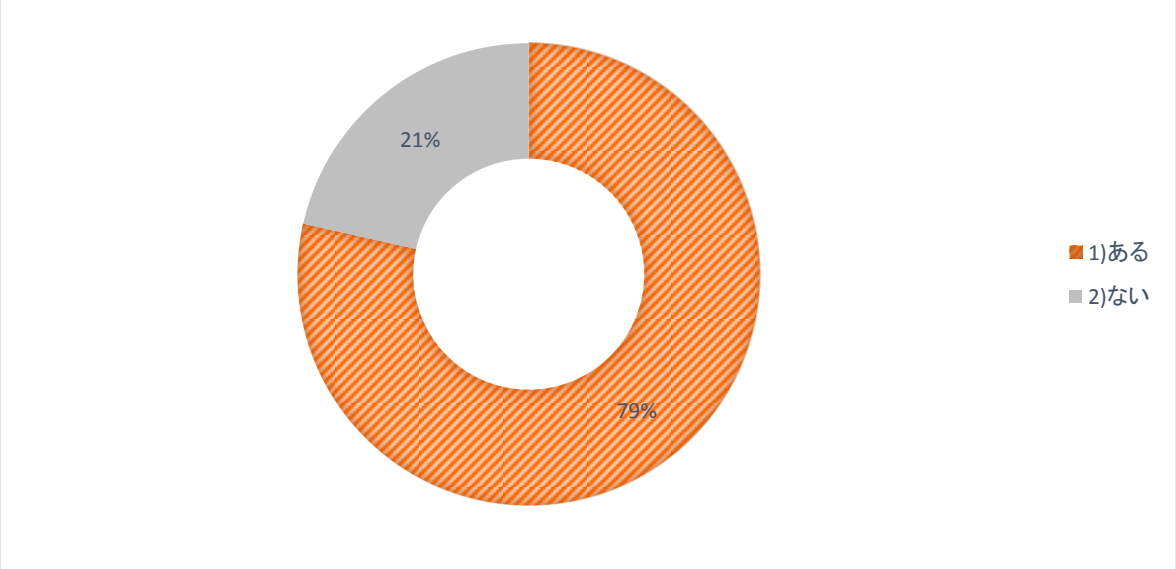
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

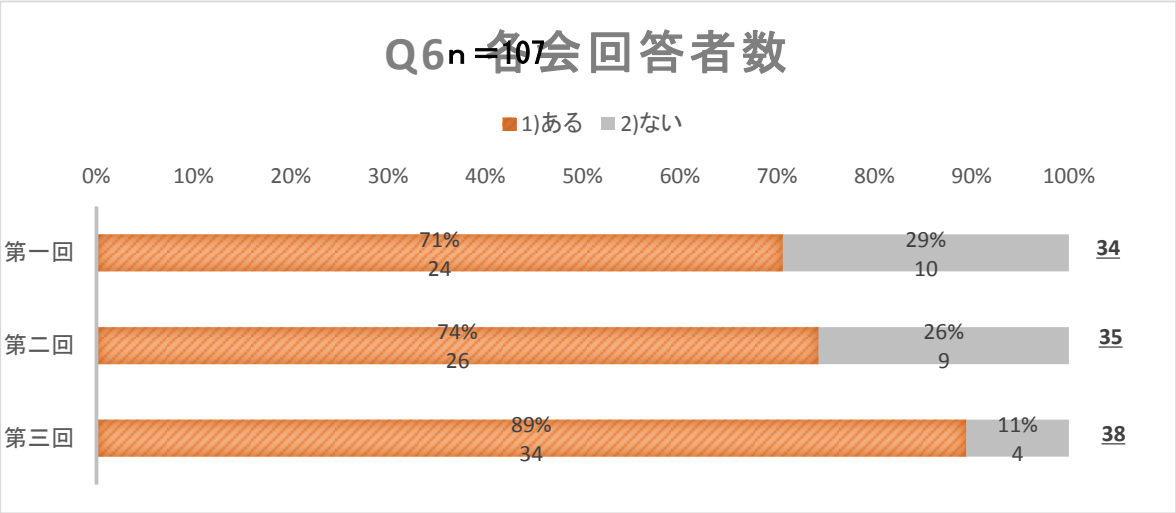
Q8.　プレイスメイキングを実施したい場所が身の回りにございますか

プレイスメイキングを実践したいと考えている参加者の割合が 79%と高い。
また、第三回では他の回と比較して 15%程度高くなっている。（第 3 回の内容は具体的なデザイン論や可動椅子の活用など、実行するイメージが湧きやすいものであったことも関係している可能性がある）

Q6. プレイスメイキングを実践したい場所が身の回りにございますか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)ある	24	26	34	**84**
2)ない	10	9	4	**23**
有効回答者数	34	35	38	**107**





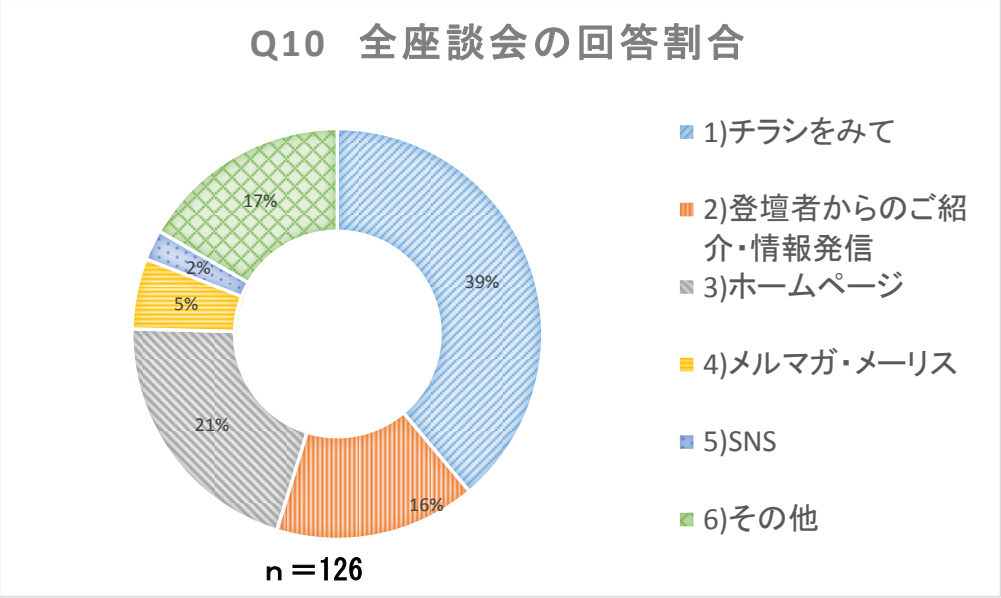
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

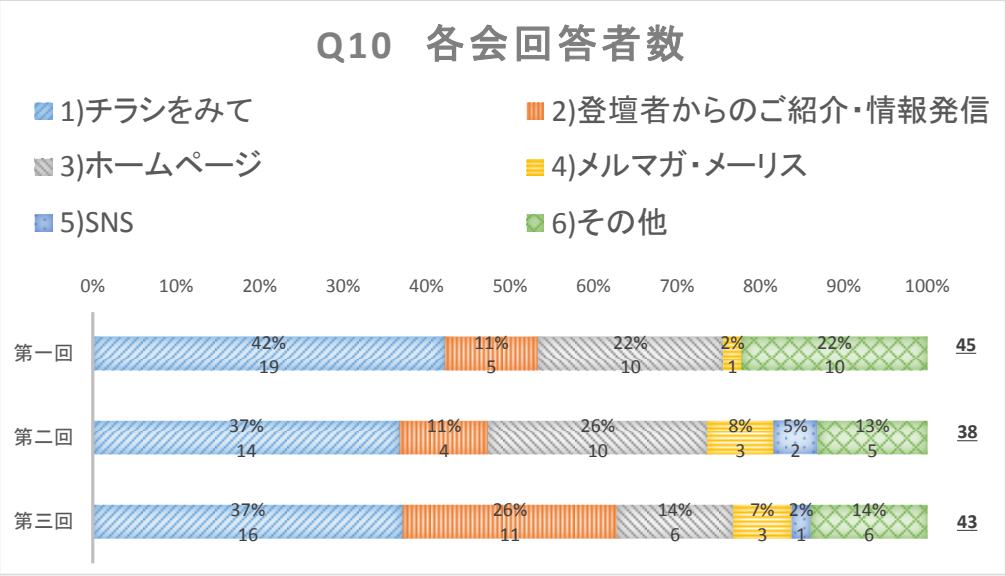
Q10.　本日は座談会は何でお知りになりましたか

「1)チラシ」「3)ホームページ」の割合が高く、広報効果が高いことが分かる。続いて、「2)登壇者からのご紹介・情報発信」「6)その他」の割合が高い。その他の回答としては、大学、NSRI、国土交通省関係者からの紹介等が多く挙げられており、関係者からの口コミによる情報伝達という点で 2)と共通する。

Q10. 本日は座談会は何でお知りになりましたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)チラシをみて	19	14	16	**49**
2)登壇者からのご紹介・情報発信	5	4	11	**20**
3)ホームページ	10	10	6	**26**
4)メルマガ・メーリス	1	3	3	**7**
5)SNS	0	2	1	**3**
6)その他	10	5	6	**21**
有効回答者数	45	38	43	**126**





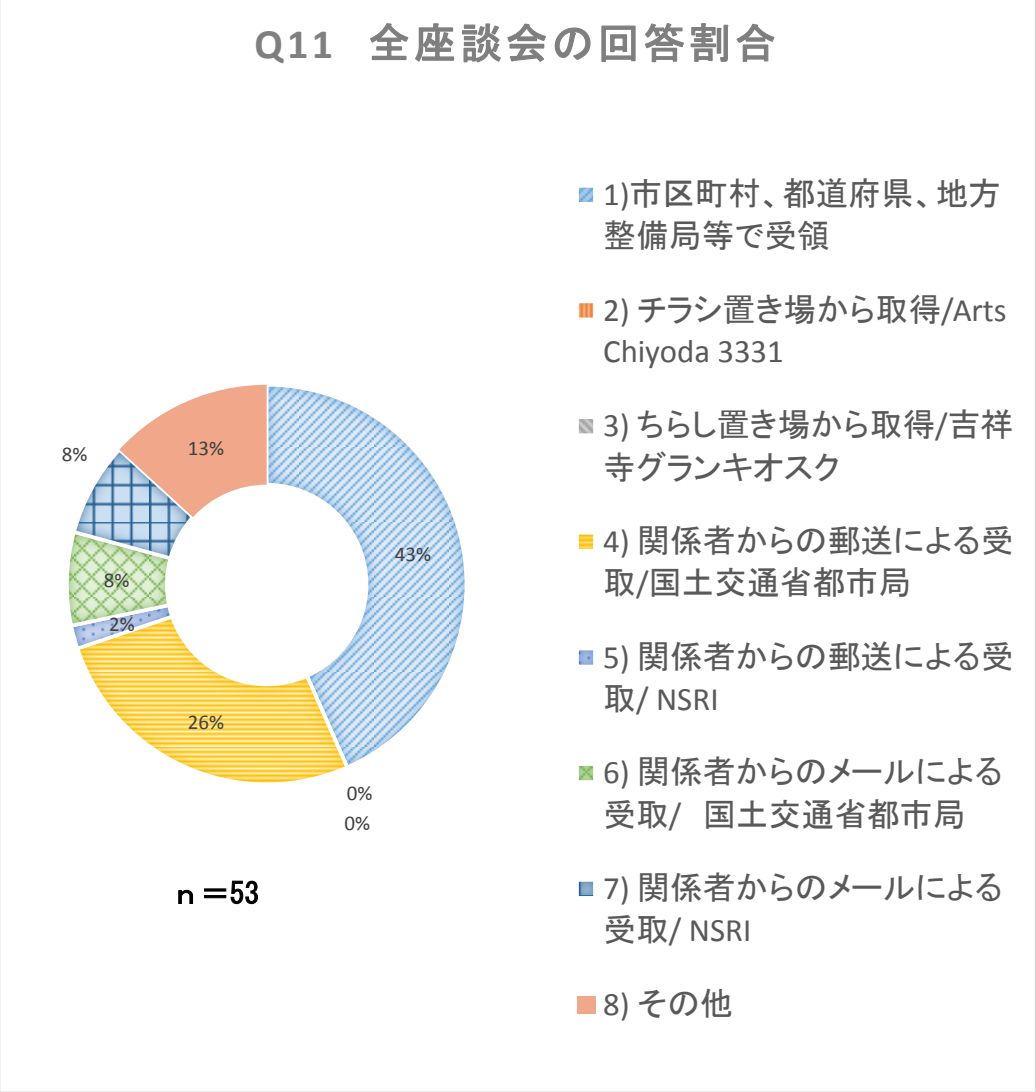
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

Q11.　チラシを受け取られた方法は何ですか

Q10 の結果からチラシの広報効果の高さが明らかになったが、チラシの受領方法に着目すると、行政からの受領の割合が高いことが分かる。一方で、チラシ置き場から情報を得て参加した人はおらず、効果の低さが浮き彫りとなった。

Q11. チラシを受け取られた方法は何ですか

	第一回	第二回	第三回	合計
1)市区町村、都道府県、地方整備局等で受領	8	5	10	**23**
2) チラシ置き場から取得/Arts Chiyoda 3331	0	0	0	**0**
3) ちらし置き場から取得/吉祥寺グランキオスク	0	0	0	**0**
4) 関係者からの郵送による受取/国土交通省都市局	4	6	4	**14**
5) 関係者からの郵送による受取/ NSRI	0	1	0	**1**
6) 関係者からのメールによる受取/　国土交通省都市局	2	1	1	**4**
7) 関係者からのメールによる受取/ NSRI	3	0	1	**4**
8) その他	3	2	2	**7**
有効回答者数	20	15	18	**53**



プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

Q12-1. どなたからのご紹介ですか

	第一回	第二回	第三回	合計
1) ヤン ゲール氏	0	0	0	**0**
2) 北原 理雄 氏	2	1	0	**3**
3) 松村 秀一 氏	0	0	0	**0**
4) 渡 和由 氏	0	2	7	**9**
5) 西村 浩 氏	1	0	0	**1**
6) 伊藤 香織 氏	1	0	0	**1**
7) 清水 義次 氏	1	0	0	**1**
8) 松井 直人 氏	0	0	1	**1**
9) 三浦 展 氏	0	0	0	**0**
10) 黒崎 輝男 氏	0	1	0	**1**
11) 鈴木 俊治 氏	0	0	2	**2**
12) 三友 奈々 氏	0	0	1	**1**
13) その他	0	1	0	**1**
有効回答者数	5	5	11	**21**

Q12-2. どのような方法でご紹介を受けたかお教えください

	第一回	第二回	第三回	合計
1) ちらし	1	0	3	**4**
2) メール	3	3	1	**7**
3) HP	0	0	1	**1**
4) SNS	2	0	0	**2**
5) その他	0	1	4	**5**
有効回答者数	6	4	9	**19**

Q13. どのホームページから情報を得られましたか

	第一回	第二回	第三回	合計
1) 国土交通省都市局	10	12	5	**27**
2) 建築士会	0	0	0	**0**
3) 日本建築家協会(JIA)	0	2	0	**2**
4) その他	0	0	0	**0**
有効回答者数	10	14	5	**29**

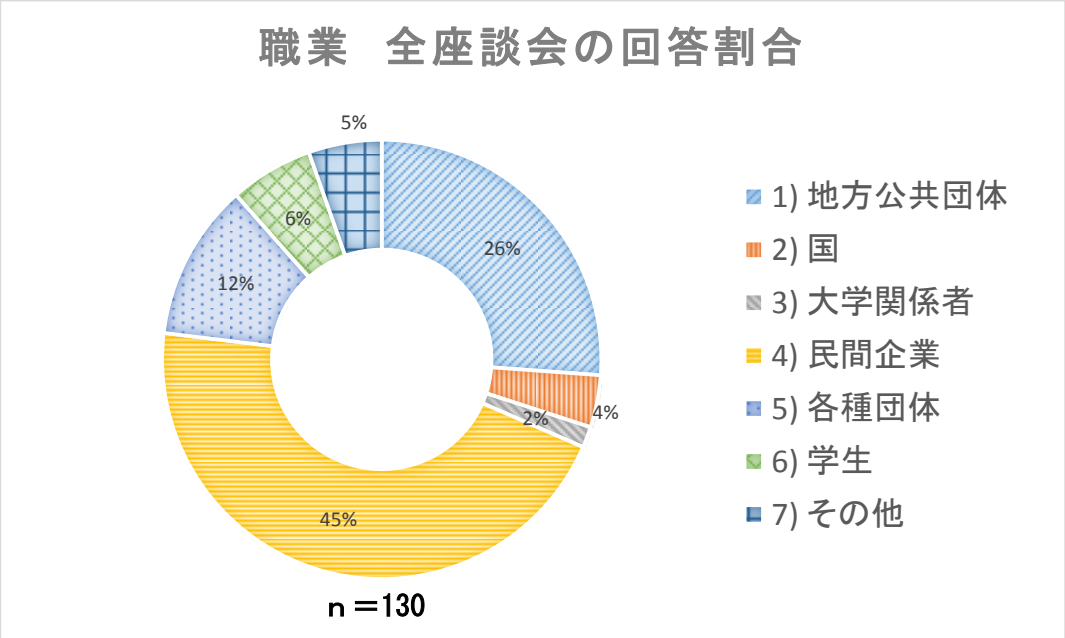
Q14. どちらのメールマガジンから情報を得られましたか

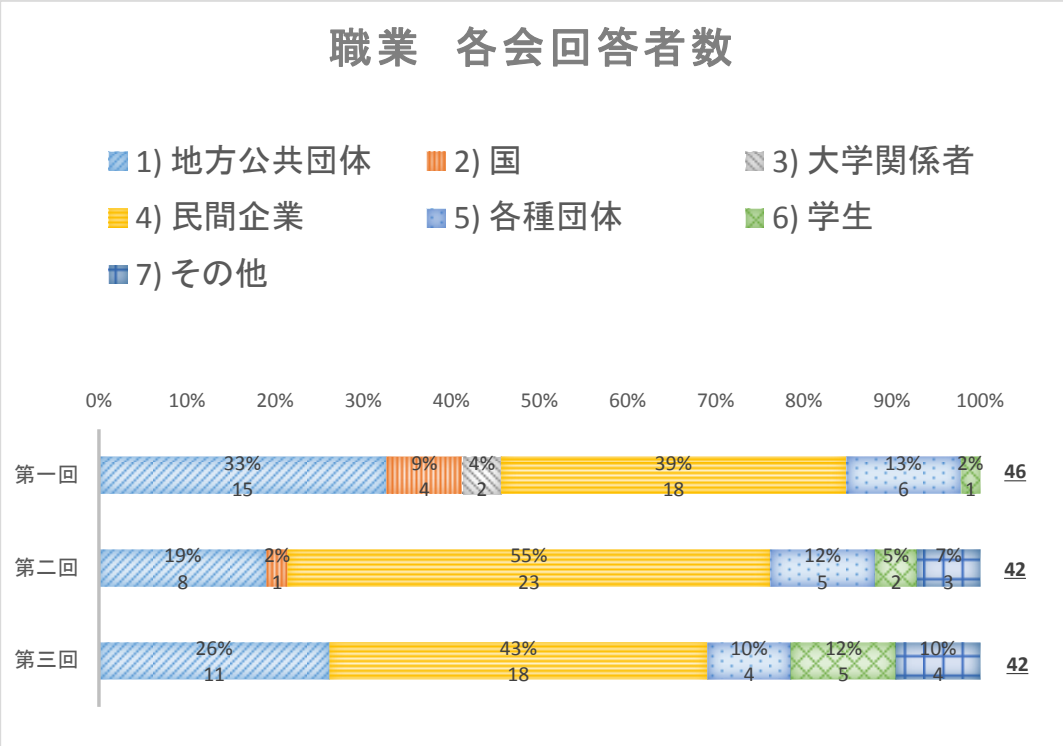
	第一回	第二回	第三回	合計
1) 日本都市計画家協会	1	0	2	**3**
2) 都市計画コンサルタント協会	0	1	2	**3**
3)matiza	0	0	0	**0**
4) その他	0	1	0	**1**
有効回答者数	1	2	4	**7**

プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

職業

	第一回	第二回	第三回	合計
1) 地方公共団体	15	8	11	**34**
2) 国	4	1	0	**5**
3) 大学関係者	2	0	0	**2**
4) 民間企業	18	23	18	**59**
5) 各種団体	6	5	4	**15**
6) 学生	1	2	5	**8**
7) その他	0	3	4	**7**
有効回答者数	46	42	42	**130**

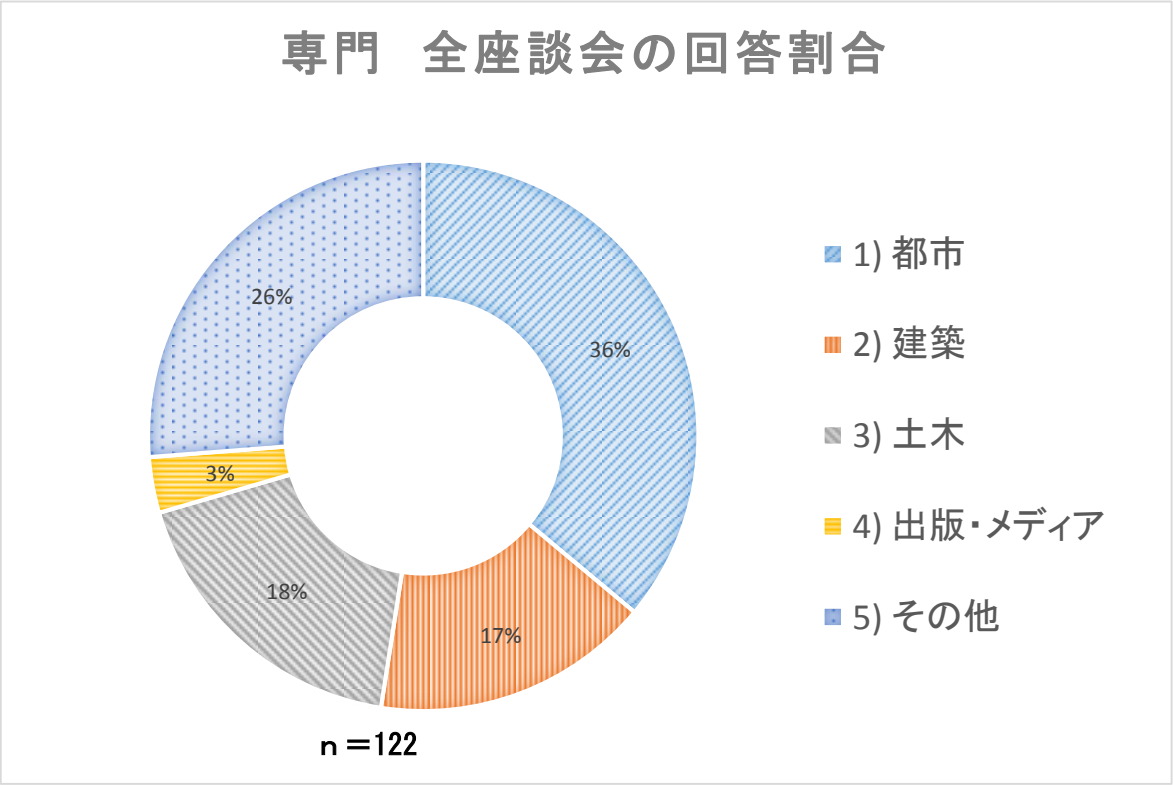


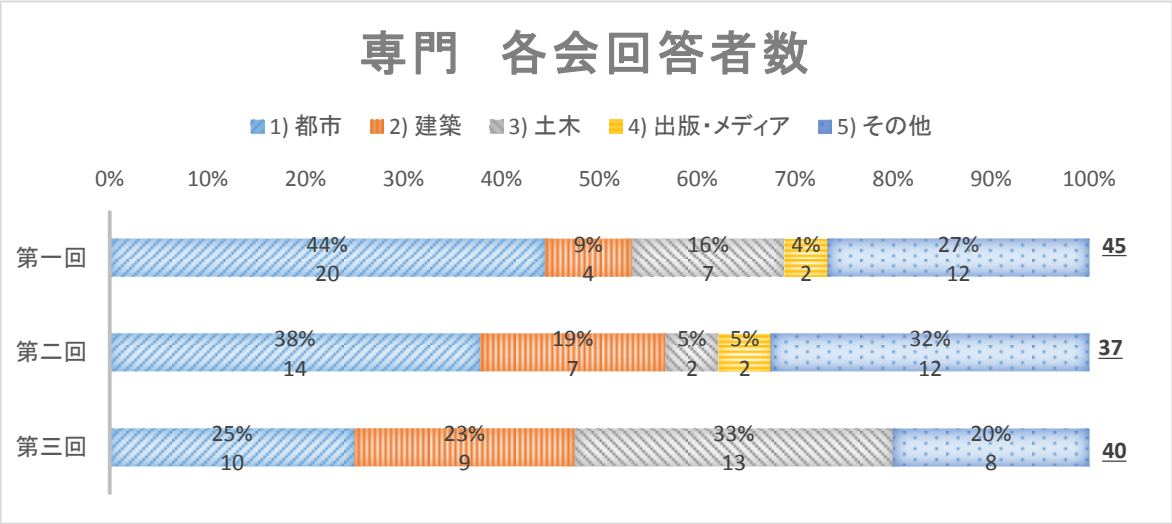


プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

専門

	第一回	第二回	第三回	合計
1) 都市	20	14	10	**44**
2) 建築	4	7	9	**20**
3) 土木	7	2	13	**22**
4) 出版・メディア	2	2	0	**4**
5) その他	12	12	8	**32**
有効回答者数	45	37	40	**122**

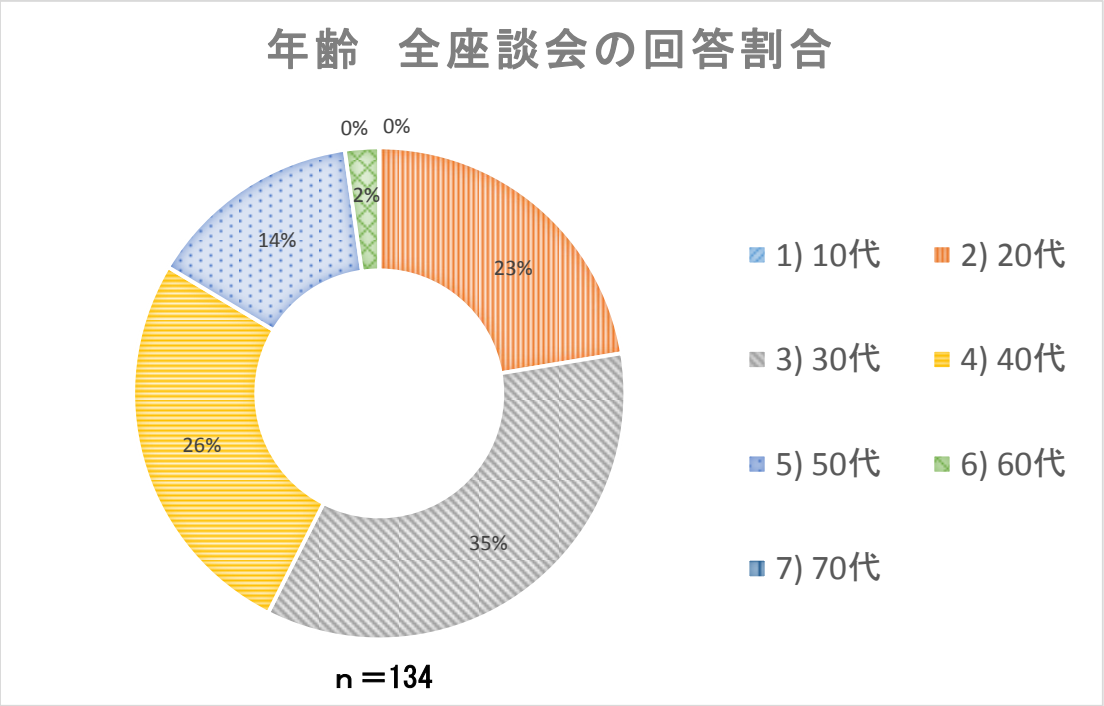


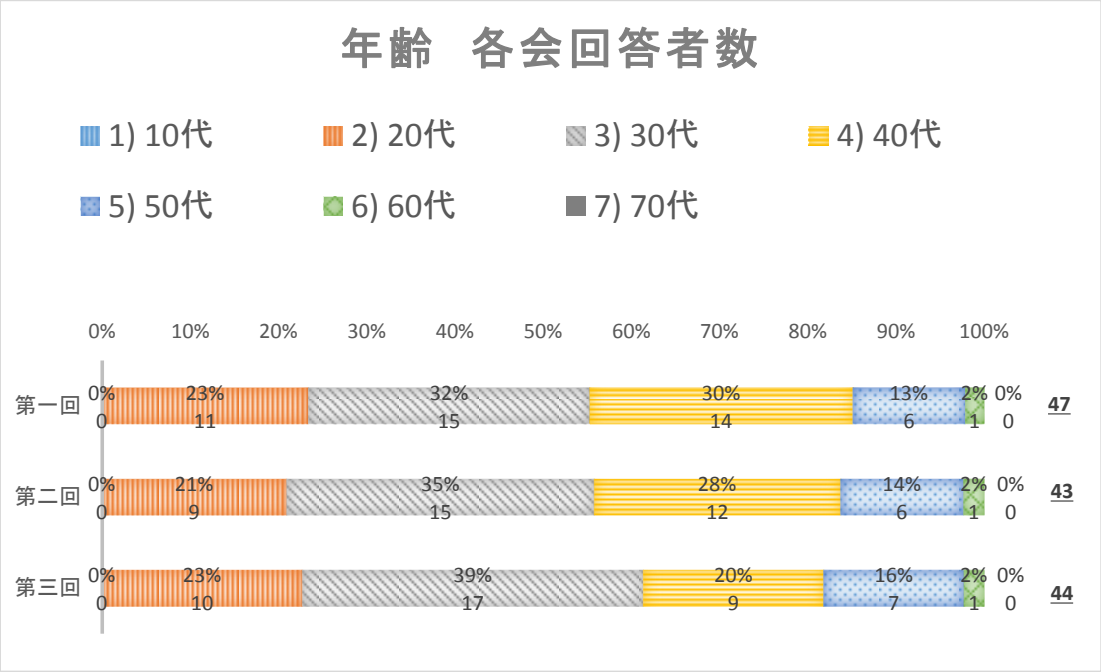


プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

年齢

	第一回	第二回	第三回	合計
1) 10代	0	0	0	**0**
2) 20代	11	9	10	**30**
3) 30代	15	15	17	**47**
4) 40代	14	12	9	**35**
5) 50代	6	6	7	**19**
6) 60代	1	1	1	**3**
7) 70代	0	0	0	**0**
有効回答者数	47	43	44	**134**

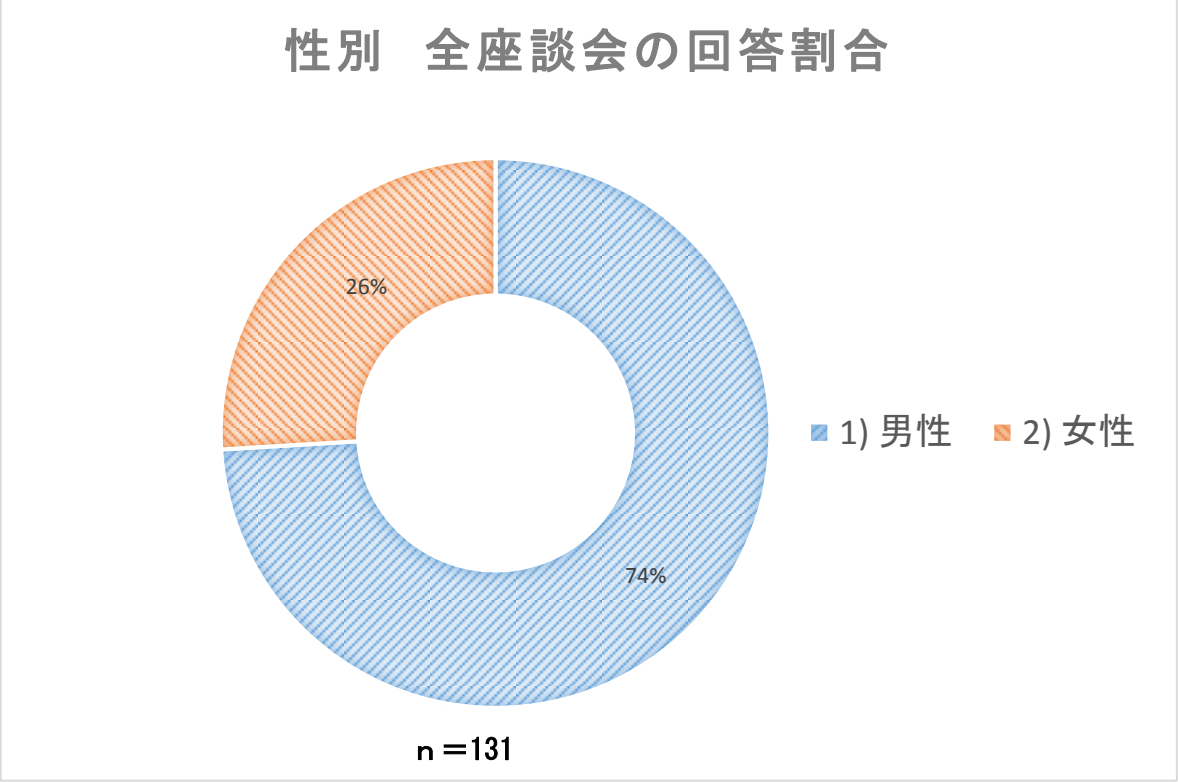


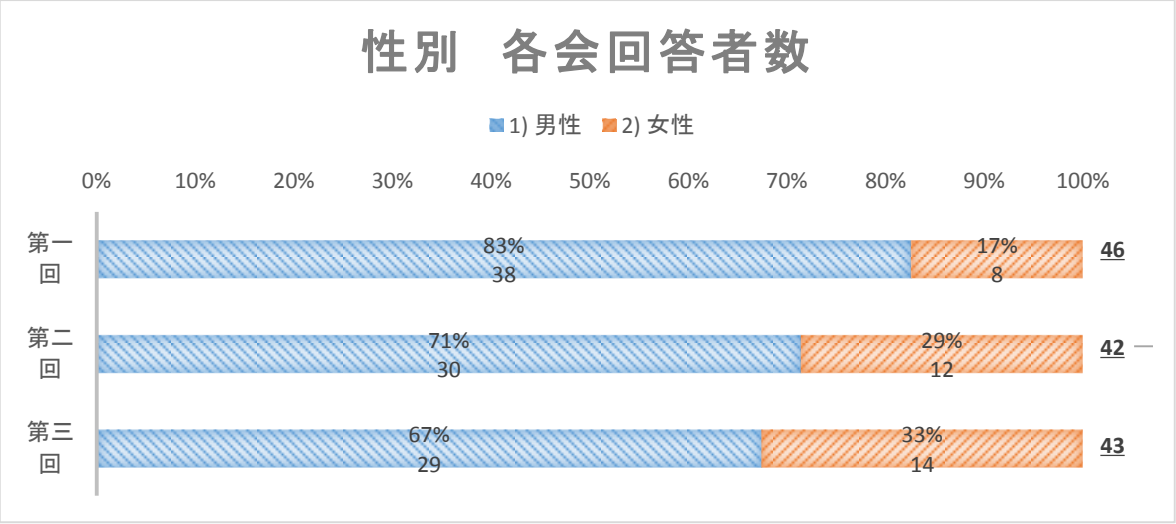


プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

性別

	第一回	第二回	第三回	合計
1) 男性	38	30	29	**97**
2) 女性	8	12	14	**34**
有効回答者数	46	42	43	**131**

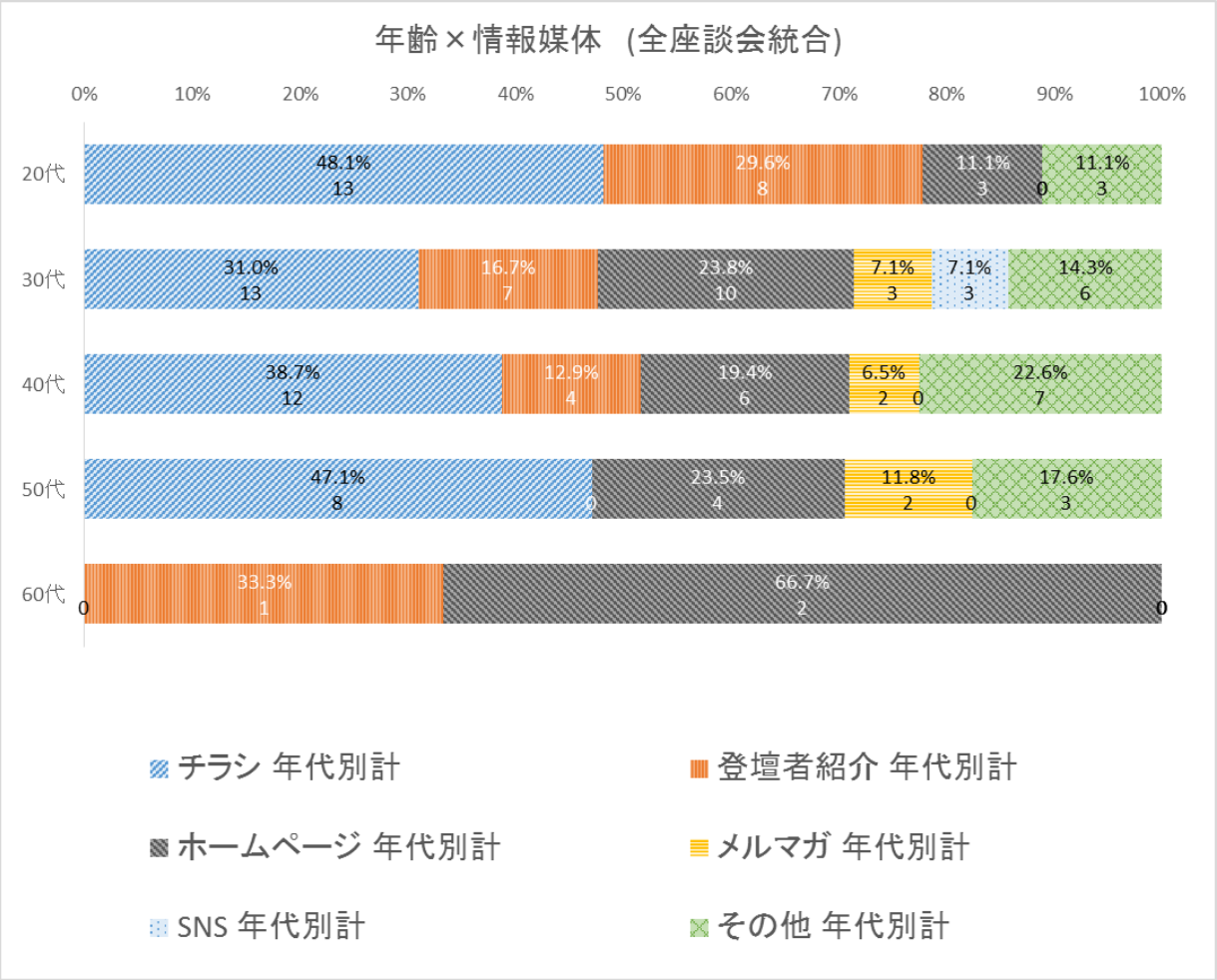




プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

クロス集計1.　年齢×情報媒体

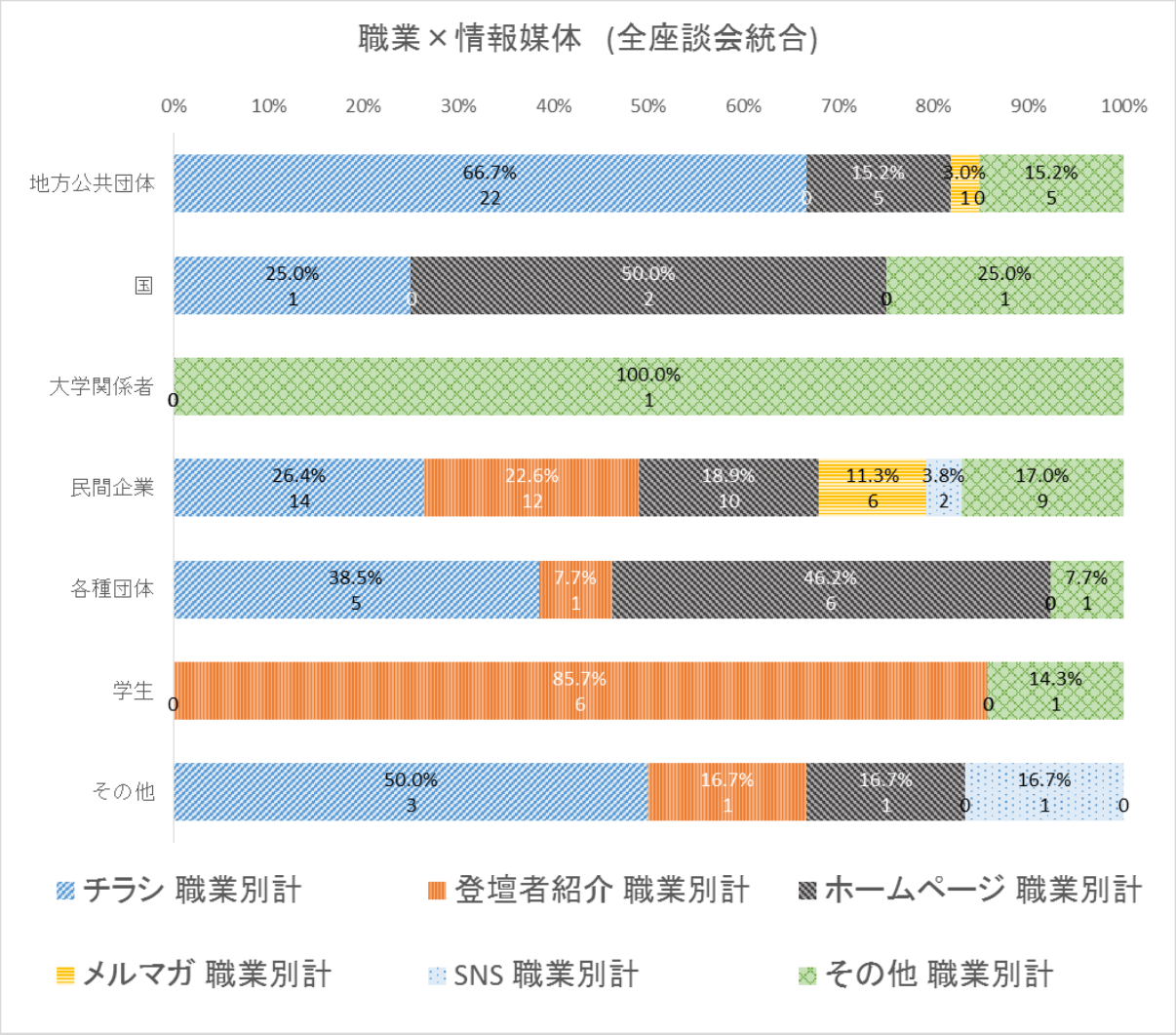
	チラシ				登壇者紹介				ホームページ				メルマガ				SNS				その他			
	第一回	第二回	第三回	**年代別計**	第一回	第二回	第三回	**年代別計**	第一回	第二回	第三回	**年代別計**	第一回	第二回	第三回	**年代別計**	第一回	第二回	第三回	**年代別計**	第一回	第二回	第三回	**年代別計**
10代	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**
20代	7	3	3	**13**	1	3	4	**8**	1	1	1	**3**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	1	1	1	**3**
30代	6	4	3	**13**	2	1	4	**7**	2	5	3	**10**	0	1	2	**3**	0	2	1	**3**	3	0	3	**6**
40代	3	5	4	**12**	2	0	2	**4**	4	1	1	**6**	1	0	1	**2**	0	0	0	**0**	3	3	1	**7**
50代	3	1	4	**8**	0	0	0	**0**	1	2	1	**4**	0	2	0	**2**	0	0	0	**0**	2	0	1	**3**
60代	0	0	0	**0**	0	0	1	**1**	1	1	0	**2**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**
70代~	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**



プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

クロス集計2.　職業×情報媒体

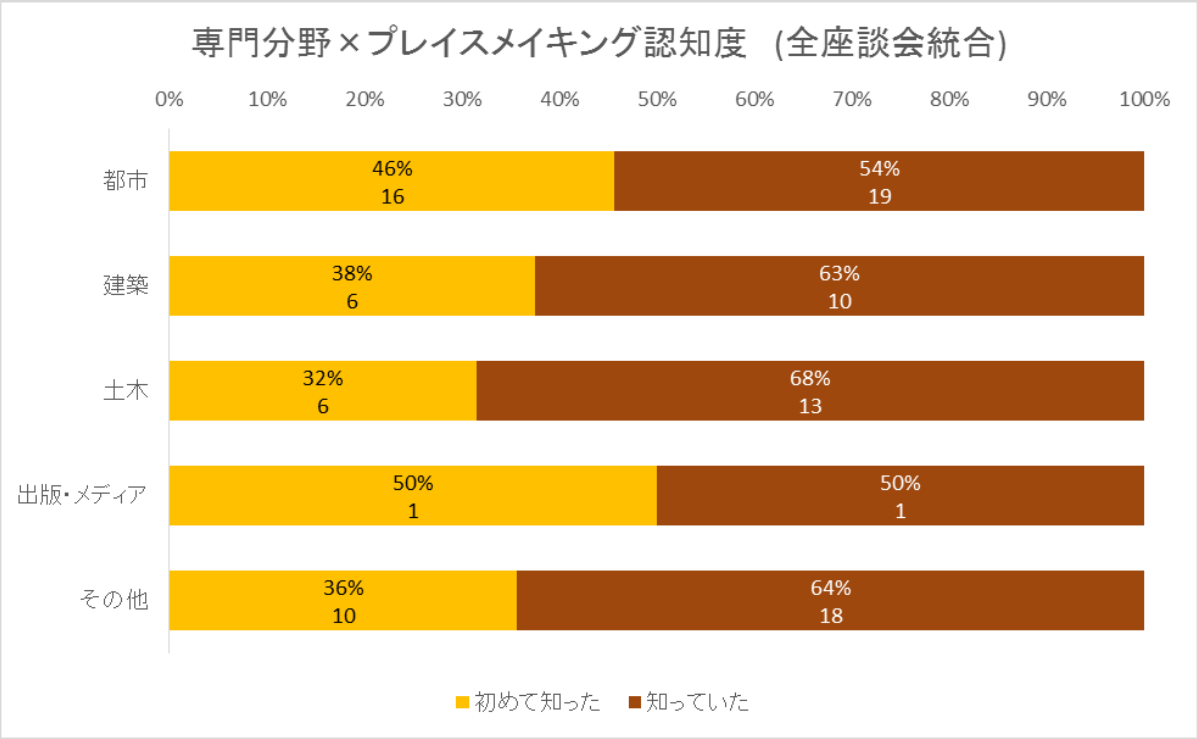
	チラシ				登壇者紹介				ホームページ				メルマガ				SNS				その他			
	第一回	第二回	第三回	**職業別計**	第一回	第二回	第三回	**職業別計**	第一回	第二回	第三回	**職業別計**	第一回	第二回	第三回	**職業別計**	第一回	第二回	第三回	**職業別計**	第一回	第二回	第三回	**職業別計**
地方公共団体	10	6	6	**22**	0	0	0	**0**	2	1	2	**5**	1	0	0	**1**	0	0	0	**0**	2	0	3	**5**
国	1	0	0	**1**	0	0	0	**0**	2	0	0	**2**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	1	0	0	**1**
大学関係者	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	1	0	0	**1**
民間企業	6	4	4	**14**	4	2	6	**12**	3	6	1	**10**	0	3	3	**6**	0	2	0	**2**	3	3	3	**9**
各種団体	2	2	1	**5**	1	0	0	**1**	2	1	3	**6**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	1	0	**1**
学生	0	0	0	**0**	0	2	4	**6**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**	1	0	0	**1**
その他	0	1	2	**3**	0	0	1	**1**	0	1	0	**1**	0	0	0	**0**	0	0	1	**1**	0	0	0	**0**



プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

クロス集計3. 専門×プレイスメイキングの認知度

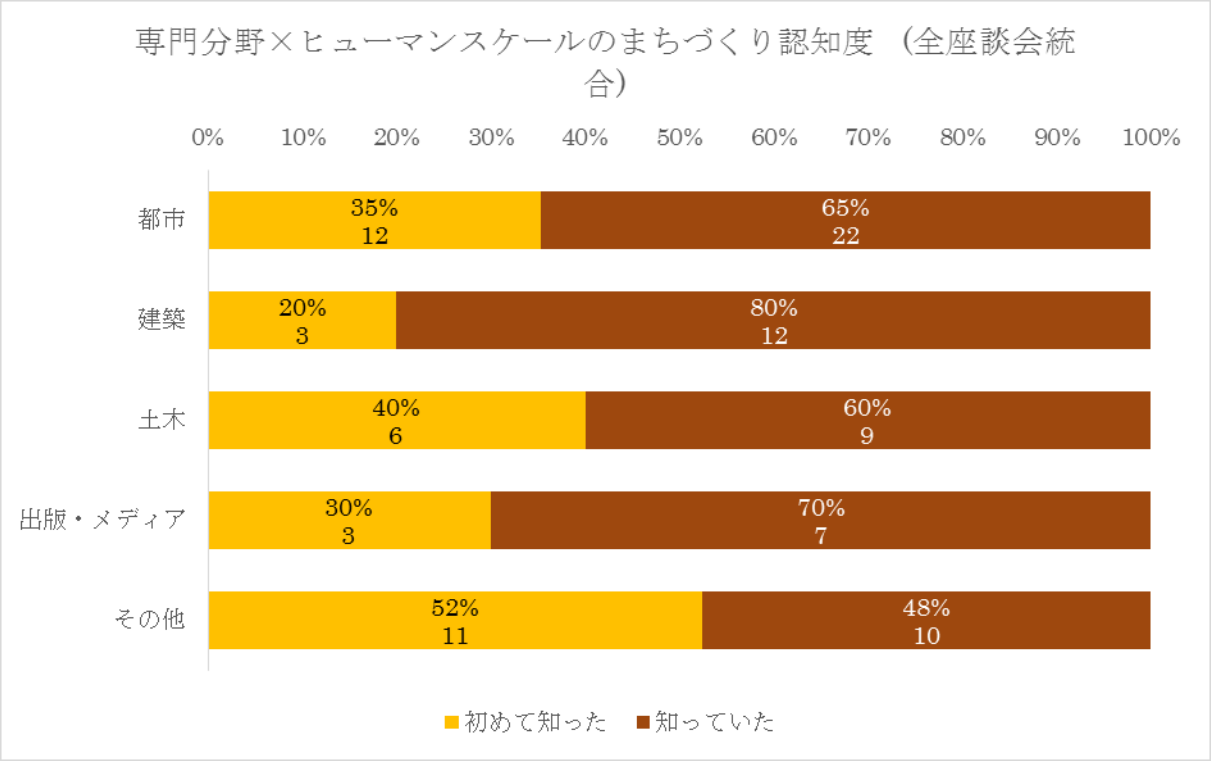
	初めて知った				知っていた			
	第一回	第二回	第三回	専門別計	第一回	第二回	第三回	専門別計
都市	6	5	5	**16**	8	7	4	**19**
建築	3	1	2	**6**	1	3	6	**10**
土木	2	1	3	**6**	3	1	9	**13**
出版・メディア	0	1	0	**1**	1	0	0	**1**
その他	3	3	4	**10**	6	9	3	**18**



プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

クロス集計4. 専門×ヒューマンスケールのまちづくりの認知度

	初めて知った				知っていた			
	第一回	第二回	第三回	専門別計	第一回	第二回	第三回	専門別計
都市	4	4	4	**12**	8	9	5	**22**
建築	1	0	2	**3**	3	3	6	**12**
土木	1	1	4	**6**	0	1	8	**9**
出版・メディア	3	0	0	**3**	5	2	0	**7**
その他	5	2	4	**11**	0	7	3	**10**



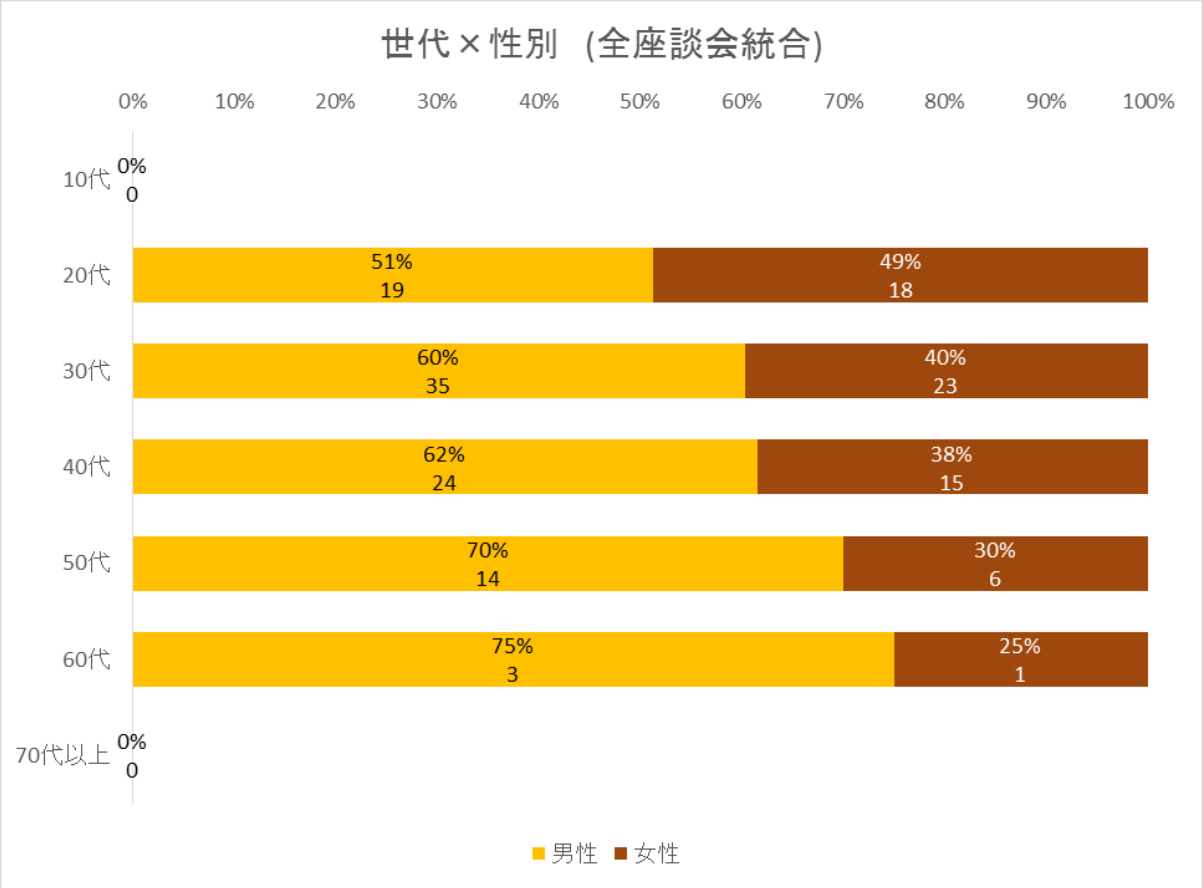
プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

クロス集計 5.　年代×性別

男性と比較して女性の参加者は少ないものの、世代別に見ると、女性の参加者の割合が、若い世代ほど高くなっていることが分かる。

クロス集計5. 年代×性別

	男性				女性			
	第一回	第二回	第三回	世代計	第一回	第二回	第三回	世代計
10代	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**
20代	9	6	4	**19**	9	3	6	**18**
30代	13	9	13	**35**	13	6	4	**23**
40代	10	8	6	**24**	10	2	3	**15**
50代	4	5	5	**14**	4	1	1	**6**
60代	1	1	1	**3**	1	0	0	**1**
70代以上	0	0	0	**0**	0	0	0	**0**

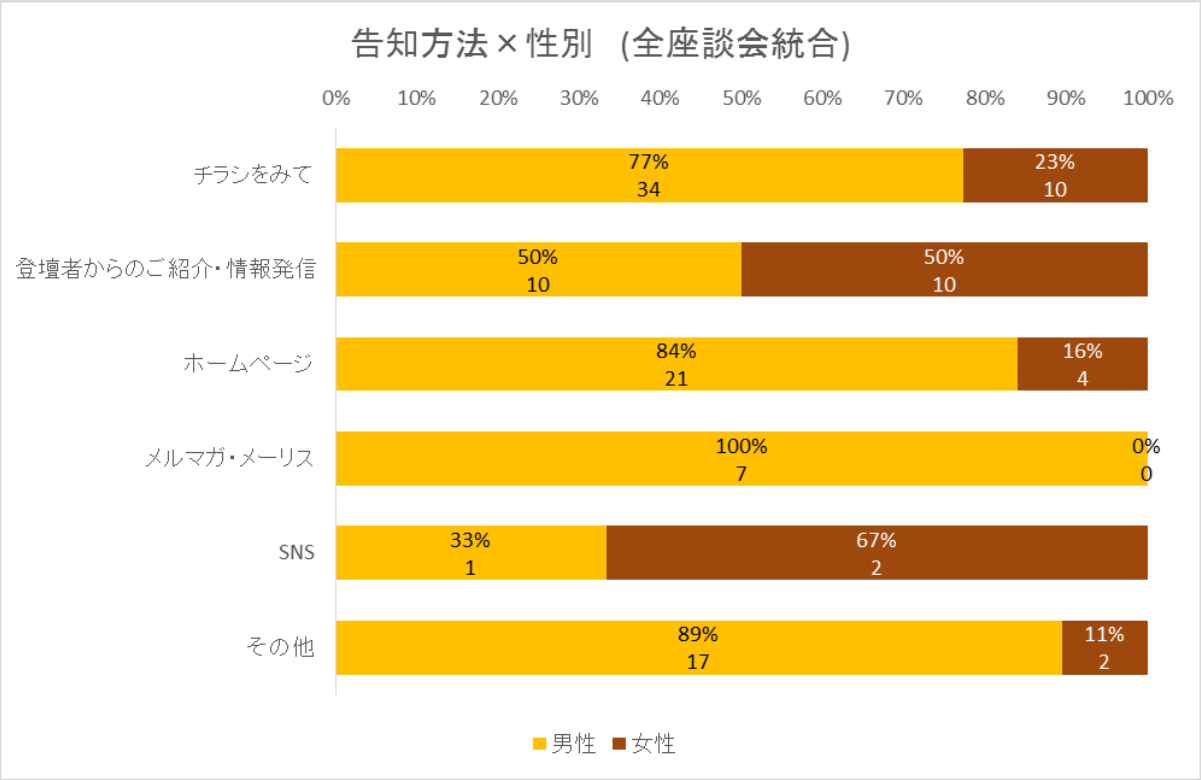


クロス集計 6.　告知方法×性別

男性参加者が全体の 7 割を占めるため、各広告媒体でも男性が過半となるものが多い。
一方、「2)登壇者からのご紹介・情報発信」に関しては、女性の割合が高い。女性に対しては登壇者からの情報発信が有効と考えられる。

クロス集計6. 告知方法×性別

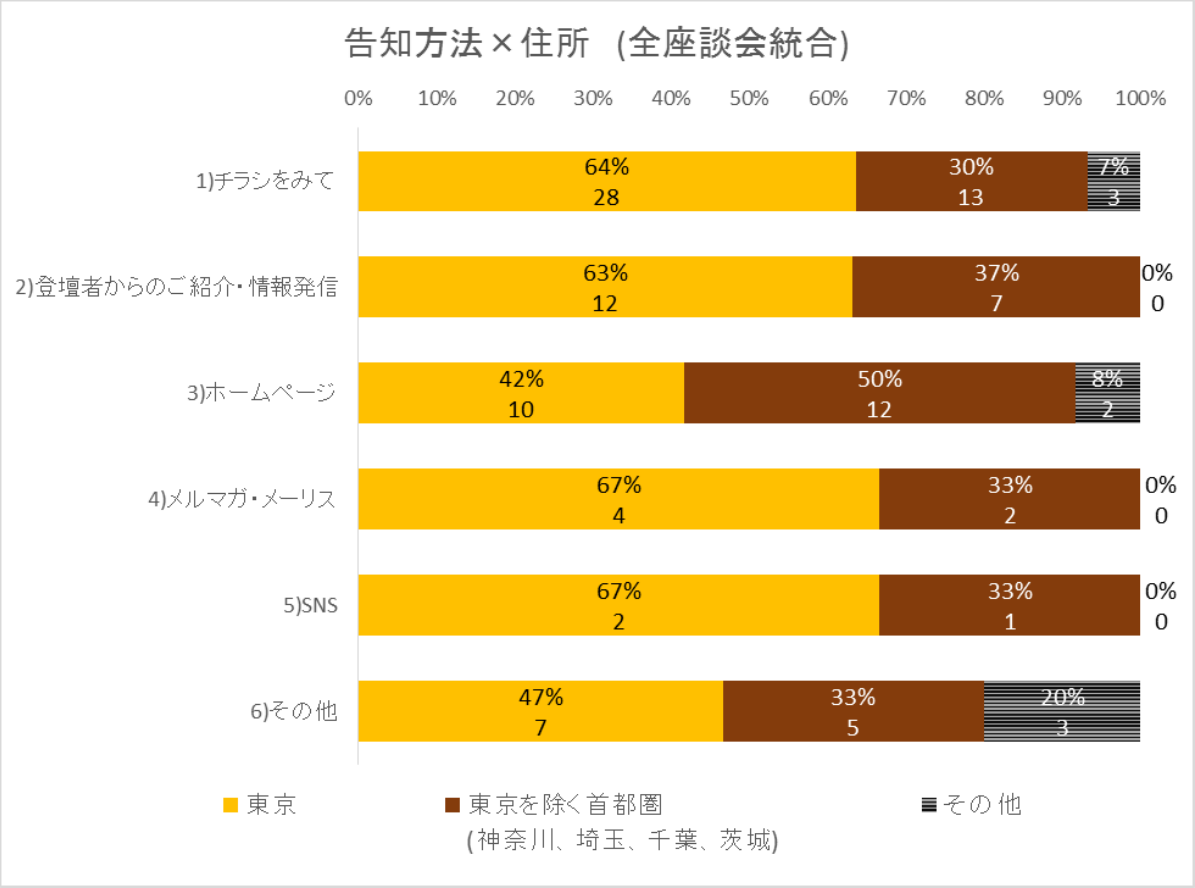
	男性				女性			
	第一回	第二回	第三回	方法別計	第一回	第二回	第三回	方法別計
チラシをみて	16	9	9	**34**	2	3	5	**10**
登壇者からのご紹介・情報発信	3	1	6	**10**	2	3	5	**10**
ホームページ	7	9	5	**21**	2	1	1	**4**
メルマガ・メーリス	1	3	3	**7**	0	0	0	**0**
SNS	0	1	0	**1**	0	1	1	**2**
その他	8	4	5	**17**	1	0	1	**2**



プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

クロス集計7. 告知方法×住所

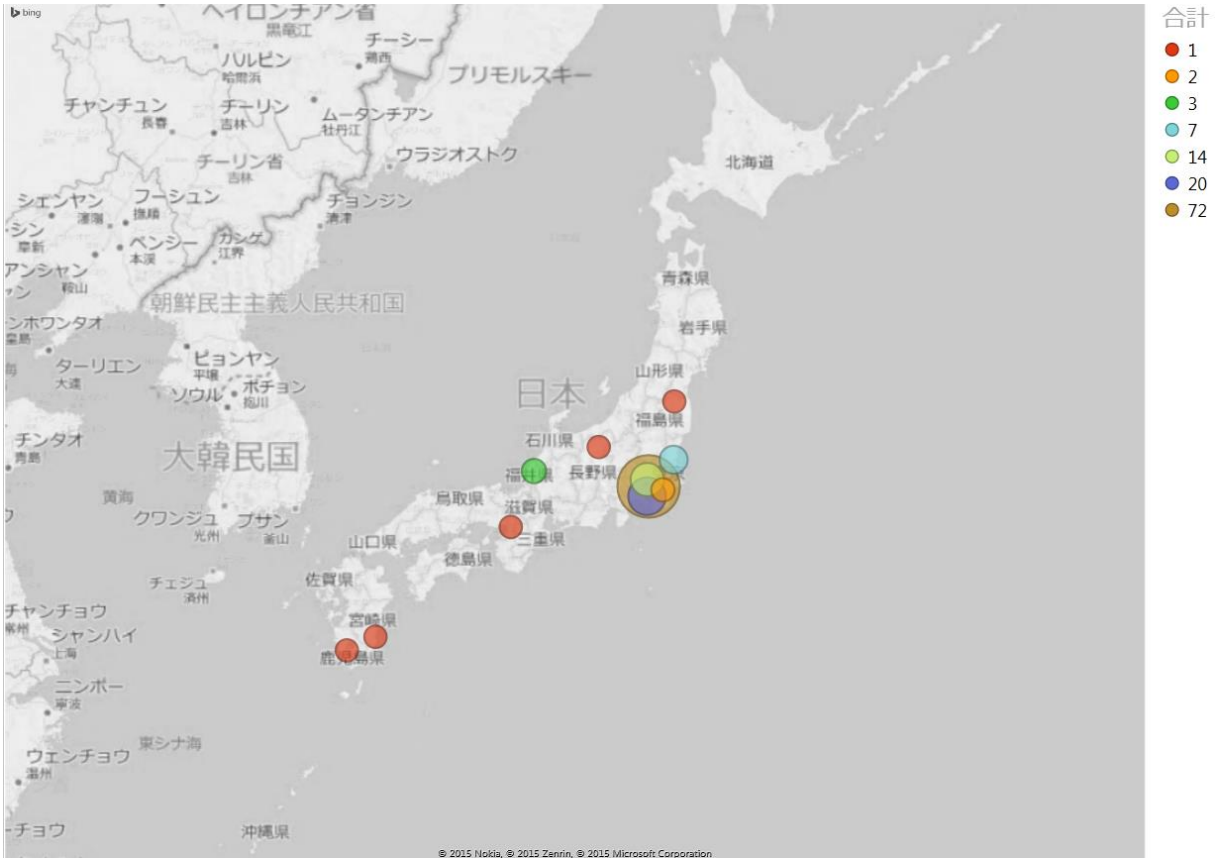
	東京				東京を除く首都圏（神奈川、埼玉、千葉、茨城）				その他			
	第一回	第二回	第三回	方法別計	第一回	第二回	第三回	方法別計	第一回	第二回	第三回	方法別計
1)チラシをみて	14	7	7	**28**	3	5	5	**13**	1	0	2	**3**
2)登壇者からのご紹介・情報発信	5	1	6	**12**	0	3	4	**7**	0	0	0	**0**
3)ホームページ	2	6	2	**10**	5	3	4	**12**	1	1	0	**2**
4)メルマガ・メーリス	1	1	2	**4**	0	1	1	**2**	0	0	0	**0**
5)SNS	0	1	1	**2**	0	1	0	**1**	0	0	0	**0**
6)その他	3	1	3	**7**	2	3	0	**5**	1	0	2	**3**



プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

参加者住所の都道府県集計

都市名	第1回座談会	第2回座談会	第3回座談会	合計
東京都	30	20	22	**72**
神奈川県	5	11	4	**20**
埼玉県	6	3	5	**14**
千葉県	0	1	1	**2**
茨城県	1	2	4	**7**
鹿児島県	1	0	0	**1**
大阪府	0	1	0	**1**
宮崎県	0	1	0	**1**
福井県	0	0	3	**3**
福島県	0	0	1	**1**
長野県	0	0	1	**1**
合計	**43**	**39**	**41**	**123**



参加者の都道府県マッピング　（3 回分統合）

プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

第一回　登壇者別主要キーワード

西村浩氏	人数	清水義次氏	人数	松井直人氏	人数
10人で始めるたまねぎ戦法	19	補助金に依存しない仕組み（民間のお金を使う仕組み）	13	誘導型のまちづくり・線引き型から誘導型へ	23
空地のマネジメント・楽しい空間の創出 （駐車場、道路、原っぱ・「わいわい！コンテナ」の設置、空きの価値を考える）	14	パブリックマインド	8	公と民をつなぐ	4
発明的まちづくり（人口減少社会に合わせたまちづくり）	4	実現のためのプロセスを考える	7	道と駐車場の利活用	2
動機づくり（防災・交通からスタートする動機づけ）	3	道路・駐車場の再配置	7	歩きやすいまちづくり	1
公と民をつなぐ	2	公と民をつなぐ	5	パブリックマインド	1
参加する(自分の店を出す)	1	オガールプラザ(のりしろ空間、インナーストリート、新たなファサード)	4		
遠投力：先を見据えた持続可能なまちづくり	1	敷地に価値なし、エリアに価値あり	3		
		大小のリノベーション：建物単位のリノベーションとエリア単位のリノベーション	3		
		歩きやすい空間	1		
		街の多様性	1		
		参加する(自分の店を出す)	1		

プレイスメイキング座談会　アンケート集計結果

第二回　登壇者別主要キーワード

伊藤香織氏	人数	三浦展氏	人数	黒﨑輝男氏	人数
ピクニック	10	ひろう技術、捨てる技術	9	本物の価値を見極める	10
交流	8	モノ、コトの価値	8	冒険の場としての都市	6
能動的な実体験	7	小さな主体の集合	8	コンテンツの重要性	4
シビックプライド	6	出会いの場所	6	メディアとしてのお金	3
居心地のいい場所	5	働き方の転換	6	マイノリティによるイノベーション	3
		賑わいの種類	4	のら	3
		消費傾向の変化	3	クリエイティブ	2
		2拠点居住	2	実在するものの価値	2
		西荻窪＆吉祥寺	2	会話からの発想	1
		地元に根付いた場所	1		

第三回　登壇者主要キーワード

渡和由氏	人数	三友奈々氏	人数	鈴木俊治氏	人数
江戸時代のプレイスメイキング	7	ブライアントパーク	6	生活感	8
みんなの椅子	6	プレイスメイキングの流れ(ランド・サイト・スペース・プレイス・サードプレイス)	4	センスオブプレイス	3
人とまちの関係	6	管理・運営	3	地域の共有	2
防犯・座り場・眺め場	5	利用者のカスタマイズ	3	無目的に都市を楽しめる	2
富山のグランドプラザ	5	サードプレイス	2	商業的でも商業に縛られない	2
7つの場所	4	プレイスメイキングの定義	2	次世代への継承	1
サードプレイス	2	行政、運営者、計画者のヴィジョン共有	1	ハノイのパブリックスペース	1

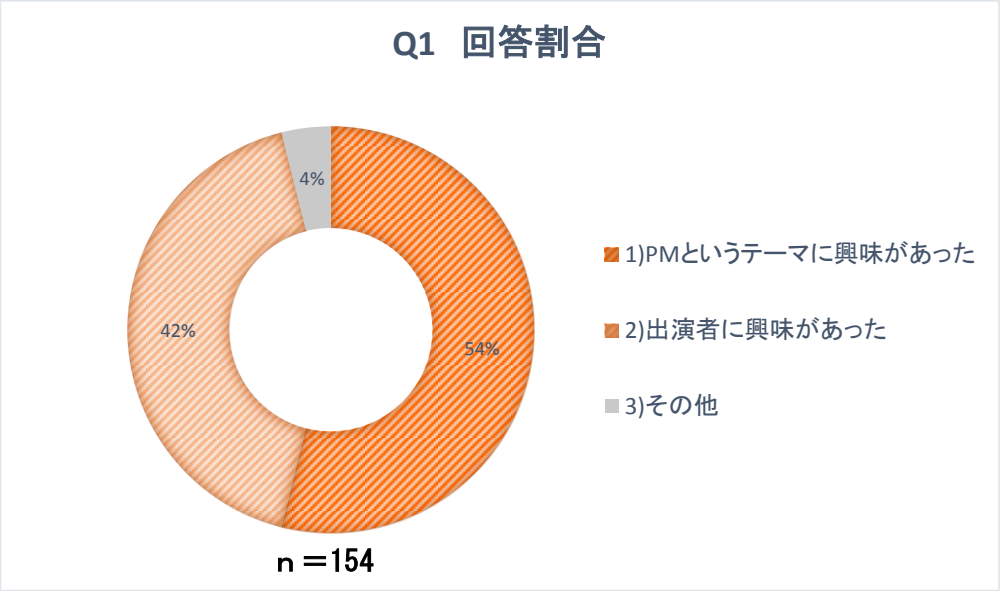
シンポジウム当日アンケート集計結果

Q1. 参加しようと思った理由はなんですか

座談会と比較すると、「2)出演者に興味があった」が 17 ポイント高くなっている。

Q1. 参加しようと思った理由はなんですか

	合計
1)PMというテーマに興味があった	83
2)出演者に興味があった	65
3)その他	6
有効回答者数	154



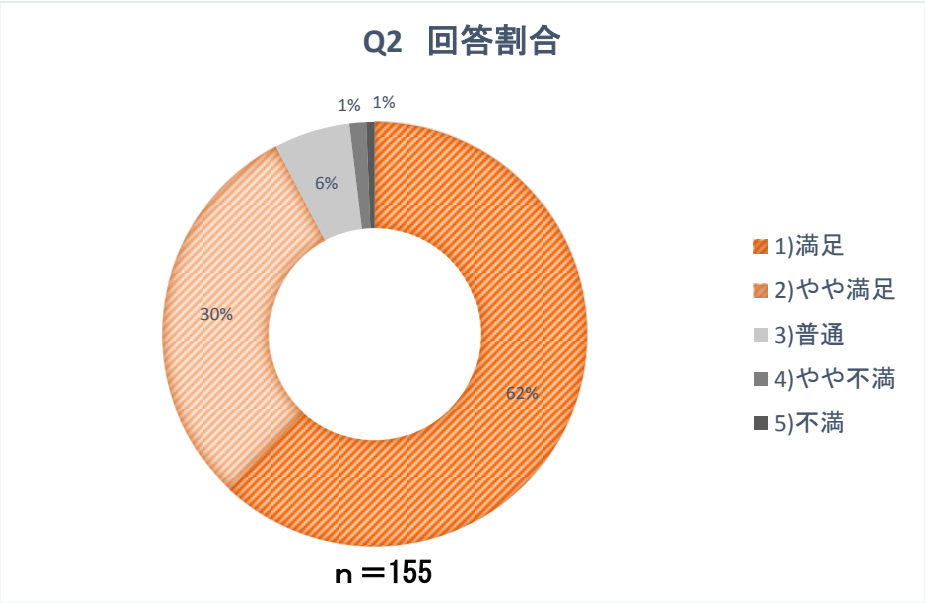
シンポジウム当日アンケート集計結果

Q2. 基調講演及びショートプレゼンテーションの内容は如何でしたか

ヤン・ゲール氏の基調講演及びビアギッテ・スヴァー氏のショートプレゼンテーションについて、「1)満足」、「2)やや満足」の合計が92%となっており、参加者の満足度は非常に高い。

Q2. 基調講演及びショートプレゼンテーションの内容は如何でしたか

	合計
1)満足	96
2)やや満足	47
3)普通	9
4)やや不満	2
5)不満	1
有効回答者数	155



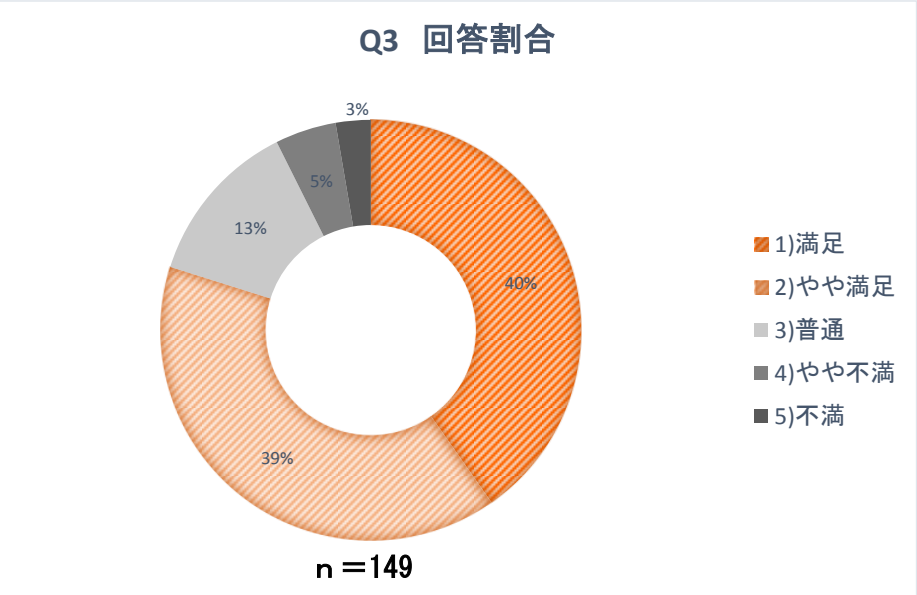
シンポジウム当日アンケート集計結果

Q3. 鼎談の内容は如何でしたか

ヤン・ゲール氏、北原名誉教授、渡准教授の鼎談について、「1)満足」、「2)やや満足」の合計が 79%となっており、参加者の満足度は高い。

Q3. 鼎談の内容は如何でしたか

	合計
1)満足	60
2)やや満足	59
3)普通	19
4)やや不満	7
5)不満	4
有効回答者数	149



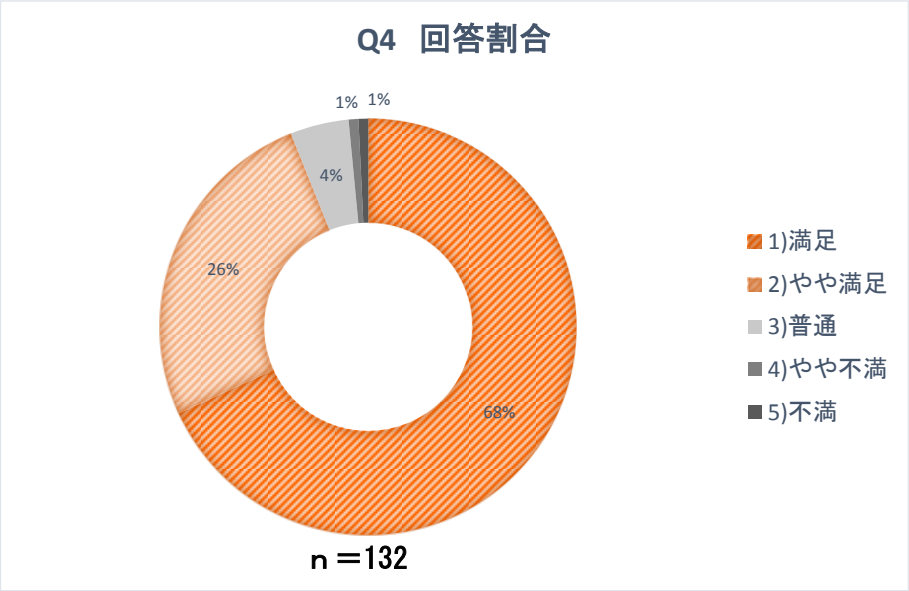
シンポジウム当日アンケート集計結果

Q4. パネルディスカッションの内容は如何でしたか

松村教授、渡准教授、伊藤准教授、西村氏のパネルディスカッションについて、Q2 と同様に「1) 満足」、「2) やや満足」の合計が 94%となっており、参加者の満足度は非常に高い。

Q4. パネルディスカッションの内容は如何でしたか

	合計
1)満足	90
2)やや満足	34
3)普通	6
4)やや不満	1
5)不満	1
有効回答者数	132



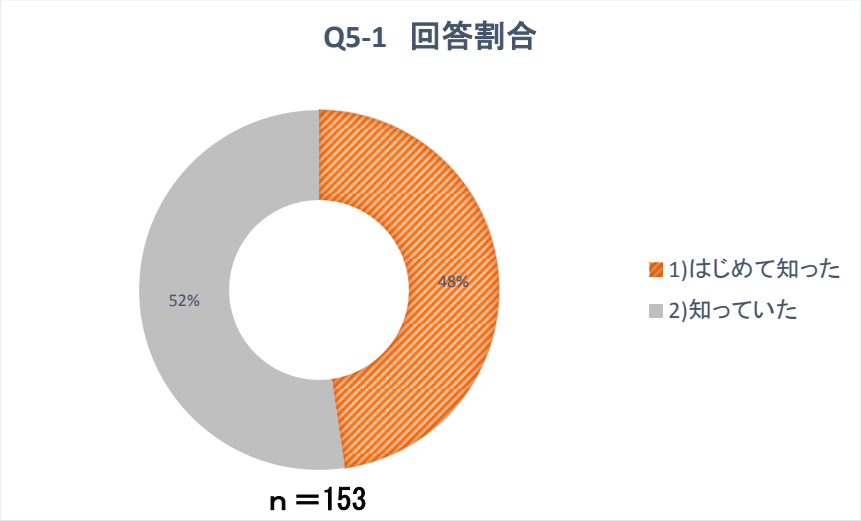
シンポジウム当日アンケート集計結果

Q5-1.　「プレイスメイキング」のことをご存知でしたか

座談会と比較して、「2）知っていた」が 6 ポイント高い。

Q5-1.「プレイスメイキング」のことをご存知でしたか

	合計
1)はじめて知った	73
2)知っていた	80
有効回答者数	153

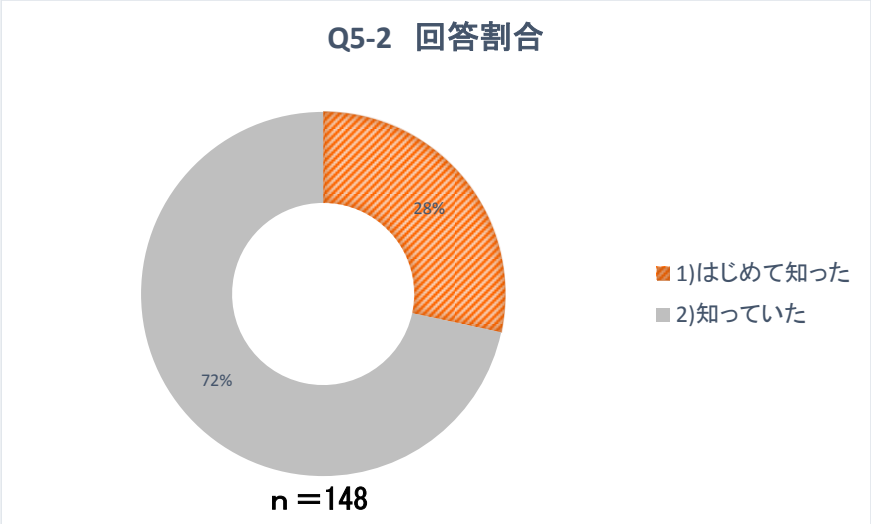


Q5-2.　「ヒューマンスケールのまちづくり」のことをご存知でしたか

Q5-1 と同様に、座談会と比較して「2）知っていた」が 6 ポイント高い。

Q5-2.「ヒューマンスケールのまちづくり」のことをご存知でしたか

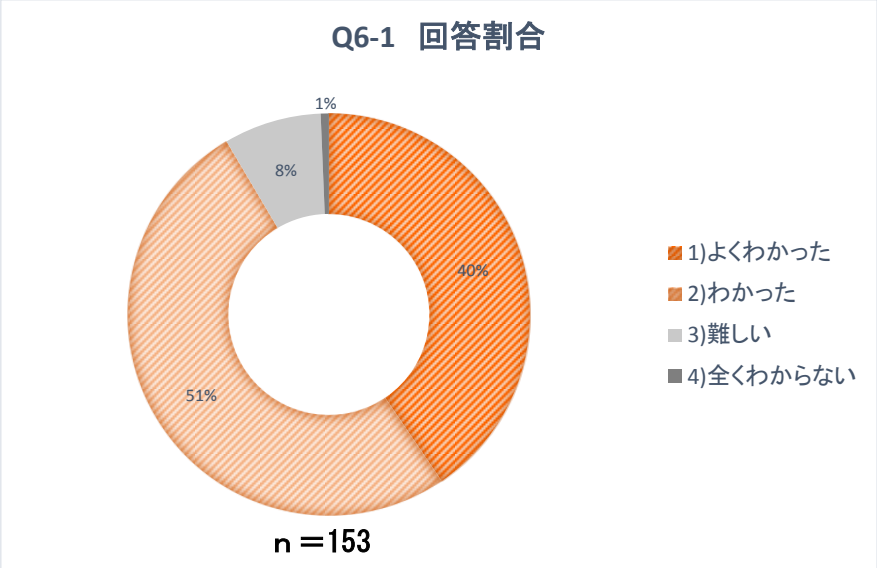
	合計
1)はじめて知った	42
2)知っていた	106
有効回答者数	148



シンポジウム当日アンケート集計結果

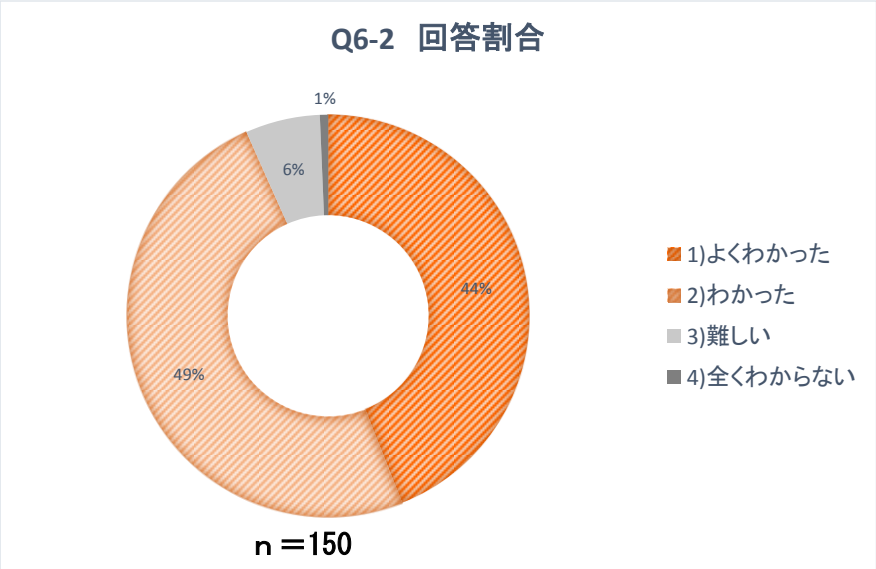
Q6-1.「プレイスメイキング」に関する理解は深まりましたか

	合計
1)よくわかった	62
2)わかった	78
3)難しい	12
4)全くわからない	1
有効回答者数	153



Q6-2.「ヒューマンスケールのまちづくり」に関する理解は深まりましたか

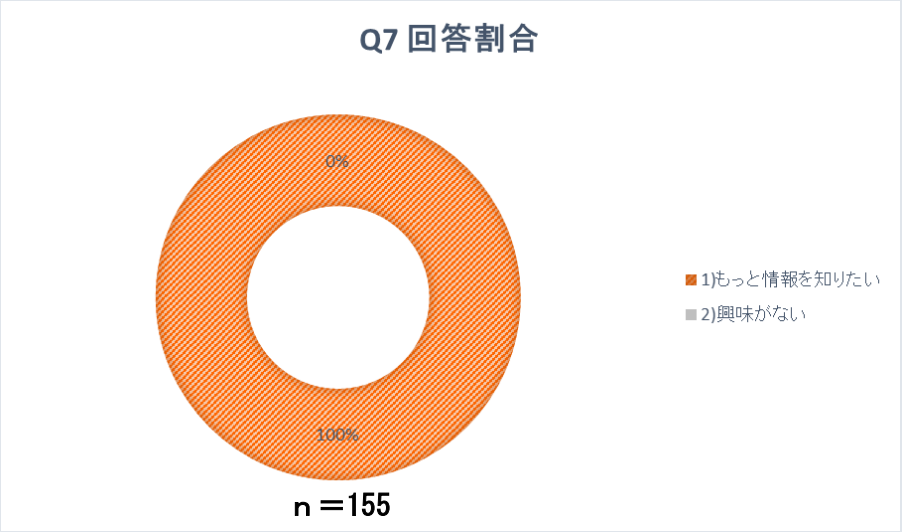
	合計
1)よくわかった	66
2)わかった	74
3)難しい	9
4)全くわからない	1
有効回答者数	150



シンポジウム当日アンケート集計結果

Q7.「プレイスメイキング」、「ヒューマンスケールのまちづくり」へのご関心についてお尋ねします

	合計
1)もっと情報を知りたい	155
2)興味がない	0
有効回答者数	155

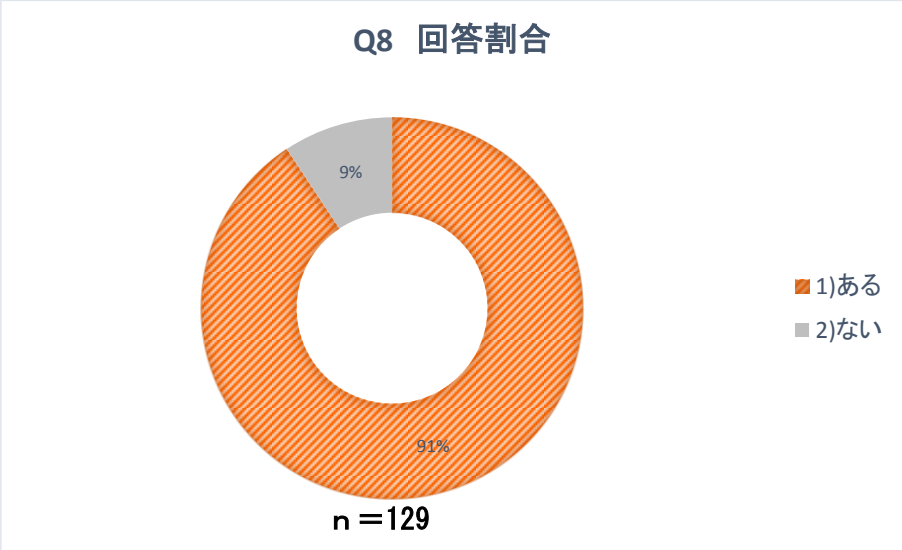


Q8. プレイスメイキングを実践したい場所が身の回りにありますか

座談会と比較して、「1) ある」と回答した人の割合が 12 ポイント高い。

Q8. プレイスメイキングを実践したい場所が身の回りにございますか

	合計
1)ある	117
2)ない	12
有効回答者数	129

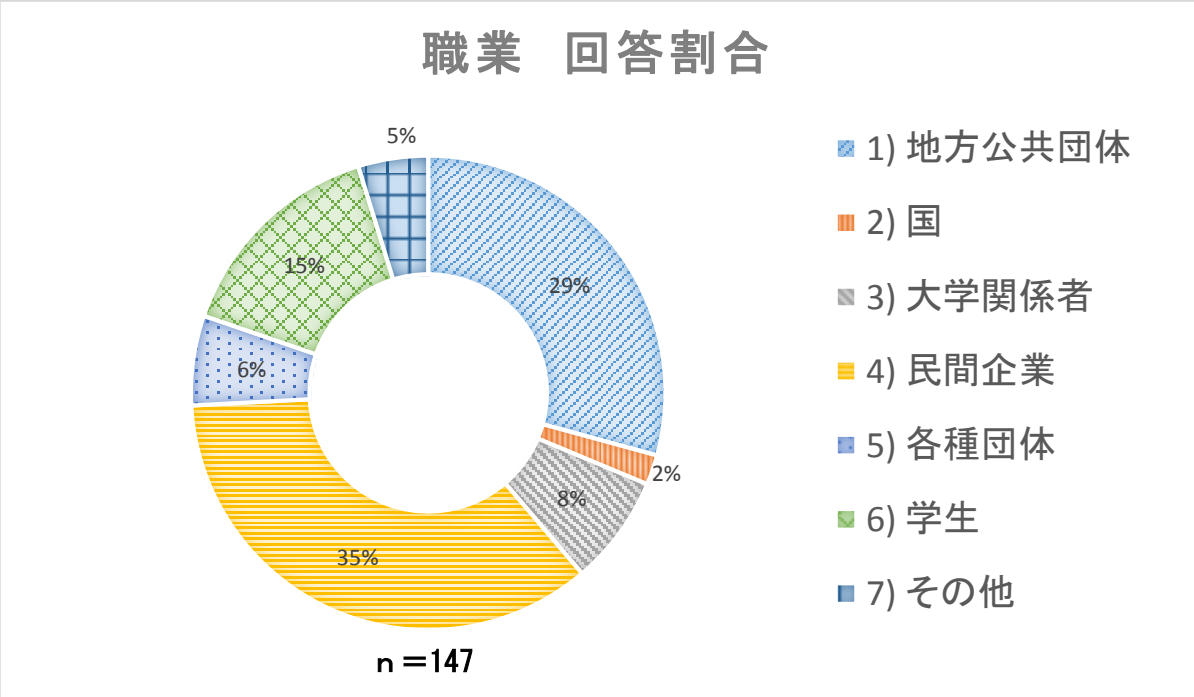


シンポジウム当日アンケート集計結果

職業
座談会と比較して、「1）地方公共団体」、「2）大学関係者」、「6）学生」の割合が高い。

職業

	合計
1）地方公共団体	43
2）国	3
3）大学関係者	11
4）民間企業	52
5）各種団体	9
6）学生	22
7）その他	7
有効回答者数	147



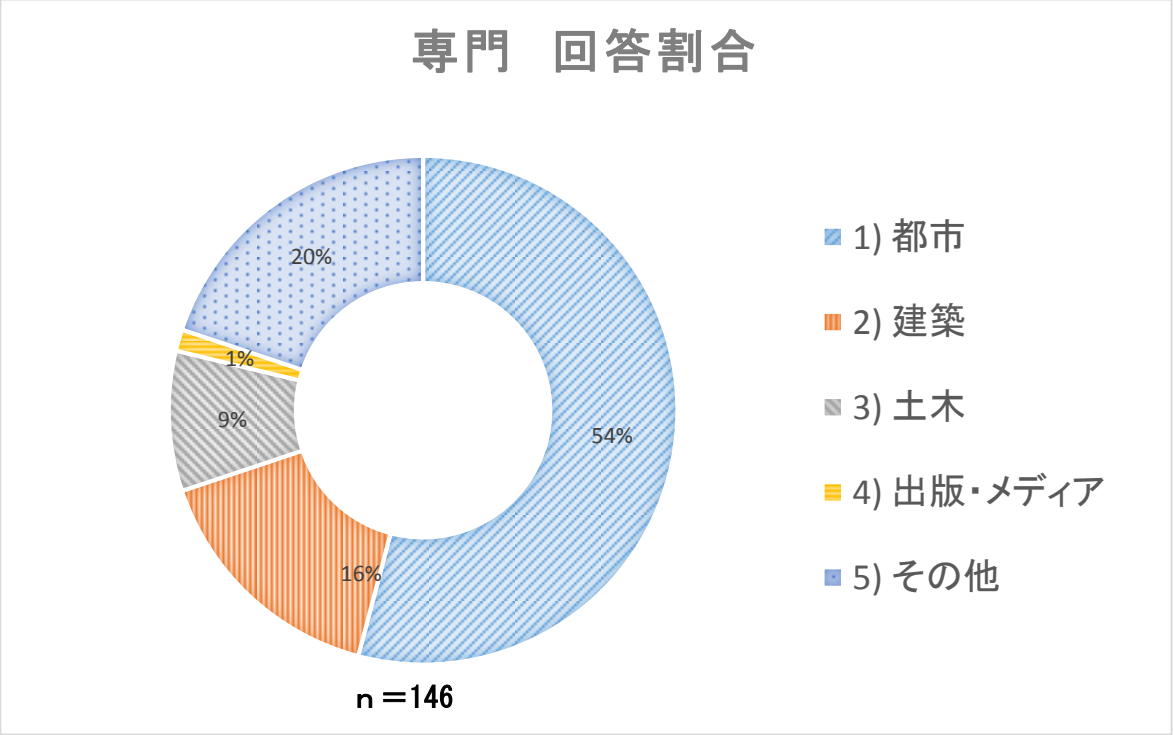
シンポジウム当日アンケート集計結果

専門

座談会と比較して、「1）都市」の割合が 18 ポイント高い。

専門

	合計
1）都市	79
2）建築	23
3）土木	13
4）出版・メディア	2
5）その他	29
有効回答者数	146



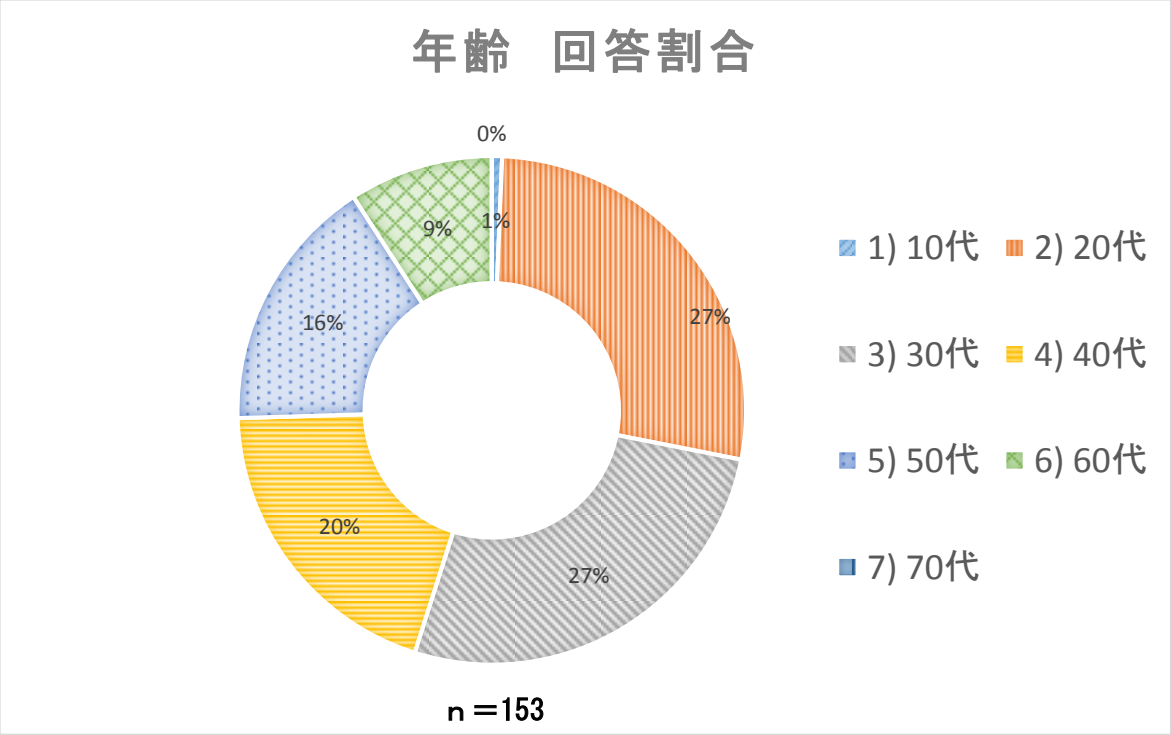
シンポジウム当日アンケート集計結果

年代

座談会と比較して、20 代、60 代の割合が高くなっている。

年代

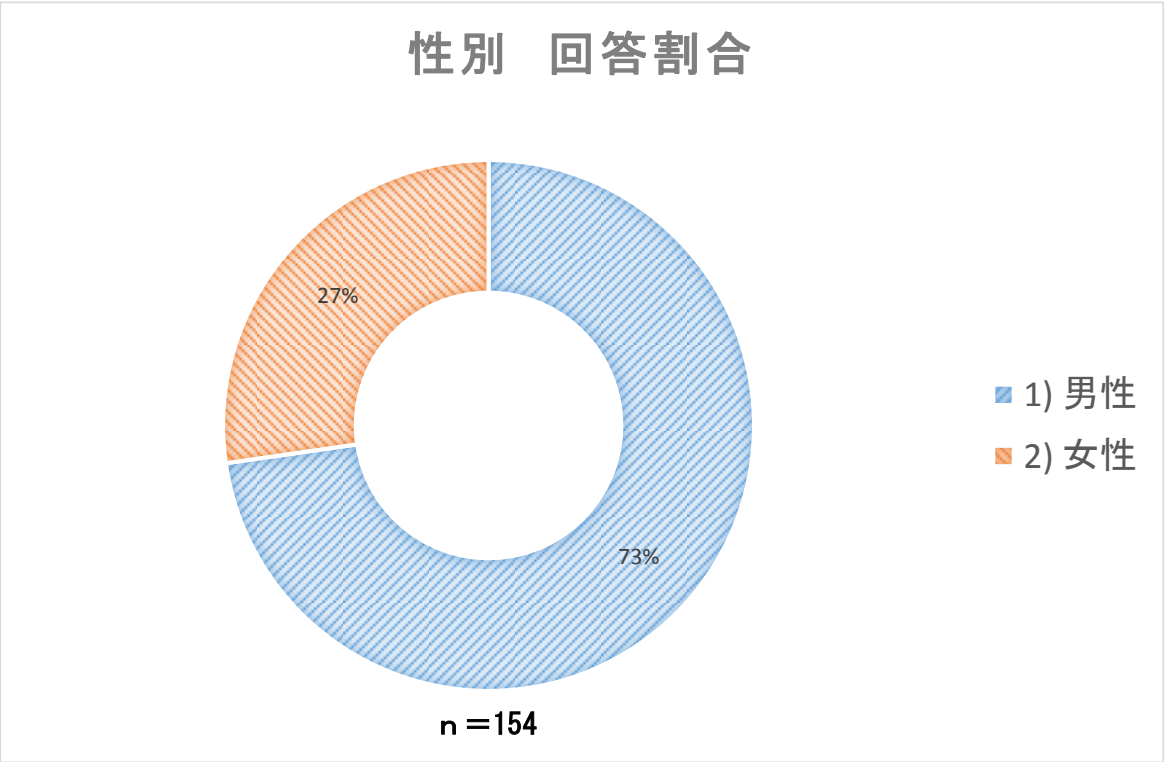
	合計
1) 10代	1
2) 20代	42
3) 30代	41
4) 40代	30
5) 50代	25
6) 60代	14
7) 70代	0
有効回答者数	153



シンポジウム当日アンケート集計結果

性別

	合計
1) 男性	112
2) 女性	42
有効回答者数	154



シンポジウム当日アンケート集計結果

出席者のお住まい

都市	人数
東京都	67
千葉県	22
神奈川県	14
大阪府	9
埼玉県	6
愛知県	5
福島県	3
山形県	3
北海道	2
茨城県	2
長野県	2
熊本県	2
富山県	2
福岡県	1
静岡県	1
宮城県	1
岐阜県	1
岡山県	1
三重県	1
奈良県	1
沖縄県	1
香川県	1

参加者の都道府県マッピング

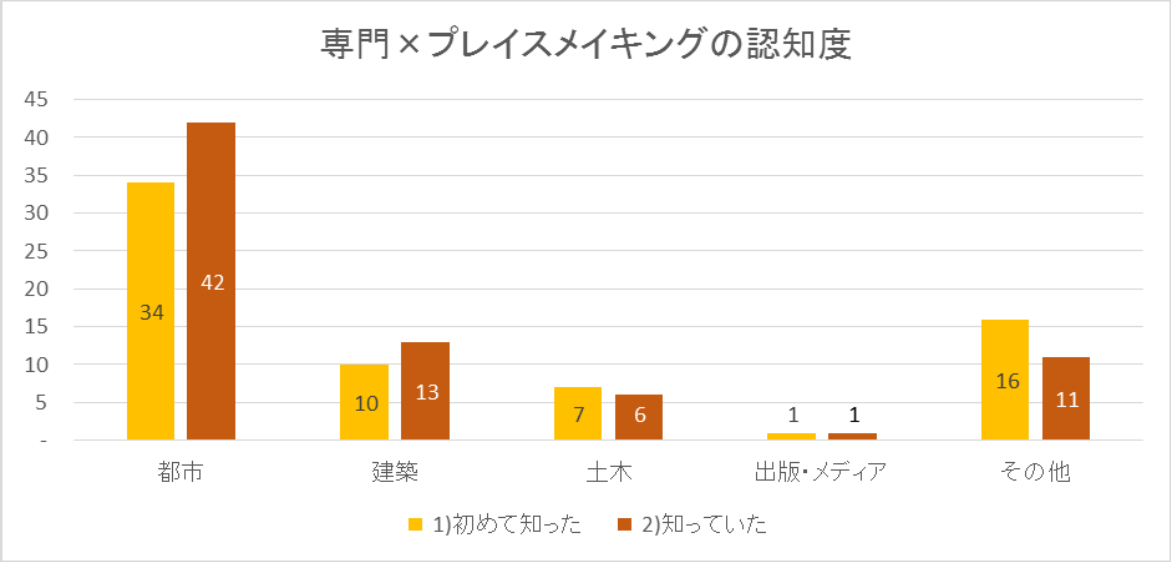
シンポジウム当日アンケート集計結果

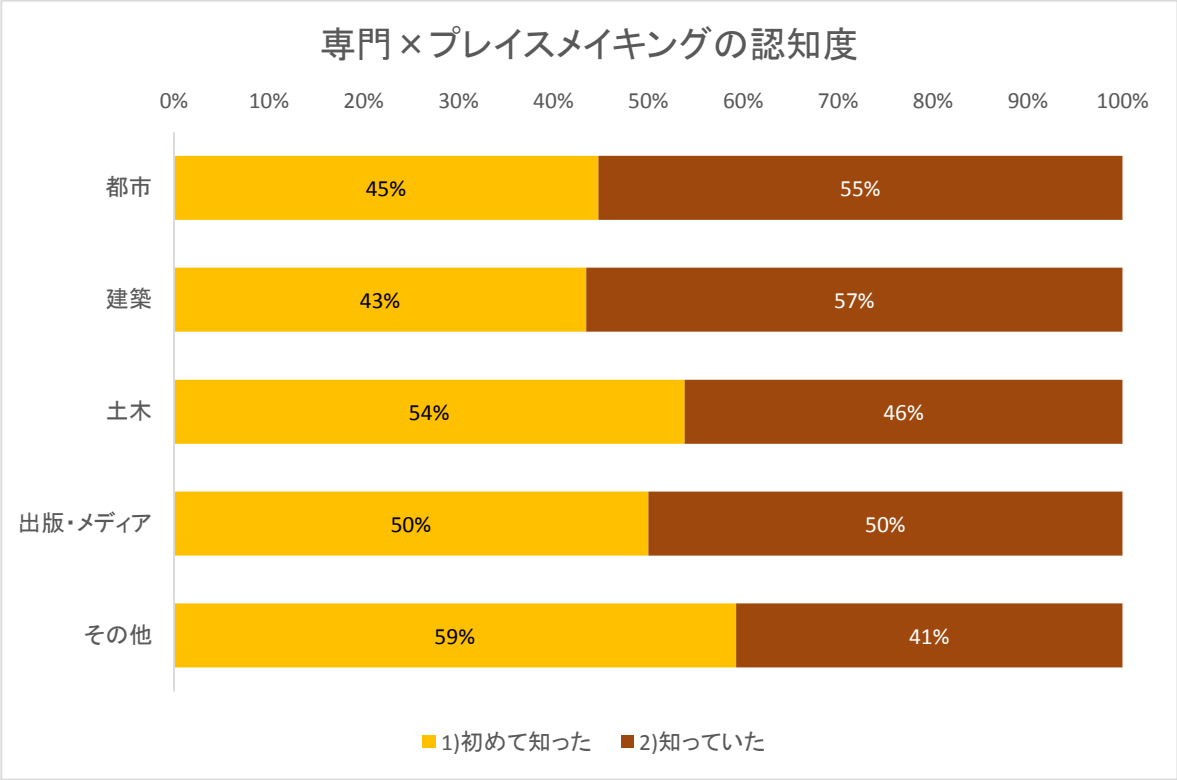
クロス集計 1. 専門×プレイスメイキングの認知度

座談会（Q5-1）と比較してシンポジウムの参加者はプレイスメイキングの認知度が高い。

クロス集計1. 専門×プレイスメイキングの認知度

	1)初めて知った	2)知っていた
都市	34	42
建築	10	13
土木	7	6
出版・メディア	1	1
その他	16	11





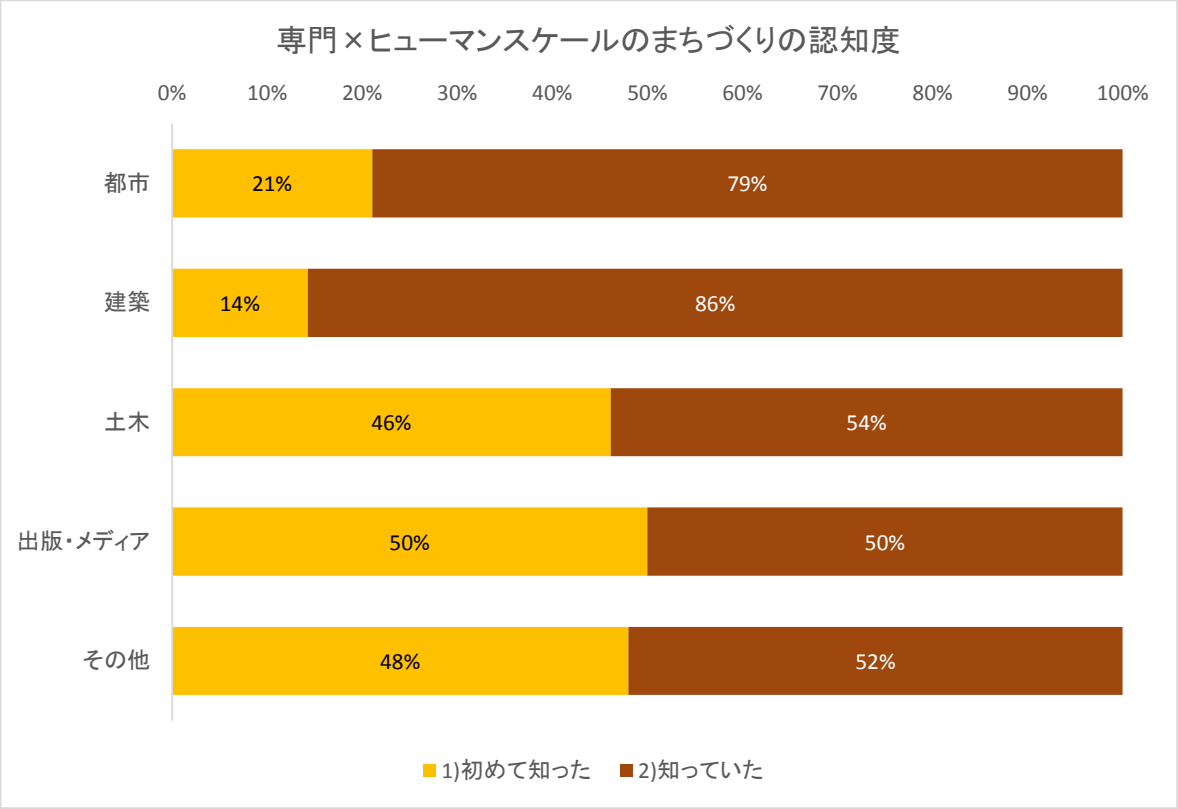
シンポジウム当日アンケート集計結果

クロス集計 2. 専門×ヒューマンスケールのまちづくりの認知度

Q5-2 にて座談会と比較してシンポジウムの参加者はヒューマンスケールのまちづくりの認知度が高いことが明らかとなった。専門別にヒューマンスケールのまちづくりの認知度を集計すると、座談会と比較して「建築」「都市」で「2)知っていた」の割合が高くなっており、全体の認知度が高さに繋がったと考えられる。

クロス集計2. 専門×ヒューマンスケールのまちづくりの認知度

	1)初めて知った	2)知っていた
都市	16	60
建築	3	18
土木	6	7
出版・メディア	1	1
その他	12	13



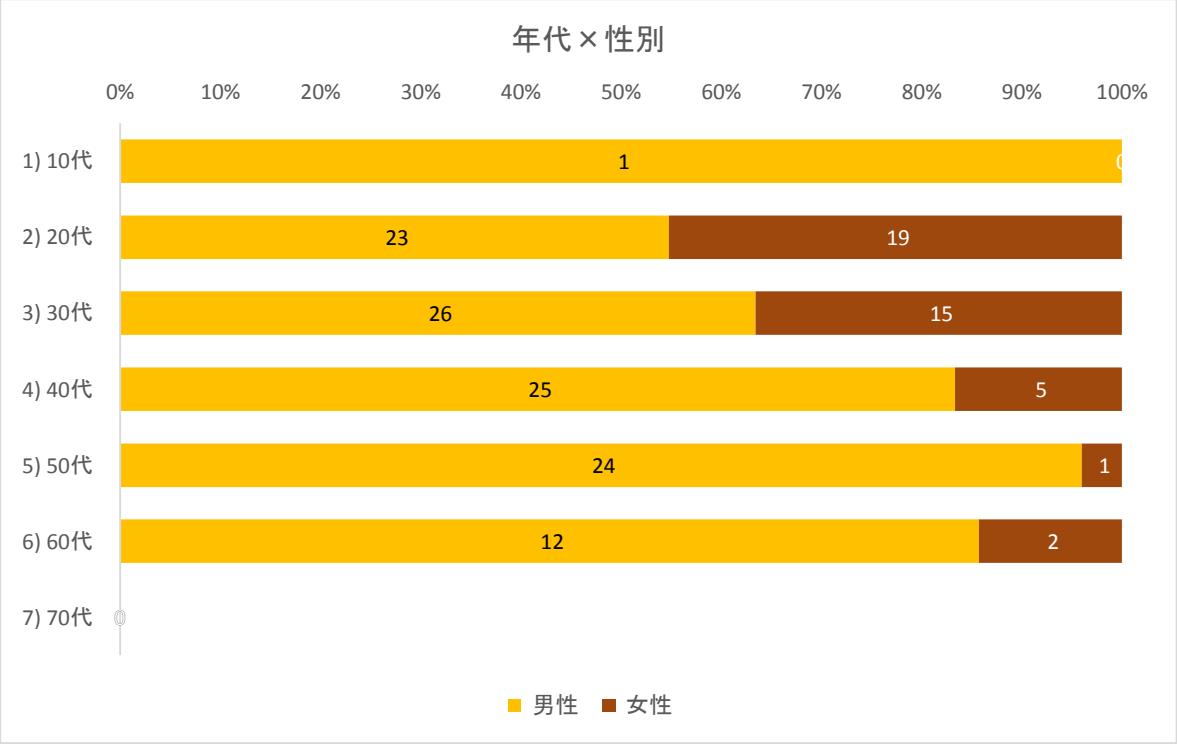
シンポジウム当日アンケート集計結果

クロス集計 3. 年代×性別

座談会と同様に、男性と比較して女性の参加者は少ないものの、世代別に見ると、女性の参加者の割合が、若い世代ほど高くなっていることが分かる。

クロス集計3. 年代×性別

年代	男性	女性
1) 10代	1	0
2) 20代	23	19
3) 30代	26	15
4) 40代	25	5
5) 50代	24	1
6) 60代	12	2
7) 70代	0	0



シンポジウム当日アンケート集計結果

登壇者のキーワード：基調講演・ショートプレゼンテーション

Jan Gehl 氏	人数	Birgitte Svarre 氏	人数
lively livable city・ healthy city・ 人間の中心のまちづくり	40	ツールの重要性・12の質的基準	34
モスクワ・ニューヨーク・メルボルン等海外の新しい取組	20	実験する・観察する・評価する	29
みちを変える・歩行者,自転車中心の街	18	ニューヨークにおける文書化の効果	12
コペンハーゲンのまちづくり	9	神楽坂への提言	11
交流の場・大人の遊び場	9		
調査すること・実験すること	7		
人間の行動心理・一杯のコーヒー	6		

シンポジウム当日アンケート集計結果

登壇者のキーワード：鼎談

Jan Gehl 氏	人数	北原　理雄　氏	人数	渡　和由　氏	人数
人々を同じ空間に集める コミュニケーションをとる	26	千葉での実践 サイドウォーク ミュージアム	16	可動椅子による自由に使える空間	36
カフェ文化	23	実験・分析の重要性	9	人をどこに置くかを考える・人のビオトープ ・human good habitat	8
人に良いことは経済にも良い	6	ストック活用の時代	6	用途指定がない空間	6
調査すること・実験すること	5	モノ・ヒト・コト	6	富山市・茨城・栃木の実践	4
コペンハーゲンのまちづくり	1	コミュニケーションの場(コーヒー・椅子)	4		
ニューヨークの新しい取組	1	使う人がアレンジできる余地を残す	3		

シンポジウム当日アンケート集計結果

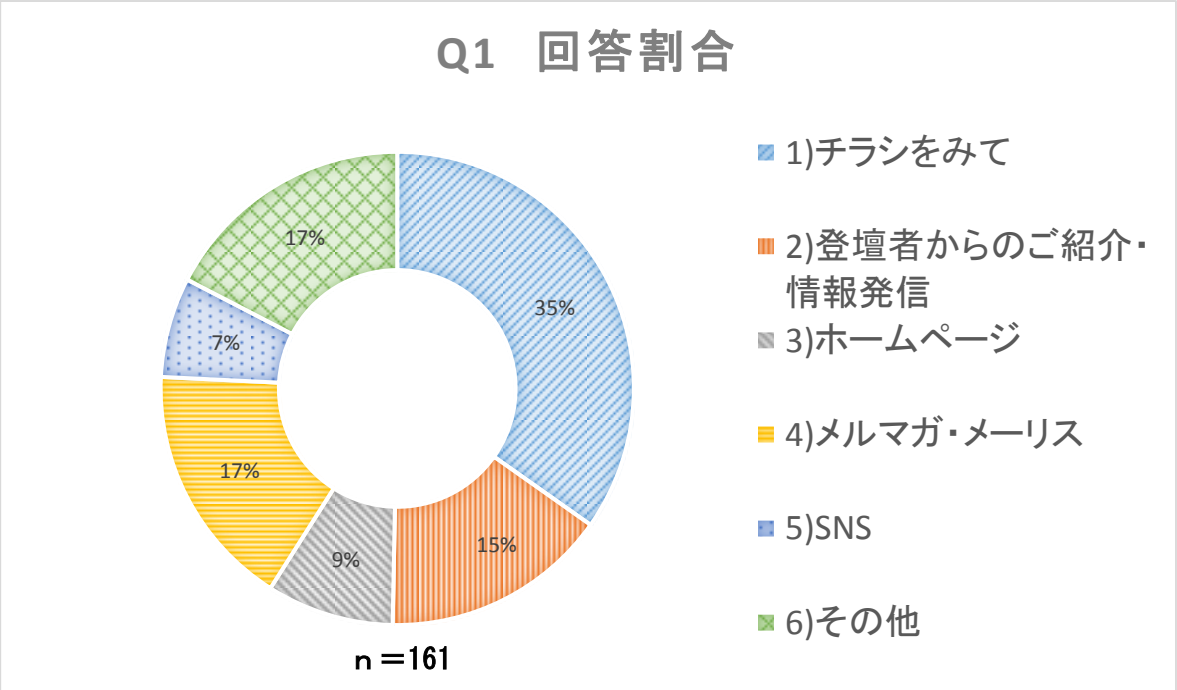
登壇者のキーワード：パネルディスカッション

松村　秀一　氏	人数	西村　浩　氏	人数	伊藤　香織　氏	人数	渡　和由　氏	人数
「箱の産業」から「場の産業へ」	18	「わいわい！コンテナ」・「原っぱ」・実験してみる	28	ピクニック・自分の居場所を作る	32	座れる場・眺める場・食場(稼働椅子によるアクティビティの創出)	23
ヴィジョンよりもプロセスのほうが確信を持てる	12	たまねぎ戦法	17	都市の価値は能動的交流 ・小さな主体	22	人をどこに置くかを考える・人のビオトープ ・human good habitat	15
首長・住民に共感してもらう	5	空き地の価値（空き地が増えるとまちが賑わう)	13	ブライアントパーク	3	メディア戦略(つくばスタイル)	12
小さな地権者	4	地方都市におけるコンパクトなまちづくり	13	交流の為の適度な賑わい	3	生活の生業から生まれるプレイスメイキング	9
ショッピングセンターと中心市街地の比較	2	民間資本による小さなリノベーションまちづくりと公共資本による大きなストック活用まちづくり	8	人のためのまちづくり	2	8つの鍵	5
		一年一年「変わったね」という実感を積み重ねる	7	居住と滞在	2	ブライアントパーク	4
		敷地に価値なし、エリアに価値あり	7				
		線引き型から誘導型へ	5				
		赤(禁止)を青(出来る)に変える	5				
		学校をなくさない・子供たちが体験するまち	4				

シンポジウム　事前アンケート集計結果

Q1. 今回のプレイスメイキングシンポジウムをお知りになったきっかけをお教えください

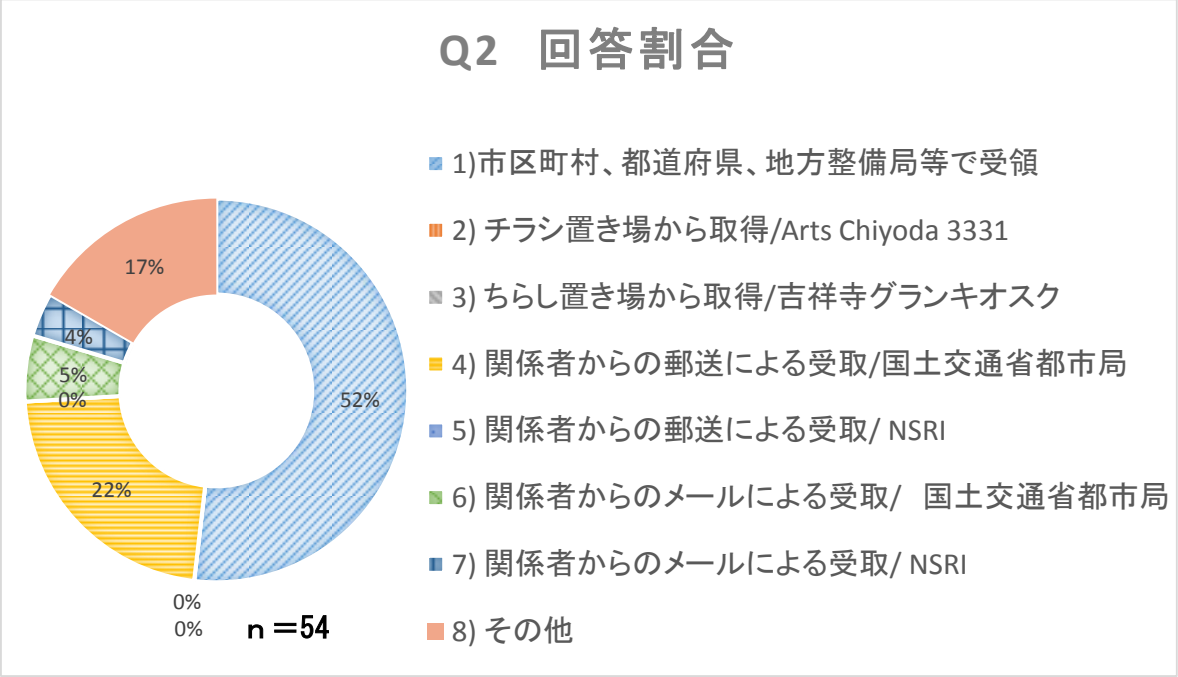
	合計
1)チラシをみて	56
2)登壇者からのご紹介・情報発信	25
3)ホームページ	14
4)メルマガ・メーリス	27
5)SNS	11
6)その他	28
有効回答者数	161



シンポジウム　事前アンケート集計結果

Q2.『 A. ちらしを見て 』とお答え頂いた方に質問です。ちらしを受取られた方法をお教えください

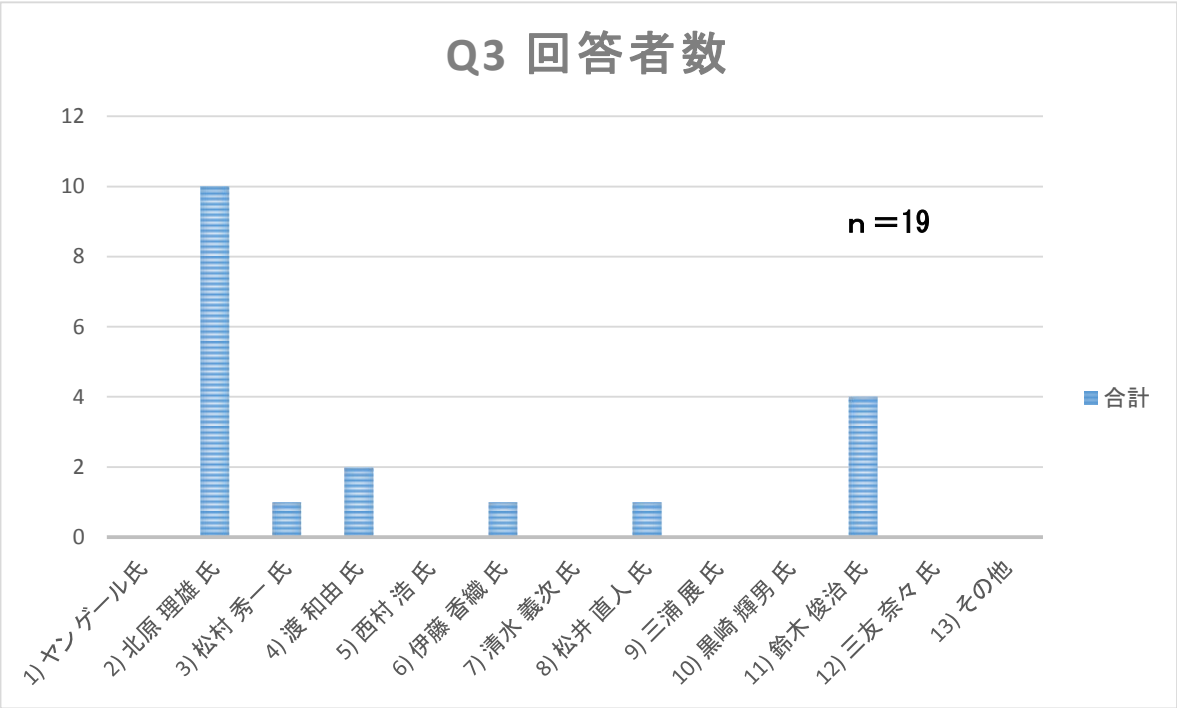
	合計
1)市区町村、都道府県、地方整備局等で受領	28
2) チラシ置き場から取得/Arts Chiyoda 3331	0
3) ちらし置き場から取得/吉祥寺グランキオスク	0
4) 関係者からの郵送による受取/国土交通省都市局	12
5) 関係者からの郵送による受取/ NSRI	0
6) 関係者からのメールによる受取/　国土交通省都市局	3
7) 関係者からのメールによる受取/ NSRI	2
8) その他	9
有効回答者数	54



シンポジウム　事前アンケート集計結果

Q3.『 B. 登壇者からのご紹介 』とお答え頂いた方に質問です。どなたからのご紹介かお教えください

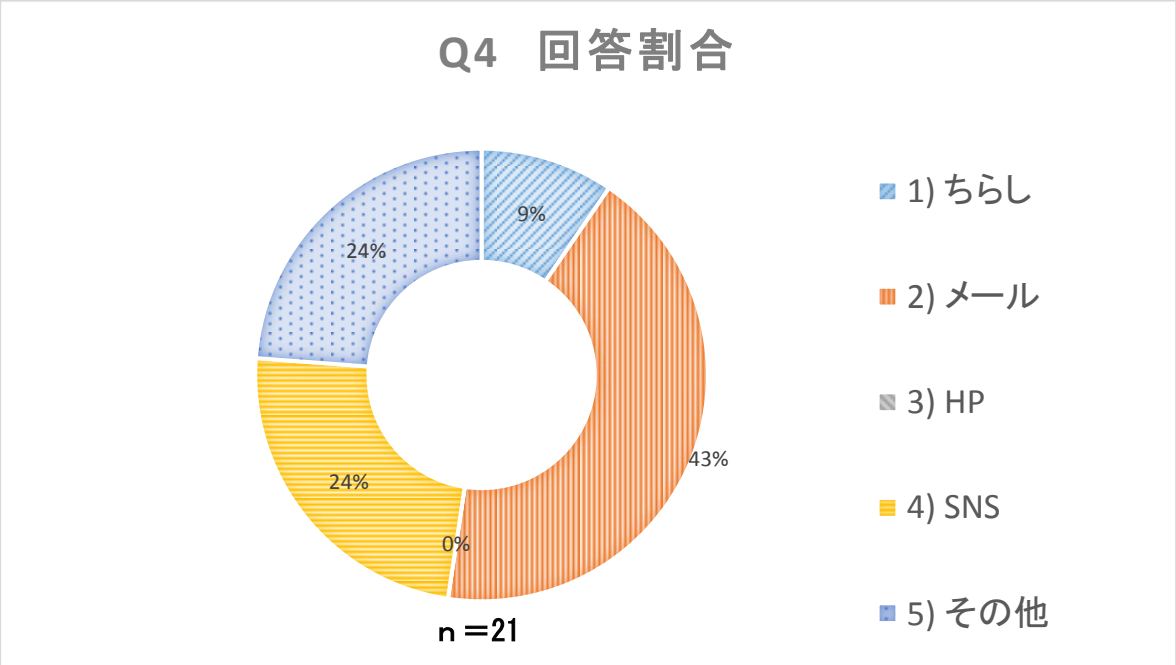
	合計
1) ヤン ゲール氏	0
2) 北原 理雄 氏	10
3) 松村 秀一 氏	1
4) 渡 和由 氏	2
5) 西村 浩 氏	0
6) 伊藤 香織 氏	1
7) 清水 義次 氏	0
8) 松井 直人 氏	1
9) 三浦 展 氏	0
10) 黒崎 輝男 氏	0
11) 鈴木 俊治 氏	4
12) 三友 奈々 氏	0
13) その他	0
有効回答者数	19



シンポジウム　事前アンケート集計結果

Q4.『 B. 登壇者からのご紹介 』とお答え頂いた方に質問です。どのような方法でご紹介を受けたかお教えください

	合計
1) ちらし	2
2) メール	9
3) HP	0
4) SNS	5
5) その他	5
有効回答者数	21



シンポジウム　事前アンケート集計結果

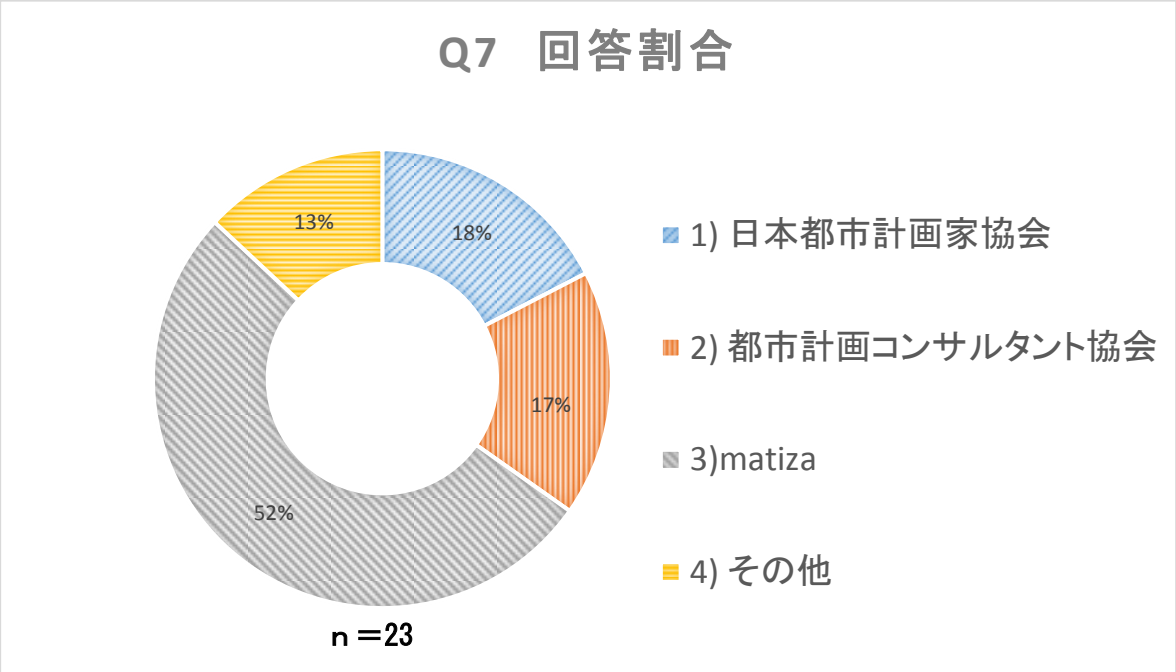
Q5.『 C. ホームページ 』とお答え頂いた方への質問です。どちらのホームページから情報を得たのかお教えください

	合計
1) 国土交通省都市局	12
2) 建築士会	0
3) 日本建築家協会(JIA)	0
4) その他	0
有効回答者数	12

Q6. Q5で建築士会のホームページとお答えになった方はその都道府県名をお教えください。
※該当者なし

Q7.『 D. メールマガジン・メーリングリスト 』とお答え頂いた方への質問です。どちらのメールマガジンから情報を得たのかお教えください

	合計
1) 日本都市計画家協会	4
2) 都市計画コンサルタント協会	4
3)matiza	12
4) その他	3
有効回答者数	23



Q8.『 E. SNS 』とお答え頂いた方に質問です。 どのSNSから情報を得られたのかお教えください

	合計
1) Facebook	8
2) Twitter	1
3) Line	0
4) その他	0
有効回答者数	9

４．普及啓発に関する成果物のとりまとめ

【　本章のサマリー　】

【普及啓発に関する成果物のとりまとめ】
・連続座談会、シンポジウムで得た、議事録、写真、映像記録をとりまとめた。
【広報方策に関する調査成果】
○座談会・シンポジウムの情報入手の手段としてチラシが多く利用されている。特に自治体職員では利用率が非常に高く、参加者も全国からみられたことから、広報手段としての有効性が確認された。
○情報発信力のある登壇者等の協力が重要。
○実務を理解し説明力の高い専門家に登壇者として協力を得ることが重要。

【今年度調査で確認された課題】
①特に座談会における大学関係者及び学生の参加比率が低い。シンポジウムに参加した大学関係者・学生は、参加動機について、「ヤン・ゲール氏に興味があった」とするものが多く、専門分野で著名な登壇者に誘引される傾向が高い。大学関係者、学生等への周知に対しては、有効な広報媒体を見出すことができなかった。
②今後、実例を増やすには、単なる成功例や効用の紹介だけでは届かず、実例を見せたり実証することにより理解を深めることが必要。
③リーフレットのデザインや記録映像作成にはその分野のプロの協力が重要。また、PR 上効果が高い動画等の製作には一定の予算（少なくとも１千万程度）も必要。

【来年度の検討課題】
（１）大学等の研究教育機関と連携しながらの普及啓発策の検討
（２）説明力のある実務家、専門家を核とした情報発信、交流の場づくりの支援

（１）普及啓発に関する成果物のとりまとめ

連続座談会、シンポジウム等で得た、記録、写真、映像資料をとりまとめた。

（２）調査結果に対する考察

本調査で実施した普及・啓発のための広報方策（座談会、シンポジウム）では、予定した定員を大幅に超える参加者を得た。また参加者の９割以上が内容に満足している、内容がわかった、と回答していることから満足度、理解度の点でも高い成果を残した。アンケートに回答した参加者のほぼ全員が今後、「もっと情報を知りたい」と回答していることからも、普及啓発のニーズは高いものと考えられる。

以下では本調査の実施を通じて得られた知見、課題等、考察を整理する。

≪広報に関して得られた成果≫

〇広報手段としてのチラシの有効性

座談会・シンポジウムの参加者が情報入手の手段として最も多く利用していたのは、速報版のちらし及びリーフレットを含む紙媒体のチラシであった。特に自治体からの参加者では、利用の比率が高く、全国から参加者も見られたことから、広報手段としてのチラシの有効性が確認された。

〇情報発信力のある専門家の協力の重要性

情報入手の手段として、チラシの他、「登壇者による紹介」を挙げる人が多く見られた。各方面への情報発信に協力的で、伝播力のある登壇者やコーディネーターを登用することが重要であることが確認された。

〇実務を理解した説明力の高い専門家の協力の重要性

座談会、シンポジウムは参加者の満足度や理解度の面において全般的に高い評価を得ることができたが、特に評価が高い回では、専門家が自らの実務経験に基づいた説得力のある話題を提供しており、「印象に残ったキーワード」も特定の言葉に集中する傾向がみられた。多くの参加者が明解なメッセージを受け止めたことがうかがえ、効果的にメッセージを伝えるという観点で、説明力の高い専門家に登壇者やコーディネーターとして協力を得ることが重要であることが確認された。

≪確認された課題≫

①大学関係者や学生の関心が低い

今回の座談会は満足度や理解度において参加者から高く評価されており、関心度は高い。また、3 回の座談会を振り返ったパネルディスカッションを受けて、ヤン・ゲール氏が「世界各地の人にインスピレーションを与えるような､そういう話が出た」との感想を語っているなど、専門家にとっても興味深い内容であったことがうかがえる。

しかしながら、座談会では大学関係者と学生の参加比率が非常に低かった。シンポジウムでは大学関係者と学生も一定数の参加を得ていることから、座談会は存在を認知しつつも参加し

なかった人も多いと考えられる。シンポジウム参加者に対するアンケートの回答からは、大学関係者と学生では参加動機として「出演者に興味があった」ことを理由に挙げる人が多く、またその全てがヤン・ゲール氏に対する関心であると回答している。この分野において世界的に著名な専門家（ヤン・ゲール氏）の登壇がシンポジウム参加への動機づけになったものと考えられる。

プレイスメイキングに関してはその定義も様々であり[6]、我が国においてはプレイスメイキングを研究対象とする研究者も限られている[7]。同様に、ヒューマンスケールのまちづくりに関しても各々に定義や解釈が行われており[8]、それが一般市民の理解を妨げ、混乱させる一因ともなっていると考えられる。こうした点を踏まえると、今後はより多くの研究者等に関心をもって頂き、その積極的な協力を得ながら、普及啓発を進めていくことが求められる。

②単なる成功例の紹介等にとどまらず実例を見せたり実証したりすることが必要

ヒューマンスケールのまちづくりの第一人者であり、数多くの実践例を手がけてきたヤン・ゲール氏は、世界各地でヒューマンスケールのまちづくりを進める際に、実際にやってみせないことには、人々の理解が進んでいかないことを語っている[9]。また、同様な指摘はその他の登壇者の発言でも聞かれた[10]。

プレイスメイキングやヒューマンスケールのまちづくりに対する理解が進み、取り組みが広く行われるようにするには、単にその考え方や事例を紹介するだけでは届かず、実例を見せたり実証することにより理解を深めることが必要である。

③ＰＲ媒体や記録映像製作においてプロを活用する必要性

本調査で制作したリーフレットは、今回のシンポジウムの広報上最も重要なツールとなった。調査事務局で把握している限りにおいても、「見やすい」「手に取りたくなる」「楽しそう」「面白い」といった好評価を得ており、広報ツールとして有効に機能したと考えられる。このような広報ツールの製作においては、都市分野等を専門とする受託事業者のノウハウだけでは十分ではなく、デザインを生業とするプロの協力を得ることが効果的であった。本リーフレットの作成においても、今回のプロジェクトに理解があり、美術系の大学でも講師を務めるなど、一定の経験と実績を有するデザイナーの協力を得て製作を行った。

座談会、シンポジウムの記録用映像の撮影・編集に関しても専門の業者への委託を行う必要

---

[6] 第３回座談会における日本大学三友奈々助教の発言による。
[7] 「プレイスメイキング」をタイトルに含む論文は非常に少なく、筆者もある程度特定されている。
[8] 「ヒューマンスケールのまちづくり」の利用例をインターネットで検索すると、様々な人の用例が見つかるが利用者により意味がまちまちで統一した定義が見当たらない。
[9] 「ヒューマンスケールのまちづくりは、アメリカではできない、オーストラリアではできない、中国ではできない、できる場所はないと主張する人は数多くいた。ただ、そのような街で実際に数年間実施すると、やがて彼らはこう言い出す。『私はそんなことは言っていない』と。」（11 月 26 日シンポジウムの打合せにて）
[10] 「実は歩行者を中心にしたところ地価も上がり、売り上げも伸びて税収も増えたという事例はたくさんあります。こうした事例を示しながら、このまちでもこういうふうにすればきっとまちに元気が出る、人はより多くきて儲かる。そういったことをしっかり伝えることが不足しているので、自動車社会に慣れ、現状維持バイアスに縛られている人たちは反対する。そうではないということを、具体事例を示しながらきちんと伝えていくことが一番重要なことではないかと思います。」（第１回座談会・松井直人氏）

があった。北九州リノベーションスクールの取り組みを参考にすると、このようなプログラムでは、会場全体の様子、登壇者相互の対話の情景、登壇者の表情、プレゼンテーションの内容を同時に記録する必要があるだけでなく、将来の普及・啓発における活用に備えて、一定の画質で保存することが求められる。また、記録用資料としても、会場の様子やプレゼンテーションの内容、登壇者の話す様子などが同時にみてとれることが好ましく、そのためには、最低限の編集作業が必要である。さらに、通常のパソコンでも支障なく視聴できるなど、汎用性を持たせるため、これらの映像データの容量を圧縮する作業も必要となる。こうしたことから、本調査では、専門の業者に委託し、3 台のビデオカメラによって撮影を行い、映像データの編集を行うなど、外部の専門家の協力を必要とした。

写真を記録する際には、後に広報を行う際の効果的な素材を確保するため、説明力のある写真を撮影する必要がある。今回はその点に課題が残った。広報素材の活用イメージについて検討した上で、具体例などをもとにした外部専門家との十分なイメージ共有を撮影前に行っておくことが重要である。

また、ＰＲ効果の高いプレゼンテーション方法を取り入れることも必要で、広報の専門家等の協力も不可欠となる。本調査の過程で実施したヒアリング結果によると、ＰＲに効果の高いとされる動画を活用した広報媒体の制作、及び紙媒体の制作等を一体に行う場合、少なくとも一千万円程度の費用がかかるとされており、そのための予算措置も課題となる。

（３）来年度の検討課題

≪今後の普及啓発に向けての基本認識≫

本調査では、「居心地のよい、賑わい活気のある都市空間、歩行者空間を創出する」取り組みの普及が、マーケティングでいう初期市場段階にあると想定して広報方策を検討した。現在は、本調査の中で有識者が紹介した事例[11]など、一部の自治体等が先駆者（イノベーター）として先進事例と呼ばれる実践例の成果を挙げ始めている段階にあり、今後は、その動きを追いかける取り組み意欲の高い自治体等（の首長）を対象とした普及啓発が重要となる。これはマーケティングの世界の用語でいえば、「ビジョナリー（アーリーアダプター）」と呼ばれる顧客層への普及啓発ということになる[12]。

ビジョナリーへの普及啓発を行う際に大切な点は、①普及啓発に取り組む主体が自らトップセールスを行うこと、②ビジョナリーが目指すところを完全に理解し、その目標を達成できることをビジョナリーに納得させるため、普及啓発の特別チームを編成することである。そして、担当者には、経験に裏打ちされた優れた営業能力が求められる。また、普及啓発対象であるビジョナリーをどのように見出すか、という点に関しては、ビジョナリーに対して先進的な情報をもたらす、「テクノロジーマニア」の関心を集めることが重要であるとされている[13]。

これをまちづくりの世界におきかえて考えると、トップセールスの重要性や特別チームを編成することの効果については、北九州を始めとする諸都市で、清水義次氏らが自治体トップへの普及啓発を行っていることや、リノベーションスクールの運営において、ユニットリーダーと呼ばれる専門家集団が活躍している状況がこれに類するものと理解できる。また、まちづくりにおける「テクノロジーマニア」がどのように定義できるか、それをどう見出すことができるかは定かではないが、自治体が地域課題の解決を目指して新たな取り組みを検討する際、検討委員会などの場を通じて、学識経験者等から情報を得ている例が多くみられる実態を考慮すれば、まちづくりに関わる大学関係者等の一部はこれに該当するものと考えられる。

以上の点を踏まえると、今後の普及啓発においては、良質な専門家集団の協力を得ながら可能な限り自治体のトップやそれに近い人々への営業を行うこと、情報の媒介者となりうる大学関係者等の関心を高めること、などが重要であると考えられる。

---

[11] リノベーションまちづくりにおける、北九州市、豊島区、和歌山市、田辺市、熱海市、浜松市、山形市、鳥取市、その他西村浩氏の紹介した佐賀市、大分市など。
[12] 次頁の（参考）を参照のこと。
[13] ジェフリー・ムーア著「キャズム Ver2」p59

（参考）プレイスメイキングの広報展開　現段階での訴求対象とポイント

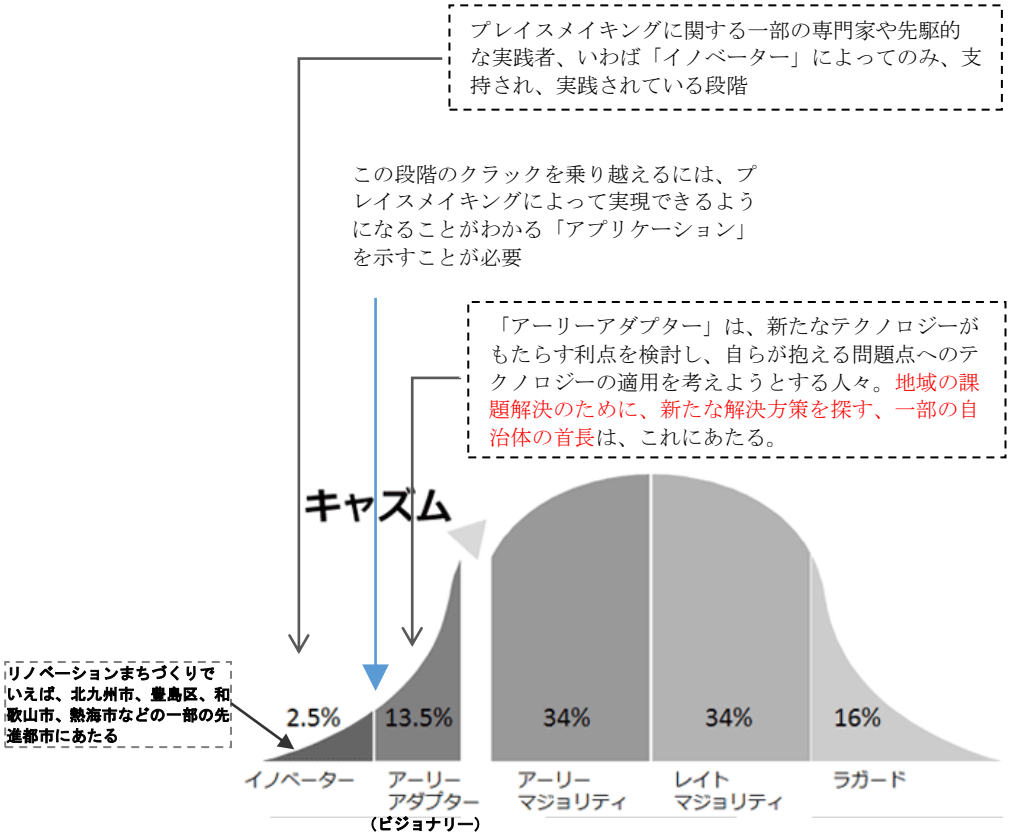
プレイスメイキングの普及・啓発のプロセスを、ある製品が市場に普及していく過程に読み替えると、現段階で必要なポイントが見えやすくなる。

ハイテク関連のマーケティングコンサルタントとして世界的に知られるジェフリー・ムーアは、新たな製品が市場にどのように受け入れられていくかを理解するため、「テクノロジー・ライフサイクル」と呼ばれるモデルによりそのプロセスを解説している。これは、製品が市場に受け入られる過程において、顧客層がどのように変遷するかという観点でとらえたもので、そのプロセスは「イノベーター」、「ビジョナリー（アーリーアダプター）」等、顧客層によって大きく５つに分かれる。

プレイスメイキングに関していえば、日本ではまだ、限られた人々によって認知されているに過ぎず、実践しているのは、ごく一部の専門家や先進的な事例に携わる人々など、さらに限られている。これらの人々は、５段階の中での「イノベーター」に位置する。

現状におけるプレイスメイキングの広報展開の最大の課題は、「いかに『ビジョナリー（アーリーアダプター）』を掴むことができるか」であると考えられる。

ジェフリー・ムーアによると、それぞれの過程の間には、クラック（溝）があり、それを乗り越えられなければ、次の段階に進むことができないという。[14]



プレイスメイキングの普及啓発をテクノロジー・ライフサイクルにあてはめてみた場合の状況

[14] 「アーリーアダプター」と「アーリーマジョリティー」の間にある溝は最も大きく、「キャズム」と呼ばれる。

≪来年度の検討課題≫

本調査では、「居心地を良くし、賑わい・活気のある都市空間・歩行者空間を創出する」取り組みの普及・啓発を図るため、この分野の有識者を登壇者とする招いた連続座談会・シンポジウム事業を企画、開催し、取り組みの有効性や重要性、先行事例の提示を行った。

広報方策としての座談会・シンポジウム事業に対する考察等から、今後は、①大学等の研究教育機関と連携しながらの普及啓発策の検討、②説明力のある実務家、専門家を核とした情報発信、交流の場づくりの支援、が必要と考えられる。

○大学等の研究教育機関と連携しながらの普及啓発策の検討

座談会・シンポジウムの開催を通じて、有識者からはプレイスメイキングに関する数多くの具体例や重要となる考え方の提示が行われた。有識者の発言は、その職能や立場、専門性が異なっていてもその基本的な方向性は共通しており、この取り組みの重要性、有効性を示唆するものであったが、大学関係者や学生の関心は低い。

大学等の研究教育機関はまちづくりをリードする専門家育成の要であり、普及啓発における情報媒介の可能性を考慮しても、今後は大学関係者等の関心を高めていくことは重要である。そのため、今後は、大学関係者や学生に普及啓発の当事者として積極的に関与してもらうこと、また学会等のネットワークを活用しながら情報発信を進めていくことも有効と考えられる。その際、ヤン・ゲール氏が心理学等の視点を取り入れながらアプローチしてきたように、心理学、社会学、景観工学や経済学など関連する学術分野の研究者（やその知見）も取り込む学際的な取り組みとして進めていく観点も重要と考えられる。

・専門家育成の要である多分野の大学関係者や学生を運営体制に巻き込んだ普及啓発策の検討、学会やそのネットワークを活用した情報発信の強化　等

○説明力のある実務家、専門家を核とした情報発信、交流の場づくりの支援

本年度は、座談会やシンポジウムの実施を通じて、自ら手掛けた実践例を経験している話のわかりやすい実務家や専門家に協力してもらうことが、メッセージを伝える上で効果があるということが確認された。理解を進めるためには、実例を見せたり実証することが有効であるとの有識者のコメントも得ることができた。

来年度以降は、専門家の力を生かした普及・啓発の方法として、説明力ある実務家や専門家の協力を得て実例に関する詳しい解説をしてもらったり、専門家と交流できる機会をつくるなど、情報発信や交流の場づくりを支援していくことが考えられる。またその際に自治体トップに近い立場の人々に伝えていくという点も考慮する必要がある。これにより、座談会やシンポジウムよりもさらに具体的で実践的な内容に関する理解が得られると同時に、プレイスメイキングやヒューマンスケールのまちづくりを実践するためのネットワークの拡大も期待される。

・説明力のある実務家、専門家を核とした、ノウハウ等の情報発信やネットワーク形成を促す交流の場づくりの支援　等

補助金に依存しない自立的・継続的な公民連携まちづくり活動の更なる展開を図るための基礎的調査

報告書

平成 27 年 1 月

発　　行　　国土交通省　都市局　まちづくり推進課
連 絡 先　　〒100-8918
東京都千代田区霞が関 2-1-3
電　　話　　03-5253-8111（代表）
Ｆ　Ａ　Ｘ　　03-5253-1589

調査受託機関　　㈱日建設計総合研究所
東京都千代田区飯田橋二丁目 18 番 3 号